

# 樽味四反地遺跡

-12次・13次調査-

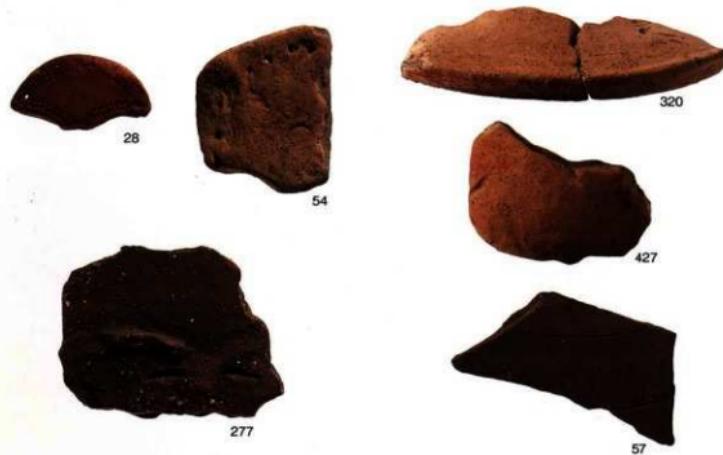
平成17年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2009

松山市教育委員会  
財団法人松山市生涯学習振興財団  
埋蔵文化財センター



卷頭図版1 榛味四反地遺跡13次調査3号大型建物（北東より）



卷頭圖版2 檸味四反地遺跡12次・13次調查出土遺物 (12次: 28・54・57・71、13次: 277・320・427・444)

## 序

本書は、平成10年の樽味四反地遺跡6次調査並びに平成15年の同8次調査によって確認された、西日本有数の規模を誇る弥生時代後期末から古墳時代初頭の大型建物址2棟につづき、3例目の大型建物址という大きな発見に繋がった樽味四反地遺跡12次、13次調査の報告です。

樽味四反地遺跡は、松山平野の中心部を南西に流れる石手川中流域左岸、川の氾濫によって形成された標高39.2mの扇状地上に位置し、これまでの埋蔵文化財発掘調査によって、大型建物址のほか、縄文時代から中世にかけての集落関連遺構や遺物が確認されています。

今回の調査は、重要遺跡確認調査の一環として、大型建物址を中心とする遺跡の範囲確定とその前後の時期の集落の分布状況の確認をめざして、大型建物址が発見された樽味四反地遺跡6次調査地の西隣と、同8次調査地の南隣に調査区を設定して実施したものです。3例目の大型建物址は13次調査地から発見され、弥生時代中期から古代までの遺構、遺物も確認できています。

大型建物址3棟はまだまだ多くの謎を秘めております。本書が、多くの方々と問題を共有しながら謎解きに向かう原動力になることを祈っております。

最後に、発掘調査および報告書刊行に、ご協力いただきました地権者ならびに周辺の住民の方々、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成21年3月31日

松山市教育長 山 内 泰

## 例　　言

1. 本書は松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団が国庫補助事業として、平成17年度に実施した松山市柳味地区における埋蔵文化財の発掘調査報告書である。なお、本報告書は平成20年度の国庫補助事業として刊行したものである。
2. 本文中では遺構名を略号化し、竪穴住居：SB、掘立柱建物：掘立、溝：SD、土坑：SK、柱穴・小穴：SPで記述した。
3. 本書で使用した標高数値はすべて海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。
4. 基本土層や遺構堆土の色調は農林水産省農林水産技術會議事務局監修『新版標準土色帖』(1998)に準拠した。
5. 屋外調査での写真は調査担当者と大西朋子が、遺物写真と図版作成は大西が担当した。
6. 遺構の実測は相原秀仁、遺物の復元及び実測・製図は相原の指示のもとに、山下満佐子、平岡直美、西本三枝、木西嘉子、森田利恵、鈴鹿八恵子、高尾久子、山邊進也、黒田竜弥、堀眞也がおこなった。
7. 掘岡の縮尺は縮分値をスケール下に記した。遺物実測図は原則として、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器は1/4、石器、金属製品は1/2、石礫は2/3、玉類は1/1とした。
8. 調査では下條信行（元愛媛大学）、前岡実知雄（奈良芸術短期大学）、長井數秋（日本考古学协会会员）、名本二六雄（日本考古学协会会员）の諸先生方にご指導、ご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。
9. 屋外調査における国土座標測量は、国際航業株式会社に業務を委託した。
10. 本書の執筆は相原がおこなった。編集は相原が担当し宮内、山下、平岡の協力を得た。添書は相原の指示のもと平岡が担当した。
11. 本書に掲載した記録類や遺物は、松山市立埋蔵文化財センターにおいて保管されている。

# 本文目次

第1章 はじめに .....	1
1. 調査に至る経緯	
2. 刊行組織	
3. 立地と環境	
第2章 榛味四反地遺跡12次調査 .....	9
1. 調査の経緯	
(1) 調査の経緯     (2) 調査組織	
2. 層位	
(1) 基本層位     (2) 検出遺構・遺物	
3. 遺構と遺物	
(1) 竪穴住居     (2) 掘立柱建物     (3) 溝     (4) 土坑	
4. その他の遺構と遺物	
(1) 柱穴     (2) 包含層出土遺物     (3) 地点不明出土遺物	
5. 小結	
第3章 榛味四反地遺跡13次調査 .....	31
1. 調査の経緯	
(1) 調査の経緯     (2) 調査組織	
2. 層位	
(1) 基本層位     (2) 検出遺構・遺物	
3. 弥生時代の遺構と遺物	
(1) 竪穴住居     (2) 溝     (3) 土坑	
4. 古墳時代の遺構と遺物	
(1) 竪穴住居     (2) 掘立柱建物     (3) 溝     (4) 土坑	
5. その他の遺構と遺物	
(1) 時期判断が困難な遺構     (2) 柱穴     (3) 包含層出土遺物	
6. 小結	
第4章 調査の成果と課題 .....	117

# 挿 図 目 次

## 第1章 はじめに

第1図 松山平野の地形概要図（縮尺1／200,000）	2
第2図 調査地位置図（縮尺1／3,000）	5
第3図 周辺主要遺跡分布図（縮尺1／25,000）	7

## 第2章 榛味四反地遺跡12次調査

第4図 調査地位置図（縮尺1／250）	11
第5図 遺構配置図（縮尺1／100）	12
第6図 調査壁土層図（縮尺1／50）	13
第7図 S B 1測量図（縮尺1／80）	16
第8図 S B 1出土遺物実測図(1)（縮尺1／4）	17
第9図 S B 1出土遺物実測図(2)（縮尺1／2・2／3・1／1）	18
第10図 掘立1測量図・出土遺物実測図（縮尺1／80・1／4）	19
第11図 S K 1測量図（縮尺1／40）	20
第12図 S K 1出土遺物実測図（縮尺1／4・1／2）	21
第13図 S K 2測量図・出土遺物実測図（縮尺1／40・1／4）	22
第14図 S K 3測量図（縮尺1／40）	23
第15図 柱穴出土遺物実測図（縮尺1／4）	
第16図 包含層出土遺物実測図(1)（縮尺1／4）	24
第17図 包含層(2)・地点不明出土遺物実測図（縮尺1／4）	25

## 第3章 榛味四反地遺跡13次調査

第18図 調査地位置図（縮尺1／500）	34
第19図 北壁・南壁土層図（縮尺1／40）	35
第20図 西壁土層図（縮尺1／40）	37
第21図 遺構配置図（縮尺1／200）	39
第22図 S B 2・10測量図（縮尺1／50）	40
第23図 S B 2出土遺物実測図（縮尺1／4・2／3）	41
第24図 S B 4測量図（縮尺1／50）	43
第25図 S B 4出土遺物実測図（縮尺1／4）	44
第26図 S D 1・3・4・7出土遺物実測図（縮尺1／4・1／2）	46
第27図 S K 1測量図・出土遺物実測図（縮尺1／40・1／4）	47
第28図 S K 4測量図・出土遺物実測図（縮尺1／40・1／4）	48
第29図 S K 6測量図・出土遺物実測図（縮尺1／40・1／4）	49
第30図 S K 7測量図（縮尺1／40）	
第31図 S B 10出土遺物実測図（縮尺1／4・1／1）	51
第32図 S B 1測量図・出土遺物実測図（縮尺1／50・1／4・1／2）	53

第33図	S B 3測量図（縮尺1／50）	54
第34図	S B 3出土遺物実測図（縮尺1／4）	55
第35図	S B 5測量図・出土遺物実測図（縮尺1／50・1／4）	56
第36図	S B 6測量図（縮尺1／50）	57
第37図	S B 6出土遺物実測図（縮尺1／4・1／2・2／3）	59
第38図	S B 8測量図・出土遺物実測図（縮尺1／50・1／4）	60
第39図	S B 11測量図（縮尺1／80）	61
第40図	S B 11出土遺物実測図(1)（縮尺1／4）	62
第41図	S B 11出土・遺物実測図(2)（縮尺1／4・1／2・1／1）	63
第42図	S B 9測量図（縮尺1／80）	65
第43図	S B 9埋土下位出土遺物実測図（縮尺1／4）	66
第44図	S B 9埋土上位出土遺物実測図（縮尺1／4・1／2・1／3・1／1）	67
第45図	S B 7測量図・出土遺物実測図（縮尺1／50・1／4）	68
第46図	3号大型建物測量図（縮尺1／80）	70
第47図	3号大型建物柱穴断面図(1)（縮尺1／80）	73
第48図	3号大型建物柱穴断面図(2)（縮尺1／80）	74
第49図	3号大型建物出土遺物実測図(1)（縮尺1／4）	75
第50図	3号大型建物出土遺物実測図(2)（縮尺1／4）	76
第51図	掘立1測量図・出土遺物実測図（縮尺1／60・1／4）	78
第52図	S D 2測量図（縮尺1／50）	79
第53図	S D 2 1区下層出土・遺物実測図(1)（縮尺1／4）	83
第54図	S D 2 1区下層出土遺物実測図(2)（縮尺1／4・1／2）	84
第55図	S D 2 2区下層出土遺物実測図（縮尺1／4）	85
第56図	S D 2 1区上層出土遺物実測図（縮尺1／4）	86
第57図	S D 2 2区上層・3区上層出土遺物実測図（縮尺1／4）	87
第58図	S D 2 砕層・ベルト・トレンチ出土遺物実測図（縮尺1／4）	88
第59図	S D 5出土・遺物実測図（縮尺1／4）	89
第60図	S K 9測量図・出土遺物実測図（縮尺1／40・1／4）	
第61図	S K 2・3・8測量図（縮尺1／40）	90
第62図	柱穴出土遺物実測図（縮尺1／4・1／2）	94
第63図	包含層出土遺物実測図(1)（縮尺1／4）	95
第64図	包含層(2)・地点不明(1)出土遺物実測図（縮尺1／4・1／2）	96
第65図	地点不明出土遺物実測図(2)（縮尺2／3・1／2）	97

## 表 目 次

### 第1章 はじめ

表1 調査地一覧	1
----------	---

### 第2章 榛味四反地遺跡12次調査

表2 壴穴住居一覧	27
表3 掘立柱建物一覧	
表4 溝一覧	
表5 土坑一覧	
表6 S B 1 出土遺物観察表（土製品）	
表7 S B 1 出土遺物観察表（石製品）	28
表8 S B 1 出土遺物観察表（金属製品）	
表9 S B 1 出土遺物観察表（玉類）	
表10 掘立 1 出土遺物観察表（土製品）	
表11 S K 1 出土遺物観察表（土製品）	29
表12 S K 2 出土遺物観察表（土製品）	
表13 柱穴出土遺物観察表（土製品）	
表14 第IV層出土遺物観察表（土製品）	
表15 第V層出土遺物観察表（土製品）	30
表16 地点不明出土遺物観察表（土製品）	

### 第3章 榛味四反地遺跡13次調査

表17 遺構一覧	33
表18 壴穴住居一覧	98
表19 掘立柱建物一覧	
表20 溝一覧	
表21 土坑一覧	
表22 S B 2 出土遺物観察表（土製品）	99
表23 S B 2 出土遺物観察表（石製品）	
表24 S B 4 出土遺物観察表（土製品）	
表25 S D 4 出土遺物観察表（土製品）	100
表26 S D 4 出土遺物観察表（金属製品）	
表27 S D 1 出土遺物観察表（土製品）	
表28 S D 3 出土遺物観察表（土製品）	
表29 S D 7 出土遺物観察表（土製品）	
表30 S K 1 出土遺物観察表（土製品）	
表31 S K 4 出土遺物観察表（土製品）	
表32 S K 6 出土遺物観察表（土製品）	101

表33	S B 10出土遺物観察表（土製品）	101
表34	S B 10出土遺物観察表（玉類）	
表35	S B 1出土遺物観察表（土製品）	
表36	S B 3出土遺物観察表（土製品）	102
表37	S B 3出土遺物観察表（石製品）	
表38	S B 5出土遺物観察表（土製品）	
表39	S B 6出土遺物観察表（土製品）	
表40	S B 6出土遺物観察表（石製品）	103
表41	S B 6出土遺物観察表（金属製品）	
表42	S B 8出土遺物観察表（土製品）	
表43	S B 11出土遺物観察表（土製品）	104
表44	S B 11出土遺物観察表（石製品）	105
表45	S B 11出土遺物観察表（玉類）	
表46	S B 9出土遺物観察表（土製品）	
表47	S B 9出土遺物観察表（石製品）	106
表48	S B 9出土遺物観察表（金属製品）	
表49	S B 9出土遺物観察表（玉類）	107
表50	S B 7出土遺物観察表（土製品）	
表51	3号人型建物出土遺物観察表（土製品）	
表52	掘立1出土遺物観察表（土製品）	108
表53	S D 2（1区下層）出土遺物観察表（土製品）	
表54	S D 2（1区下層）出土遺物観察表（石製品）	109
表55	S D 2（2区下層）出土遺物観察表（土製品）	
表56	S D 2（2区下層）出土遺物観察表（石製品）	110
表57	S D 2（1区上層）出土遺物観察表（土製品）	
表58	S D 2（2区上層）出土遺物観察表（土製品）	111
表59	S D 2（3区上層）出土遺物観察表（土製品）	
表60	S D 2（疊層）出土遺物観察表（土製品）	
表61	S D 2（ベルト）出土遺物観察表（土製品）	112
表62	S D 2（トレンチ）出土遺物観察表（土製品）	
表63	S D 5出土遺物観察表（土製品）	
表64	S K 9出土遺物観察表（土製品）	113
表65	柱穴出土遺物観察表（土製品）	
表66	柱穴出土遺物観察表（石製品）	
表67	柱穴出土遺物観察表（金属製品）	114
表68	第VI層出土遺物観察表（土製品）	
表69	第IV層出土遺物観察表（土製品）	
表70	地点不明出土遺物観察表（土製品）	115
表71	地点不明出土遺物観察表（石製品）(1)	
表72	地点不明出土遺物観察表（石製品）(2)	

## 第4章 調査の成果と課題

## 写真図版目次

卷頭図版 1 榛味四反地遺跡13次調査3号大型建物（北東より）

卷頭図版 2 榛味四反地遺跡12次・13次調査出土遺物

## 第2章 榛味四反地遺跡12次調査

- |                        |                    |
|------------------------|--------------------|
| 図版1 1. 調査地全景（南西より）     | 2. 南壁土層（北より）       |
| 図版2 1. 東半部検出状況（西より）    | 2. 西半部検出状況（東より）    |
| 図版3 1. S B 1 検出状況（北より） | 2. S K 1 完掘状況（北より） |
| 図版4 1. 挖立1完掘状況（東より）    | 2. 作業風景（北西より）      |
| 図版5 1. S B 1 出土遺物      |                    |
| 図版6 1. 出土遺物（S K 1・包含層） |                    |

## 第3章 榛味四反地遺跡13次調査

- |                                  |                         |
|----------------------------------|-------------------------|
| 図版7 1. 調査地全景（北西より）               | 2. 西壁土層（東より）            |
| 図版8 1. 北半部遺構検出状況（北より）            | 2. 南半部遺構検出状況（北より）       |
| 図版9 1. 遺構完掘状況（北より）               |                         |
| 図版10 1. S B 2・10完掘状況（北東より）       | 2. S B 4 完掘状況（北西より）     |
| 図版11 1. S B 1 完掘状況（北東より）         | 2. S B 3 完掘状況（北東より）     |
| 図版12 1. S B 5 完掘状況（南東より）         | 2. S B 8 検出状況（東より）      |
| 図版13 1. S B 6 完掘状況（北より）          | 2. S B 6 遺物出土状況（南より）    |
| 図版14 1. S B 9・11検出状況（北東より）       | 2. S B 9 遺物出土状況（南東より）   |
| 図版15 1. 3号大型建物検出状況（北東より）         | 2. 3号大型建物検出状況（東より）      |
| 図版16 1. 3号大型建物柱穴（S P ⑩）完掘状況（東より） | 2. S D 2 断面（東より）        |
| 図版17 1. S D 2 上層遺物出土状況（南東より）     | 2. S D 2 下層遺物出土状況（北東より） |
| 図版18 1. 出土遺物（S B 2・S D 4・S K 1）  |                         |
| 図版19 1. S B 10出土遺物               |                         |
| 図版20 1. 出土遺物（S B 1・S B 3）        |                         |
| 図版21 1. 出土遺物（S B 6・S B 8）        |                         |
| 図版22 1. S B 9 出土遺物(1)            |                         |
| 図版23 1. S B 9 出土遺物(2)            | 2. 3号大型建物出土遺物           |
| 3. S D 2 出土遺物(1)                 |                         |
| 図版24 1. 出土遺物（S D 2(2)・柱穴）        |                         |
| 図版25 1. 出土遺物（包含層・地点不明）           |                         |

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

2003（平成15）年に実施された樽味四反地遺跡8次調査において、古墳時代初頭の大型掘立柱建物が検出された。1998（平成10）年に実施された同6次調査においても同様の大型掘立柱建物と溝が検出されている。これら2棟の大型掘立柱建物は当該期のものとしては規模が西日本最大級であることから、樽味地区には首長層の存在を裏付ける造構が存在する可能性が高まりつつある。そのほか樽味地区には樽味遺跡（愛媛大学構内）をはじめ、樽味四反地遺跡（1～11次）、樽味高木（1～12次）、樽味立派遺跡（1～3次）など周知の遺跡地帯として知られている。そこで、文化庁、愛媛県教育委員会及び愛媛大学等のご指導を得たところ、史跡指定の価値に十分値する極めて重要な遺跡と判断されたため、周辺地権者の協力を得て、遺跡の全体像を解明することを目的とした、確認調査を実施することとなった。

確認調査は松山市教育委員会文化財課が主体で、2004（平成16）年11月25日に松山市樽味4丁目231番の1の一邸でおこなった。立会人のもと3本のトレンチを設定し、各トレンチの土層の堆積状況と造構検出の確認をおこなった。その結果、T1・T2において6次調査で検出した溝や柱穴を検出したことから、財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが2005（平成17）年11月から本格調査を開始した。調査は12次調査、13次調査の順で着手し、一部調査期間が重なる。13次調査地は調査以前水田として利用されていたため、調査終了後は水田に戻した。なお、12次調査は宅地建設の開発に伴う事前の発掘調査として行われた。調査は10月17日から12月26日までの間実施した。

表1 調査地一覧

調査地	期間	面積
12次調査	2005（平成17）年10月17日～同年12月26日	201m <sup>2</sup>
13次調査	2005（平成17）年11月1日～2006（平成18）年3月30日	820m <sup>2</sup>

## 2. 刊行組織（平成21年3月31日現在）

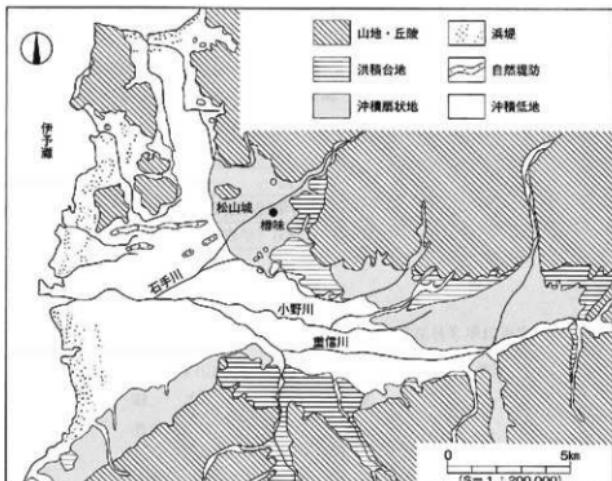
松山市教育委員会	教 育 長	山内 泰
事務局	局 長	石丸 修
企 画 官	仙波 和典	
企 画 官	古鎌 靖	
企 画 官	岸 紀明	
文化財課	課 長	家久 則雄
	主 幹	森 正経
	主 幹	森川 恵克
財団法人松山市生涯学習振興財團	理 事 長	中村 時広
	事 務 局 長	吉岡 一雄
埋蔵文化財センター	所長兼考古館長	丹生谷博一

次長兼教育普及担当リーダー	折手 均
次長兼調査委員担当リーダー	重松 佳久
調査担当リーダー	栗田 茂敏
教育普及担当リーダー	梅木 謙一
調査員	宮内 慎一
調査員	相原 秀仁
調査員	大西 朋子（写真担当）

### 3. 立地と環境

#### (1) 立地 (第1図)

調査地は四国北西部の松山平野に位置する。松山平野は、北東部に高縄山、南東部は四国山地に開まれ、その山々から流れる支流が重信川や石手川と合流して伊予灘に流れ出る。その大小河川により形成された洪積台地や沖積扇状地上に位置する。調査地が所在する椎味地区は平野北東部の沖積扇状地上の石手川南岸に位置する。



第1図 松山平野の地形概要図

## (2) 環境

ここでは、樟味・東野地区で発掘調査された集落遺跡の遺構と出土遺物について、主に縄文時代から古墳時代を概観する。

**縄文時代**：縄文時代では検出例は少なく、晩期の遺構や遺物が確認されているのみである。

〔晚期〕 樟味立派遺跡3次調査、東野森ノ木遺跡2・4次調査では、長さ1~1.5m、幅0.5~1mを測る隅丸方形の上坑が検出され、断面形態から貯蔵穴と考えられている。今後、調査地周辺で該期の居住施設が検出される可能性がある。

**弥生時代**：前期から中期にかけて竪穴住居や溝、土坑の検出例があるが、とりわけ後期には検出例が増加する。

〔前期〕 前期前半では樟味遺跡1次調査から溝と土坑が検出され、前期中頃では樟味遺跡5次調査から竪穴住居が検出されている。前期後半では樟味四反地遺跡7次調査から南北方向の溝が検出され、区画溝の可能性が考えられている。前期末から中期初頭では、樟味立派遺跡3次調査から、幅1.6~3.2m、深さ0.8~1.2mを測る大溝が複数確認されている。このうち、溝SD101は平面形態が弧状を呈しており、形状や土堆積状況から集落を分ける区画溝と考えられている。当該期の集落の性格を考える上で貴重な資料となる。

〔中期〕 中期前半では東野森ノ木遺跡4次調査から、大型壺を使用した土器棺墓が検出され、調査地周辺が墓域として土地利用されていたとみられる。中期後半から後期初頭では、樟味高木遺跡2次調査と樟味四反地遺跡5次調査から、一辺2.5~3.0mを測る方形小型住居が検出されている。樟味高木遺跡7次調査では推定直径9mを測る比較的大型の円形住居SB201、樟味四反地遺跡5次調査では直径9.2mを測る円形住居SB8が検出されている。樟味高木遺跡9・13次調査では長さ1.6~2.4m、幅1.0~2.0mを測る方形土坑2基が検出され、断面形態や堆積状況から貯蔵穴と考えられている。樟味高木遺跡3次調査検出の土坑や樟味四反地遺跡6次調査検出の溝内からは、中期後半の遺物が出土しており、これらの遺物は松山平野の土器編年を考える上で好資料となっている。

〔後期〕 前半の遺構は未検出である。後葉から末では樟味四反地遺跡3~5・9次調査、樟味立派遺跡3次調査、樟味高木遺跡9・11次調査において、一辺3~5mを測る方形住居や直径7.5~9mを測る円形住居が多数検出されている。樟味高木遺跡11次調査検出の方形住居SB102には長方形の張り出し部が付設されている。遺物では樟味立派遺跡1次調査の包含層中から「貨泉」、樟味高木遺跡3次調査の第IV層中からは準構造舟が描かれた絵画土器片が出土し、他地域との交流を示す貴重な資料となる。

**古墳時代**：前期の検出例は少なく、中期から後期にかけて竪穴住居の検出例が急増する。

〔前期〕 樟味四反地遺跡6次調査（平成10年度：1号大型建物と呼称）と樟味四反地遺跡8次調査（平成15年度：2号大型建物）では超大型建物が検出されている。両者共に6間×6間規模の総柱建物で床面積は1号大型建物が128.60m<sup>2</sup>、2号大型建物が161.88m<sup>2</sup>を測る。松山平野内では初めての検出であり、出土遺物から古墳時代初頭の時期をあてている。一方、一般集落では前期前半に樟味立派遺跡1次調査にて、一辺4mを測る方形住居SB13が検出されている。前期後半では樟味四反地遺跡16次にて、一辺6mを測る方形住居SB1などが検出されている。ただし、古墳時代を通してみると、前期の遺構や遺物の検出例は少ない。

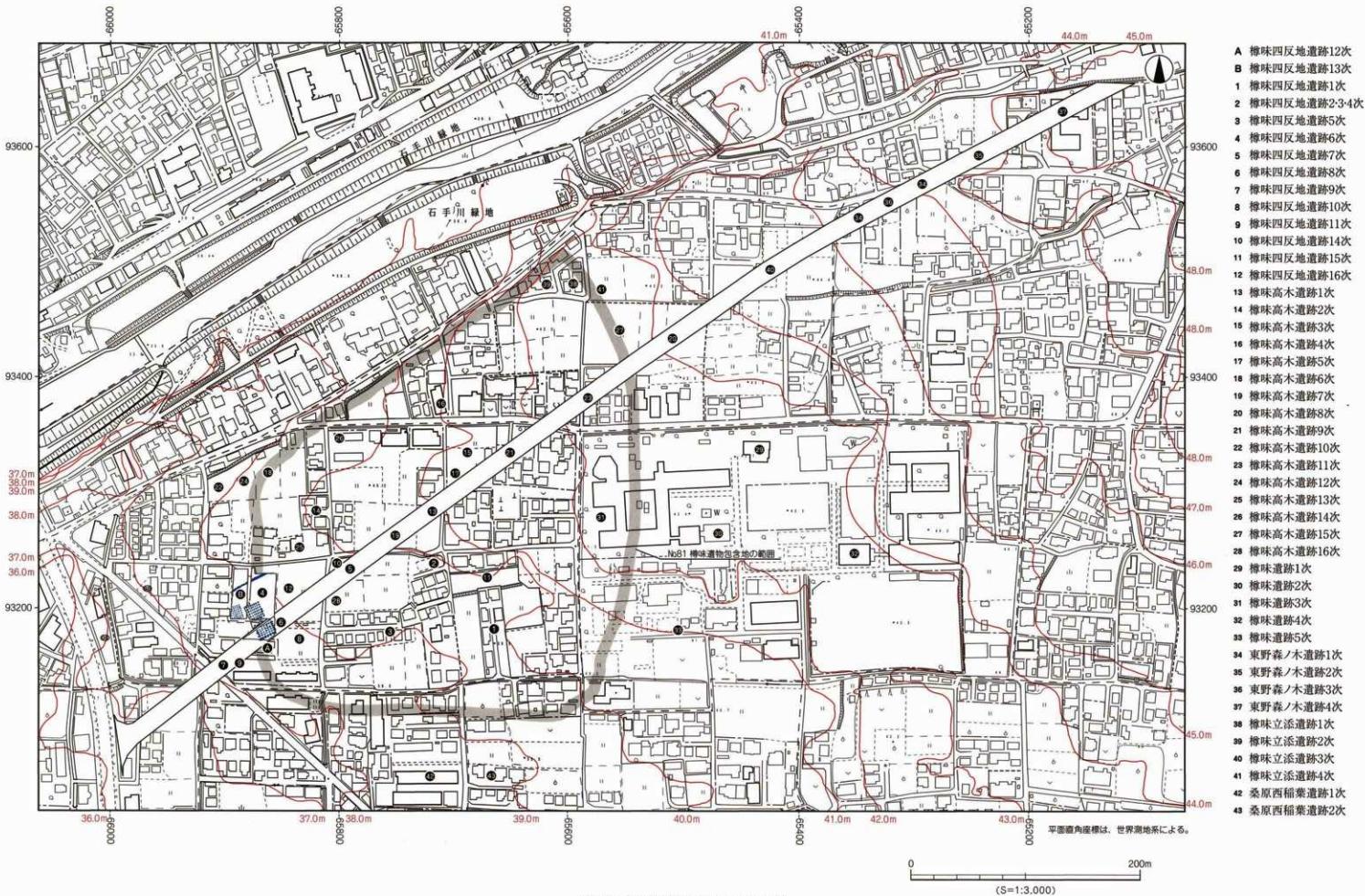
〔中期〕 中期では遺構・遺物共に検出例が増加する。中期前半では樟味高木遺跡7~9・11・12次調査、樟味四反地遺跡7~9・16次調査、樟味立派遺跡4次調査において竪穴住居が多数確認されている。平面形態は方形~長方形を呈しており、一辺3~4mを測る小型住居と一辺6m以上の住居とに

分かれる。遺物では樽味四反地遺跡7次調査検出の住居S-B304から朝鮮系統質土器や土製算盤玉形紡錘車が出土しており、樽味地区では渡来人との関係が密接であったとも考えられる。

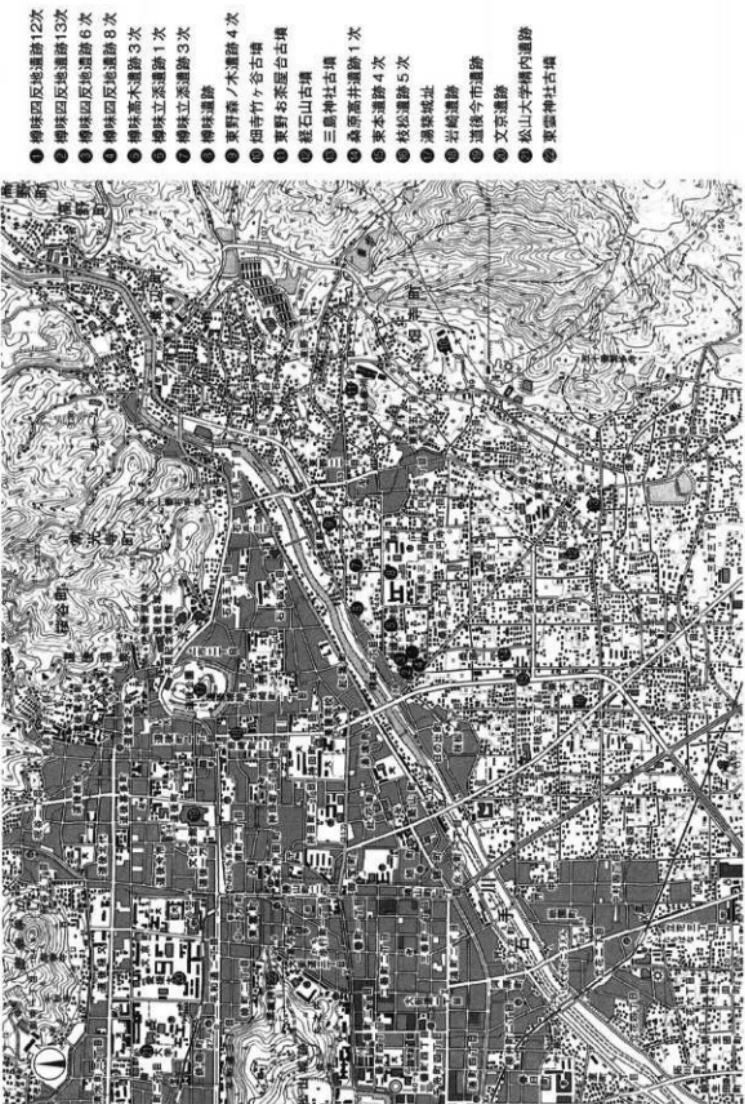
〔後期〕後期では中期と同様に遺構や遺物が多数確認されている。樽味四反地遺跡5・6・16次調査において堅穴住居が確認されている。調査地に隣接する樽味四反地遺跡6次調査では一辺4~7mを測る隅丸方形住居が多数検出され、住居内からは白玉やガラス小玉が出土している。古墳時代後期には堅穴住居の廃絶に伴い、人為的に埋戻しや臼玉やガラス小玉等の装飾品を伴った廃絶行為がみられた。

### 【参考文献】

- 宮本一夫 1989「樽味遺跡」愛媛大学埋蔵文化財調査報告1
- 吉田 広 1997「樽味遺跡5次調査」愛媛大学埋蔵文化財調査報告2
- 高尾和長 2007「樽味立派遺跡3次調査」松山市文化財調査報告書第117集
- 加島次郎 2007「東野森ノ木遺跡4次調査」松山市文化財調査報告書第117集
- 高尾和長 2002「樽味四反地遺跡5次調査」松山市文化財調査報告書第87集
- 宮内慎一 2007「樽味高木遺跡13次調査」松山市埋蔵文化財調査年報19
- 梅木謙一 1994「樽味四反地遺跡3・4次調査」松山市文化財調査報告書第46集
- 梅木謙一 1992「樽味立派遺跡」松山市文化財調査報告書第26集
- 小玉重紀子 2003「樽味四反地遺跡6次調査」松山市文化財調査報告書第94集
- 梅木謙一 1992「樽味高木遺跡」松山市文化財調査報告書第26集
- 加島次郎 2007「樽味高木遺跡7次調査」松山市文化財調査報告書第117集
- 高尾和長 2007「樽味高木遺跡8次調査」松山市文化財調査報告書第117集
- 加島次郎 2007「樽味高木遺跡9次調査」松山市文化財調査報告書第117集
- 高尾和長 2007「樽味高木遺跡11次調査」松山市文化財調査報告書第117集
- 河野史知 2006「樽味高木遺跡12次調査」松山市埋蔵文化財調査年報18
- 加島次郎 2007「樽味四反地遺跡7次調査」松山市文化財調査報告書第117集
- 加島次郎 2007「樽味四反地遺跡8次調査」松山市文化財調査報告書第117集
- 加島次郎 2007「樽味四反地遺跡9次調査」松山市文化財調査報告書第117集
- 宮内慎一 2007「樽味四反地遺跡16次調査」松山市埋蔵文化財調査年報19
- 水本完児 2007「樽味立派遺跡4次調査」松山市埋蔵文化財調査年報19



第2図 調査位置図 (S = 1 : 3,000)



第3図 周辺主要道路分布図 (S = 1 : 25,000)



## 第2章 樽味四反地遺跡12次調査

### 1. 調査の経緯

#### (1) 調査の経緯

調査は2005（平成17）年10月17日から12月26日までの間実施した。以下調査工程を略記する。発掘調査は廃土置き場の都合上、調査地内を東半分と西半分とに分けて実施した。10月17日、西半分の調査を開始する。重機にて表土層を除去した後、引き続き包含層を掘り下げて遺物を取り上げる。10月24日、第VI層上面にて竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝、柱穴を検出した。10月26日、竪穴住居と土坑の掘り下げをする。掘立柱建物を構成する柱穴は半截し、測量をおこなう。なお、11月1日、発掘調査中には戦場体験学習として、勝山中学校の生徒2名が調査に参加し屋外調査や測量作業を体験した。11月2日、測量業者に基準点測量を委託し、5m四方のグリッドを設定する。11月17日、すべての遺構測量を終了し、西半分の調査を終了した。11月21日、重機により西半分の埋め戻し作業をおこない、引き続き東半分の表土削除をおこなう。11月24日、第VII層上面にて竪穴住居、溝、柱穴を検出した。なお、竪穴住居は西半分で検出した住居の延長部である。12月1日、竪穴住居の掘り下げをする。12月22日、東半分の調査を終了した。12月26日、重機により東半分の埋め戻し作業をおこなう。12月26日、発掘機材や用具を撤収し発掘調査を終える。

#### (2) 調査組織

調査地 松山市樽味4丁目228番3

遺跡名 樽味四反地遺跡12次調査

調査期間 2005（平成17）年10月17日～2005（平成17）年12月26日

調査面積 201m<sup>2</sup>

### 2. 層位

#### (1) 基本層位（第6図）

調査地は標高39.20mに立地し、調査以前は既存宅地であった。調査地の基本層位は以下のとおりである。

第I層：近現代の造成に伴う客土で、地表下40～50cmまで開発が行われている。

第II層：近現代の水田耕作に伴う耕土である。土色の違いにより2層に分層される。

第II①層 - 青灰色（5B6/1）粘質土で水田耕作にかかわる耕作土である。層厚5～15cmを測る。

第II②層 - 黄褐色（7.5YR7/8）粘質土で水田耕作にかかわる床土である。層厚5～15cmを測る。

第III層：灰褐色（7.5YR4/2）粘質シルトで調査地北東部を除く全域に堆積し、層厚10～15cmを測る。

第IV層：灰黄褐色（10YR5/2）粘質シルトで調査地西部に堆積し、層厚20～25cmを測る。本層中からは、主に古代に時期比定される土師器、須恵器のほか、石器が出土した。

第V層：黒色（10YR2/1）粘質シルトで調査地全域に堆積し、層厚15～25cmを測る。本層中からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

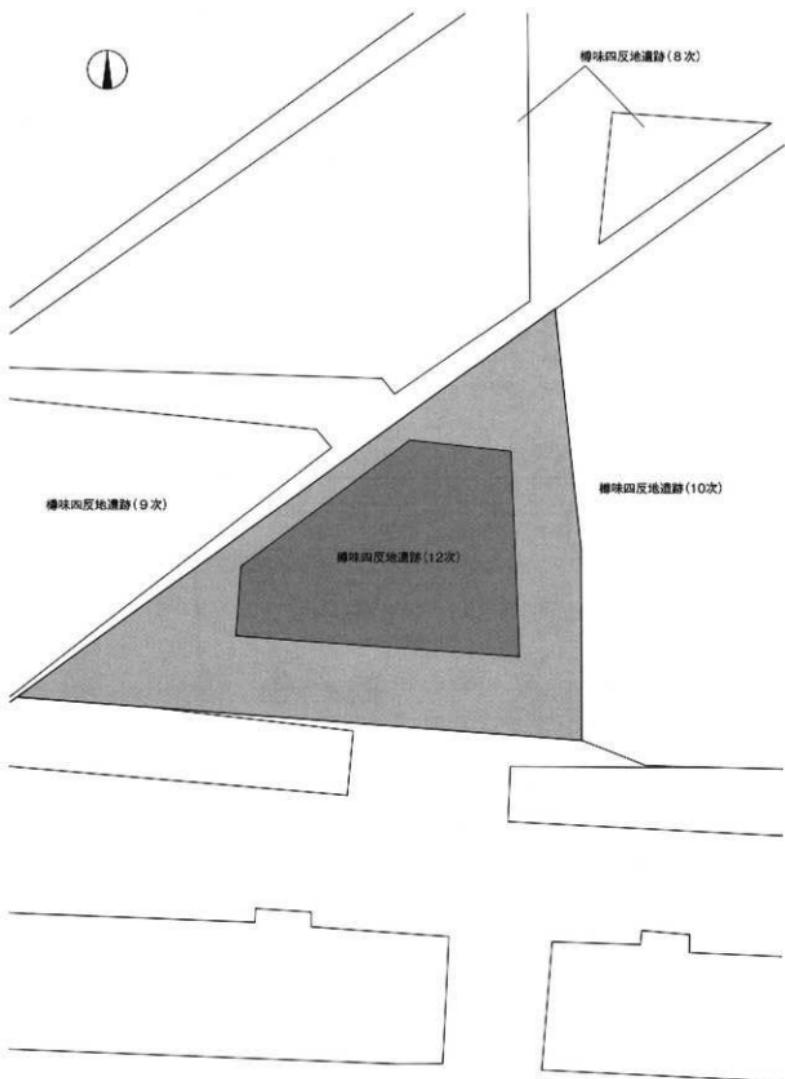
第VI層：にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルトで、本層上面が調査における最終遺構検出面となる。

本層中からの遺物の出土はない。

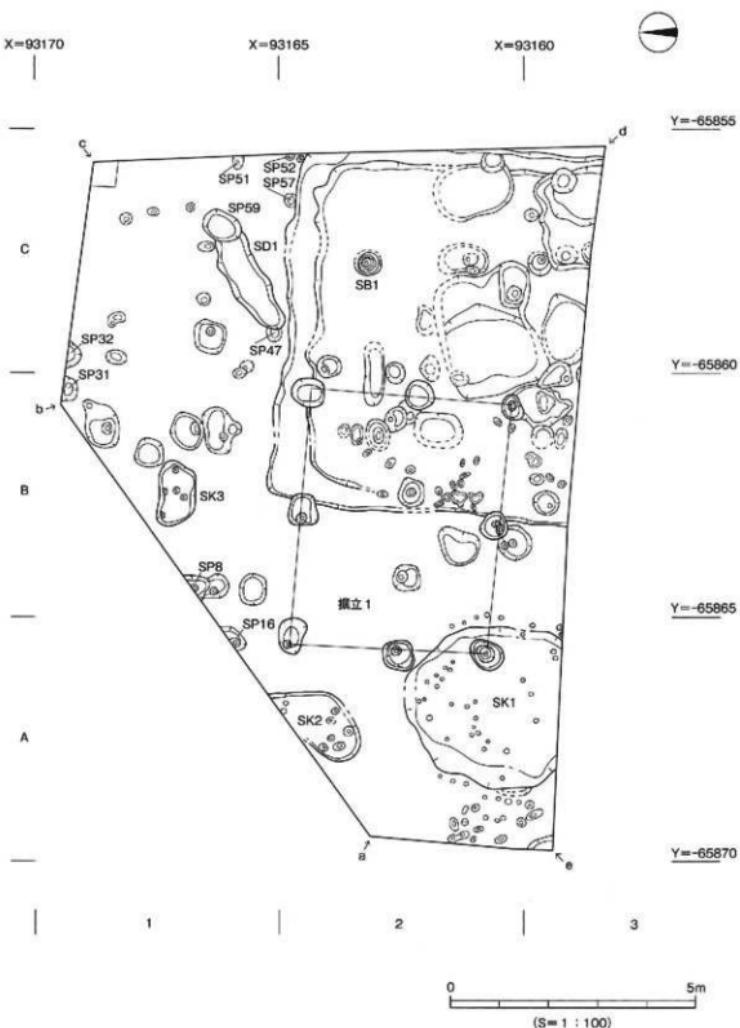
検出遺構や出土遺物から、第IV層は古代、第V層は弥生時代～古墳時代までに堆積した土層と考えられる。なお、第VI層上面の標高を測量すると、調査地北東部が最も高く、南西部に向けて緩傾斜する（比高差35cm）。なお、調査地内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは西から東へA・B・C、北から南へ1・2・3とし、A1・A2・・・C3といったグリッド名を付した。

## （2）検出遺構・遺物

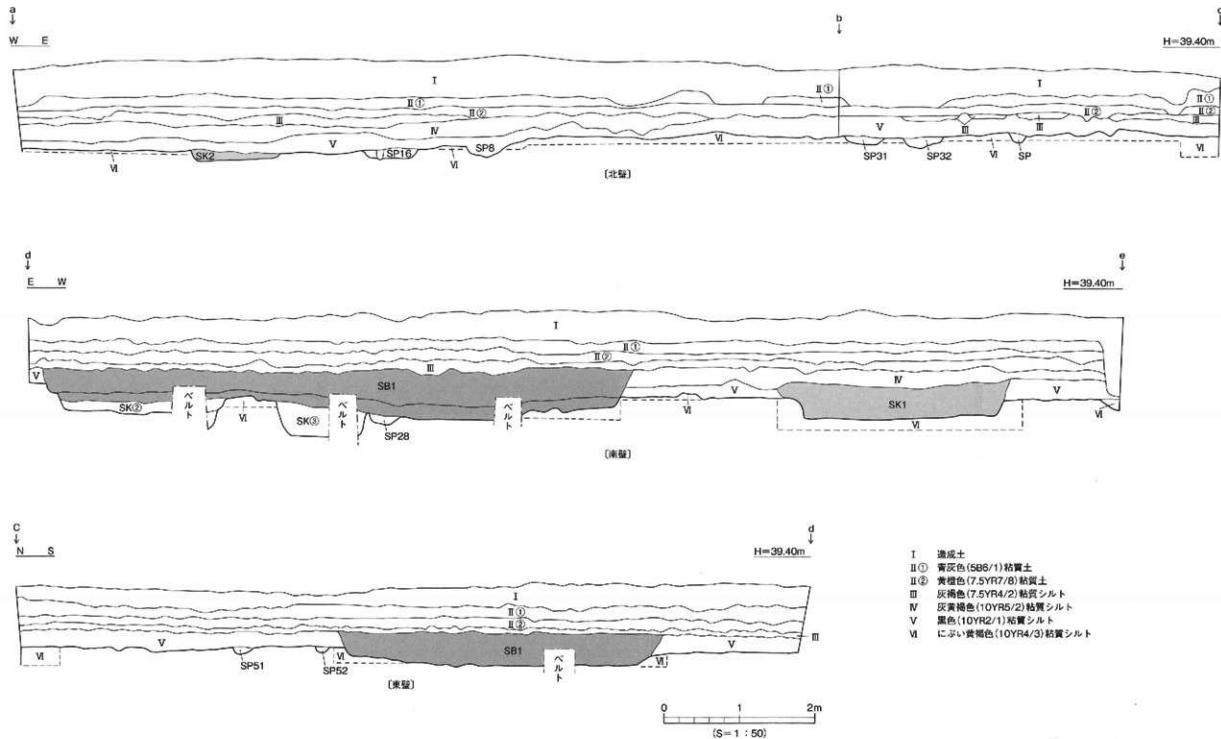
調査では主に古墳時代の遺構を検出した。堅穴住居1棟〔後期後半〕、掘立柱建物1棟〔後期後半以降〕、溝1条〔時期不明〕、主坑3基〔SK1：中期後半、SK2：中期後半、SK3：中期後半〕、柱穴49基である。遺物は遺構及び包含層中より、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器、玉類のほか、分銅形土製品2点と軟質土器片が出土した。



第4図 調査地位置図 ( $S = 1 : 250$ )



第5図 遺構配置図



第6図 調査壁土層図

### 3. 遺構と遺物

本調査では、堅穴住居1棟、掘立柱建物1棟、溝1条、土坑3基、柱穴49基を検出した。すべて第VI層上面での検出である。

#### (1) 堅穴住居

S B 1 (第5・7図、図版3)

S B 1は調査区東側B 1～C 3区に位置する。S B 1は住居埋土の掘り下げを進めるうちに、住居内側にて新たな住居プランを検出した。断面観察の結果、建て替え（拡張）が施された住居であることがわかった。ここでは構築時と改築時に分けて説明する。

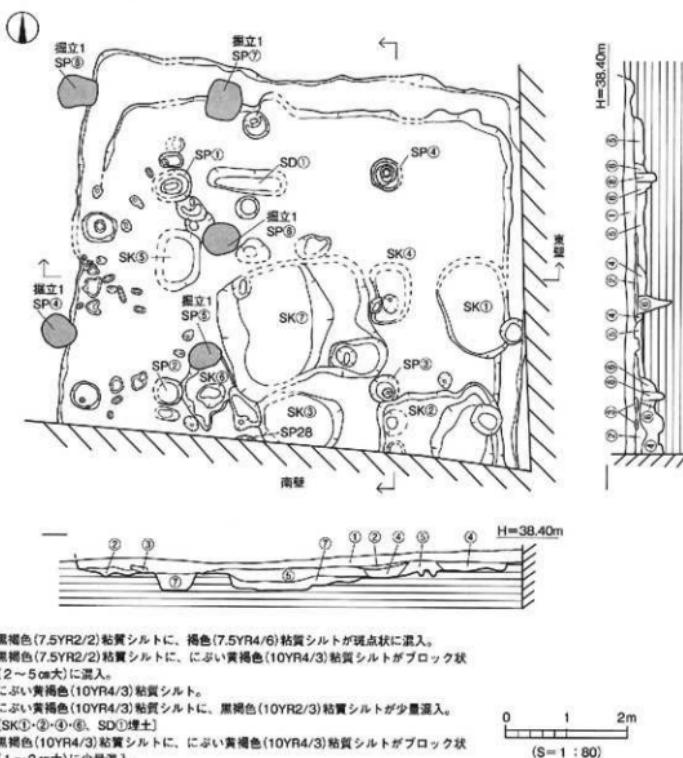
i) 構築時：住居西側は掘立1柱穴（S P④・⑥）に切られ、東側、南側は調査区外に続く。第VI層上面での検出であるが、調査区南壁の土層観察により第IV層上面から掘り込まれた遺構であることを確認した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長6.70m、南北検出長5.60m、壁高10～16cm、床面積37.52m<sup>2</sup>を測る。住居埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入するもの（⑤層）である。主柱穴はS P①～④の4本を確認した。各柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は径40～50cm、深さ20cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入するもの（⑥層）である。なお、S P③・④では柱痕を確認し、柱痕径は径15cmを測る。柱痕埋土は黒褐色粘質シルト（⑤層）である。床面にて、住居構築以前と思われる土坑3基（S K③・⑤・⑦）を検出した。平面形態は両丸方形～楕円形を呈し、規模は径1.2～2.4m、深さ20～40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒色粘質シルト（⑦層）である。土坑内からは弥生土器や石器のほか、S K⑤より分鋼形土製品が1点出土した。

ii) 改築時：平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長7.70m、南北検出長6.30m、壁高26～32cm、床面積48.51m<sup>2</sup>を測る。住居埋土は大きく2層あり、上層は黒褐色粘質シルトに褐色粘質シルトが斑点状に混入するもの（①層）、下層は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入するもの（②層）であり、にぶい黄褐色粘質シルト（③層）がブロック状に混入する。住居床面にて土坑4基（S K①・②・④・⑥）と溝1条（SD①）を検出した。各遺構埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトに黒褐色粘質シルトが少量混入するもの（④層）である。

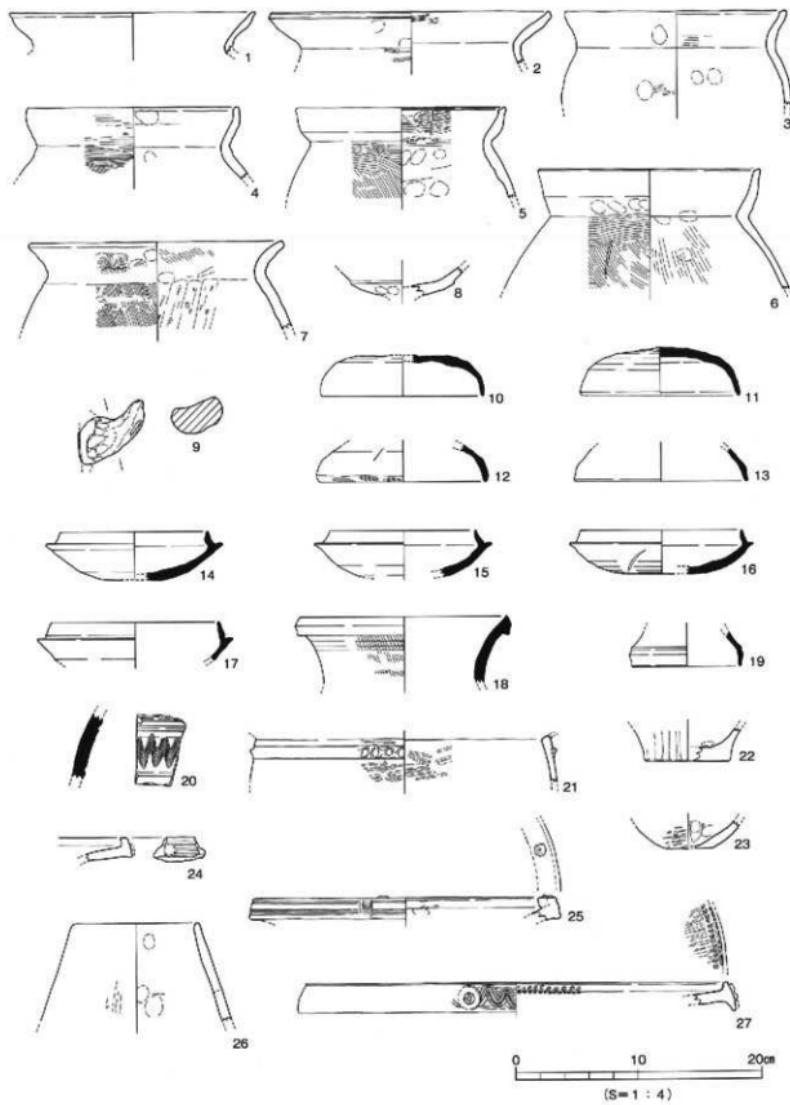
遺物は埋土上層から、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器のほか、滑石製の白玉6点が散在して出土した。

出土遺物（第8・9図、図版5）

1～9は土師器である。1～7は壺の口縁部である。口縁部が内湾するもの（1～6）と、口縁部が外反するもの（7）とに分かれる。前者のうち、2以外は口縁端部が内傾する面をもつ。6は胴部に線刻による記号を施す。8は高杯の坏部片で、坏部下位に棱をもつ。9は壺の把手で断面楕円形である。10～20は須恵器である。10～13は坏蓋で、10・11は大井部が丸味を帯びる。10・12・13は口縁端部が丸く、11は口縁端部が内傾する。12は口縁端部に刻目を施す。14～17は坏身である。14～16はたちあがりが短く内傾し、16は底部にヘラ記号を施す。17は受部端に沈線状の凹みが巡り、たちあがり端部は丸い。18は壺の口縁部で口縁端部は断面三角形状に肥厚する。19は高杯の脚部片で、脚端部は下方に屈曲する。裾部外面に凹線状の凹みが巡る。20は器台の坏部片で、凹線状の凹みが2条と波状文を施す。21～27は弥生土器である。21～23は壺である。21は口縁部下に貼付凸帯文1条と凸帯文上に押圧を施す。22は平底で、外面にヘラミガキを施す。23は小さい平底で、底部外面にタキ痕が残る。



第7図 SB1測量図



第8図 SB 1出土遺物実測図(1)

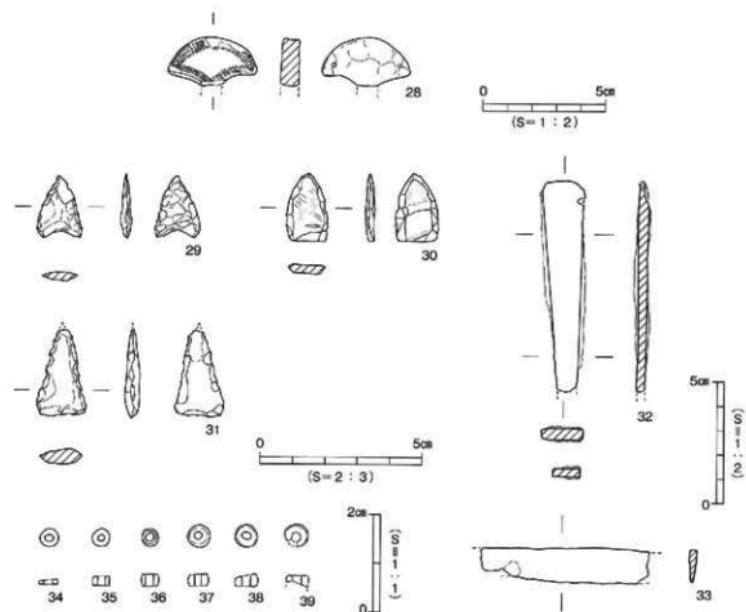
24~26は壺である。24・25は広口壺で、24は口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文3条を施す。円形浮文のはがれ痕を看取る。25は豊後系土器で、口縁端面に沈線文3条と継方向の沈線文を施し、口縁端部上面に円形浮文を貼付ける。26は無頸壺の口縁部である。27は器台で口縁端面に波状文5条と円形浮文を貼付け、口縁部上端に半截竹管文を施す。28は分銅形土器品で、左右2ヶ所に表面から穿孔する。表面に刺突文を施し、赤色顔料が付着する。29~31は打製石鏃で、29は凹基無莖式、30・31は平基無莖式である。材質はサヌカイトである。32・33は鉄製品で、32は整、33は刀子である。34~39は滑石製の臼玉で直径0.38~0.49cm、高さ0.11~0.28cm、重さ0.02~0.08gを測る。

時期：出土した土師器、須恵器の特徴と検出層位などから、SB 1の廃棄、埋没時期は古墳時代後期後半とする。

## (2) 掘立柱建物

### 掘立1（第5・10図、図版4）

調査区中央部A 2~B 2区に位置する。2間×2間の東西棟で、建物を構成する5基の柱穴（SP ①~⑧）はSB 1、SP ③はSK 1を切っている。建物方位は真北より約4°東へ振っている。規模は梁行長5.12m、桁行長4.12mを測る。各柱穴の平面形態は円~楕円形を呈し、規模は径40~70cm、深さ30~40cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状



第9図 SB 1出土遺物実測図(2)

に混入するもの（①層）である。柱痕は6基の柱穴（S P ①～⑤・⑧）で検出され、柱痕径は14～20cmを測る。柱痕埋土は黒褐色粘質シルト（②層）である。柱穴掘り方内からは弥生土器や土師器片、須恵器片が少量出土した。

#### 出土遺物（第10図）

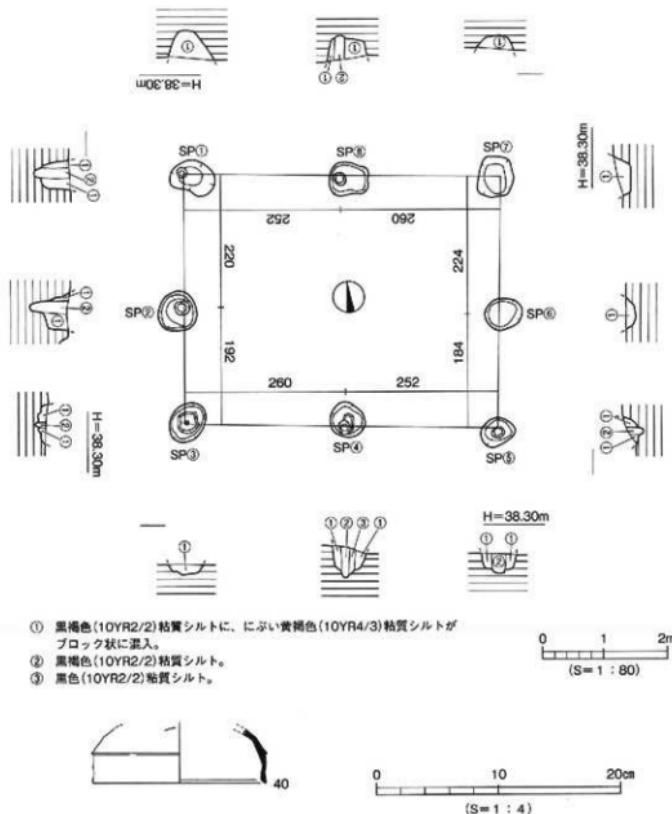
40は須恵器壺蓋である。天井部は丸く、口縁端部は内傾する。断面三角形状の明瞭な稜をもつ。

時期：出土遺物の特徴とS B 1を切ることから、古墳時代後半以降とする。

### （3）溝

#### S D 1（第5図）

調査区北東部、C 1・2区に位置する北東－南西方向の溝である。溝東端はS P 59に切られ、西端



① 黒褐色(10YR2/2)粘質シルトに、にびい黄褐色(10YR4/3)粘質シルトが  
ブロック状に混入。

② 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。

③ 黒色(10YR2/2)粘質シルト。

0 1 2m  
(S = 1 : 80)

0 10 20cm  
(S = 1 : 4)

第10図 挖立1測量図・出土遺物実測図

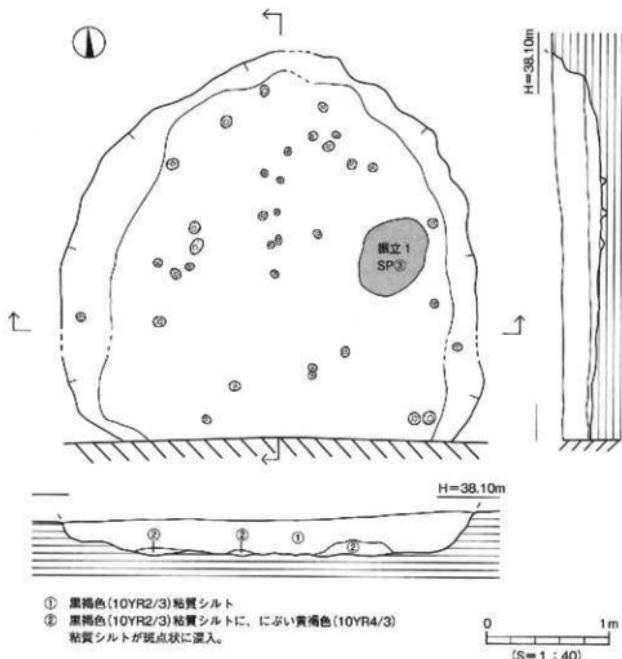
はS P 47を切る。規模は検出長2.06m、幅0.70m、深さ7cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが混入する。溝底は東から西へ緩傾斜する（比高差3cm）。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、時期特定が困難である。

#### (4) 土坑

##### SK 1 (第5・11図、図版3)

調査区南西部A 2・3区に位置する。土坑東側は掘立1柱穴（S P③）に切られ、南側は調査区外に続く。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西長3.45m、南北検出長3.15m、深さ30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑西側壁体は比較的緩やかに立ち上がる。土坑埋土は2層あり、黒褐色粘質シルト（①層）、黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが斑点状に混入するもの（②層）である。土坑底面にて径6~10cm、深さ5~8cmの大の小ピットを多数検出したが、遺構に伴うものは判断できなかった。遺物は土坑埋土中より、土師器片や弥生土器片のはか、分銅形土製品1点が出上した。



第11図 SK 1測量図

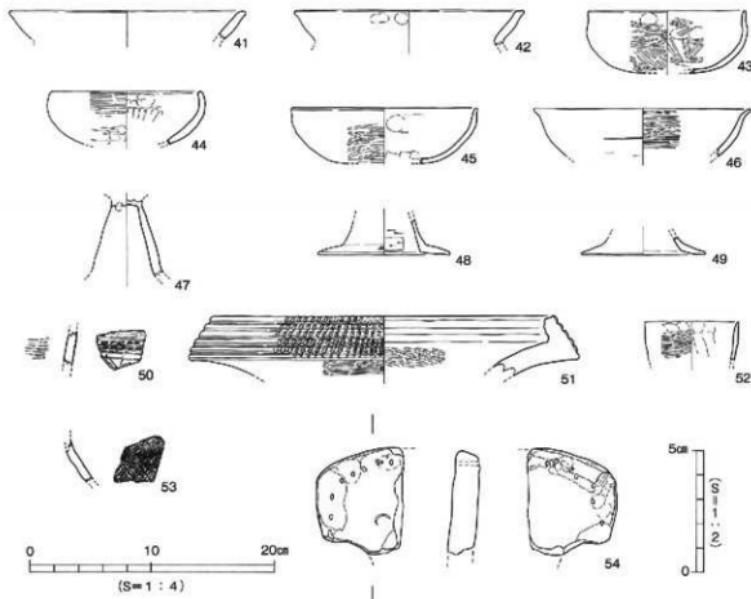
## 出土遺物（第12図、図版6）

41~49は土師器である。41・42は甕で、口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。42は口縁端面がナデ凹む。43~45は碗で、口縁部は内湾して立ち上がる。46~49は高壺である。46は口縁部がわずかに外反する。47は坏部と脚部の接合法が差込技法である。48・49は柱詰部内面に稜をもつ。50・51は弥生土器である。50は甕の胴部小片で、沈線文5条と刺突文2列を施す。51は大型の広口甕である。口縁部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文5条と刻目を施す。52は製塩土器で、器壁がうすい。53は軟質土器の甕の胴部片で、外面に格子タタキを施す。54は分銅形土器品である。表面に10ヶ所、裏面に8ヶ所の穿孔が看取される。

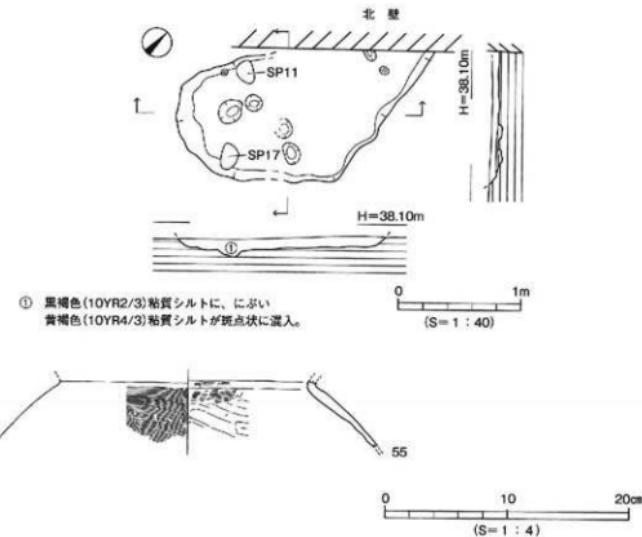
時期：出土した土師器の特徴と検出層位より、古墳時代中期後半とする。

## SK 2（第5・13図）

調査区西部A 1・2区に位置する。土坑北側はS P 11、南側はS P 17に切られ、土坑北側は調査区外に続く。平面形態は不整梢円形を呈するものと考えられ、規模は東西長1.15m、南北検出長2.11m、深さ7cmを測る。断面形態は皿状を呈する。土坑埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが斑点状に混入するもの（①層）である。土坑底面にて径10~15cm、深さ4~6cmの小ビットを検出したが、遺構に伴うものは判断できなかった。遺物は土坑埋土中より、土師器片が数点出土した。



第12図 SK 1出土遺物実測図



第13図 SK 2測量図・出土遺物実測図

## 出土遺物（第13図）

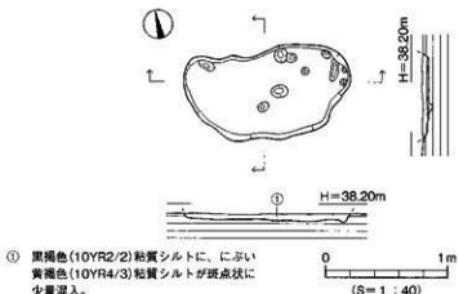
55は土師器壺の胸部片である。外面にハケメ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。

時期：出土遺物が少なく時期特定は困難であるが、遺構埋土がSK 1と酷似することから概ね古墳時代中期後半とする。

## SK 3（第5・14図）

調査区北部B 1区に位置する。平面形態は不整橢円形を呈し、規模は東西長1.33m、南北長0.70m、深さ6cmを測る。断面形態は皿状を呈する。土坑埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが斑点状に少量混入するもの（①層）である。土坑底面にて径6～14cm、深さ4～8cmの小ビットを数基検出したが、遺構に伴うものは判断できなかった。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：遺構埋土がSK 2と類似することから、概ね古墳時代中期後半としておく。



第14図 SK 3測量図

#### 4. その他の遺構と遺物

##### (1) 柱 穴

本調査で検出した柱穴は、49基である。すべて第VI層上面での検出である。柱穴の平面形態は円形もしくは楕円形を呈し、径は最小30cm～最大90cmを測る。遺物は掘り方埋土中から出土し、大半が小片であるが実測可能な遺物を掲載する。埋土は5種類に分類され、黒色粘質シルト(A類)と、黒色粘質シルトに黄色粘質シルトがブロック状に混入(B類)と、黒色粘質シルトに茶褐色粘質シルトがブロック状に混入(C類)と、黒色粘質シルトに灰黄色粘質シルトがブロック状に混入(D類)、灰色土(E類)である。なお、A類、B類は調査地北部に分布する。

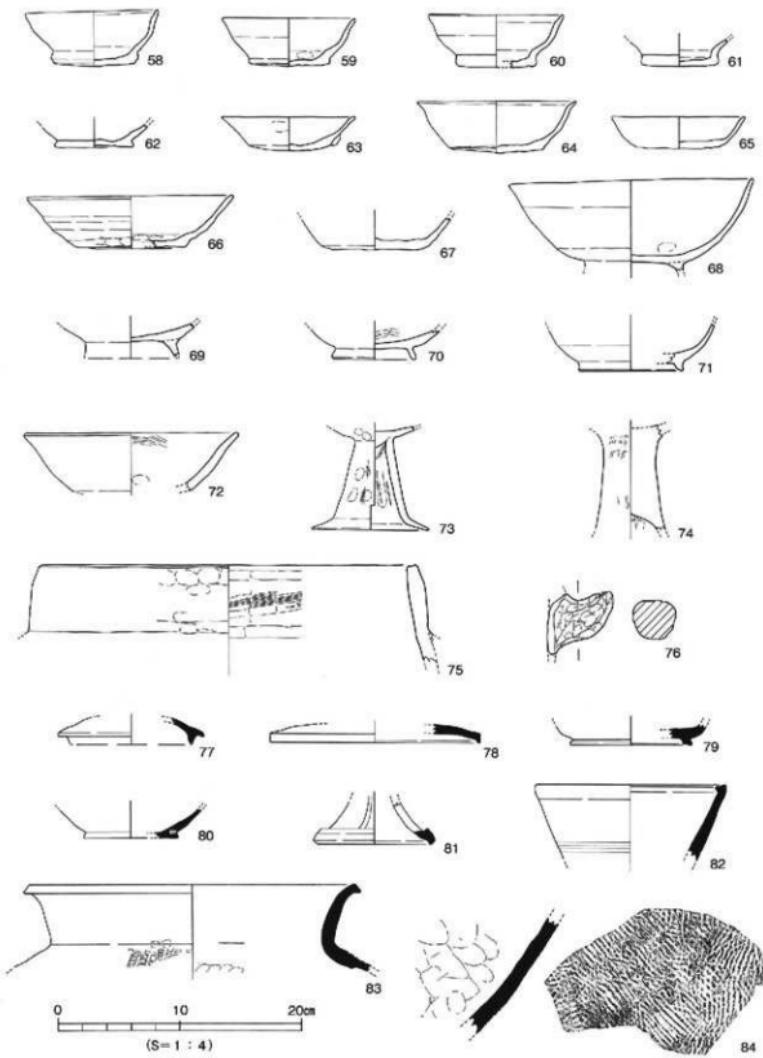
A類：埋土が黒色粘質シルトであるもの	21基
B類：埋土が黒色粘質シルトに黄色粘質シルトがブロック状に混入	19基
C類：埋土が黒色粘質シルトに茶褐色粘質シルトがブロック状に混入	2基
D類：埋土が黒色粘質シルトに灰黄色粘質シルトがブロック状に混入	5基
E類：埋土が灰色土であるもの	2基

##### 出土遺物（第15図）

56はS P17出土の須恵器広口壺である。口縁端部は上下方に肥厚し、断面三角形状となる。口縁部下に凸線1条と波状文を施す。57はS P57出土の壺の胴部片で、沈線文2条と沈線文間に波状文を施す。



第15図 柱穴出土遺物実測図



第IV層：58~71  
第V層：72~84

第16図 包含層出土遺物実測図(1)

### (2) 包含層出土遺物

本調査では、第IV層及び第V層中より、土器や石器が出土した。このうち、第IV層中からは遺存状態の良好な土師器（58～71）がまとまって出土した。調査区南壁の土層観察により、本来は第IV層中に遺構が存在しており、これらの土器は遺構に伴うものと考えられる。出土した土師器の底部切り離し技法や、形態の特徴などから、遺構は平安時代後期、11世紀代のものと考えられる。

#### 1) 第IV層出土遺物（第16図、図版6）

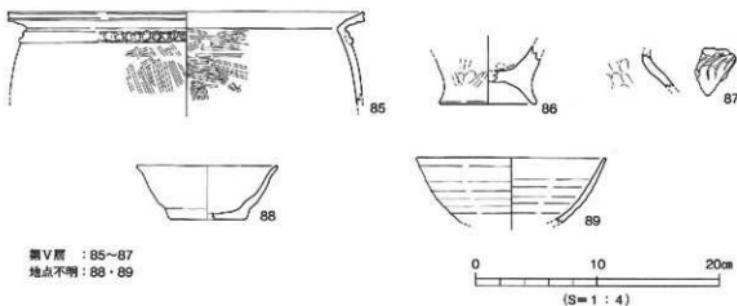
58～70は土師器である。58～67は壺である。58～62は円盤高台状の底部で、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法である。68～70は椀で、断面三角形の高台が付く。68・70は底部切り離しが回転糸切り技法、69は回転ヘラ切り技法である。71は緑釉陶器の碗で、京都産である。

#### 2) 第V層出土遺物（第16・17図、図版6）

72～76は土師器である。72～74は高壺で、72は口縁部がわずかに外反する。73は脚部片で、柱据部内面に稜をもつ。柱部内面にシボリ痕を見取し、接合法は充填技法である。74は柱部片で中実となり、接合法は差込技法である。75はカマド片で、口縁部下に把手貼付痕を見取る。76は瓶の把手で、断面円形である。77～84は須恵器である。77・78は口蓋で、77はかえりが下方に短く伸びる。78は口縁部がわずかに下方に屈曲する。79は短い高台が底部のやや内側に付く。80は底部切り離しが回転糸切り技法である。81は高壺で脚端部は下方に屈曲し、裾部外面に凸線1条と透かし2ヶ所が看取される。82は擂鉢で、口縁端部は内面にわずかに肥厚する。口縁端面はナデ凹む。胴部外面に沈線2条を施す。83・84は壺で、83は口縁部が外反し口縁端部は三角形状に肥厚する。84は大型品で、外面に平行叩きを施す。85～87は弥生土器である。85・86は壺で、85は口縁端部がナデ凹む。頸部には凸帯文1条を貼付け、凸帯上に押圧を施す。86は底部で、上げ底となる。87は壺の肩部片で、貝殻文を施す。

### (3) 地点不明出土遺物（第17図）

88・89は土師器の壺である。88の底部切り離しは、回転ヘラ切り技法である。89は口縁部が内湾し、口縁端部は丸い。



第17図 包含層(2)・地点不明出土遺物実測図

## 5. 小 結

今回の調査では、主に古墳時代の遺構と弥生時代から古代までの遺物を確認することができた。中期後半では直径3.5mの円形土坑S K 1が検出された。断面形態は逆台形状を呈するが、西側壁体は比較的緩やかに立ち上がる。土坑内からは土師器のほか分銅形土製品が1点と軟質土器片が出土した。後期後半では、一辺7mを超える比較的大型の方形住居S B 1が検出された。住居は改築が施されており、住居の北側で70cm拡張されている。住居内からは土師器、須恵器、石器、鐵器のほか滑石製の臼杵1点が出土した。また、住居内床面土坑内からは、弥生土器のほか分銅形土製品が1点出土した。なお、分銅形土製品は形態や顔面表現が山陽地方の特徴を備えたものであった。弥生時代から古墳時代にかけて、調査地周辺では多数の集落関連遺構や遺物が確認されており、今回の調査結果は、該期の集落が樟味地区の南方に展開していることを示唆するものとなった。また、軟質土器や分銅形土製品の出土は、当時の樟味地区と他地域との交流を知るうえで、好資料となるものである。このほか、包含層資料であるが、平安時代後期の土師器がまとまって出土したことから、古代集落の存在を知る手がかりを得ることもできた。

### 遺構・遺物一覧 - 凡例 -

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、天→天井部、頸→頸部、胴→胴部、脚→脚部、底→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土、角→角閃石。

( ) の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4) → 「1~4mmの大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

## 遺構一覧

表2 壁穴住居一覧

壁穴 (SB)	時期	平面形	規 模 (m) 長さ(奥深)×幅(短径)×深さ	埋 土	床面積 (m <sup>2</sup> )	主柱穴 (本)	内部施設			周壁溝	備 考
							高床	土坑	炉		
1	不明	方形	(6.70+a)×(5.60+a)×0.16	黒褐色粘質シルトに、 にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少 量混入	37.52	4	…	○	—	—	横梁時 掘立柱に 切られる。
1	古墳時代 後期後半	方形	(7.70+a)×(6.30+a)×0.22	黒褐色粘質シルトに、 褐色粘質シルトが斑 点状に混入、等	48.51	—	—	○	—	—	改築時

表3 掘立柱建物一覧

掘立 (間)	規模 (間)	方向	桁 行		梁 行		方 位	床面積 (m <sup>2</sup> )	時 期	備 考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	2×3	東西	4.12	2.20-1.92	5.12	2.60-2.52	N-4°-E	21.09	古墳時代 後期後半以降	SB1-SK1を切る。

表4 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規 模 (m) 長さ(奥深)×幅(短径)×深さ	方 向	埋 土		出土遺物	時 期	備 考
					床面積 (m <sup>2</sup> )	土			
1	C 1・2	直状	2.06×0.70×0.07	北東-南西	黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが混入	—	—	小明	SP59に切られ、 SP47を切る。

表5 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規 模 (m) 長さ(奥深)×幅(短径)×深さ	方 向	埋 土		出土遺物	時 期	備 考
						床面積 (m <sup>2</sup> )	土			
1	A 2・3	円形	逆台形	3.45×(3.15+a)×0.30	8.64	黒褐色粘質シルト等	—	—	古墳時代 中期後半	掘立柱に 切られる。
2	A 1・2	不整棱 円形	直状	(2.11+a)×1.15×0.07	1.33	黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが斑 点状に混入	—	—	古墳時代 中期後半	SP11-17に 切られる。
3	B 1	不整棱 円形	直状	1.33×0.70×0.06	0.72	黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが斑 点状に少量混入	—	—	古墳時代 中期後半	

表6 S B 1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形 素・施 文	調 整		色調(外側) (内面)	胎 土 燒	備 考	因版
				外 面	内 面				
1	口徑 (19.9)	口縫部は内湾し、口縫端部は内 斜窓 3.4	マツメ (ヨコナデ)	ヨコナデ	淡褐色 淡茶褐色	石・長(1~3)金 ○	—	—	
2	口徑 (22.3)	口縫部は内湾し、口縫端部はナ チ子により凹む。	マツメ (ハケ)	ハケ (マツメ)	淡褐色 淡茶褐色	石・長(1~3)金 淡茶褐色	—	—	
3	口徑 (18.0)	口縫部は内湾し、口縫端部は内 斜窓 7.7	マツメ (ハケ)	⑪ハケ (マツメ)	暗褐色 暗茶褐色	石・長(1~3)金 暗茶褐色	—	—	黒斑 5
4	口徑 (17.1)	口縫部は内湾し、口縫端部は内 斜窓 6.9	マツメ (ハケ)	⑫ハケ (マツメ)	灰青褐色 暗茶褐色	石・長(1~3)金 灰青褐色	—	—	塗付有
5	口徑 (16.8)	口縫部は内湾し、口縫端部は内傾す る面をもつ。頭部は沈底状に凹む。	ヨコナデ (5本/cm)	⑬ハケ (5本/cm)	基褐色 暗茶褐色	石・長(1~3)金 基褐色	—	—	
6	口徑 17.6	口縫部は内湾し、口縫端部は内傾す る面をもつ。頭部は沈底状に凹む。	ヨコナデ (5本/cm)	⑭ヨコナデ・ナデ ⑮ハケ (5本/cm)	ヨコナデ ハケ	明茶色 暗茶褐色	石・長(1~4)金・角 ○	—	5
7	口徑 (20.4)	口縫部は外反し、口縫端部は丸 い。	ナデ・ヨコナデ	⑯ハケ (5本/cm) ⑰ケズリ	ハケ ケズリ	淡褐色 淡茶褐色	石・長(1~4)金 —	—	黒斑
8	高杯 残高 2.3	杯部片。	ナデ	マツメ	—	黃褐色 淡茶褐色	苦・金 ○	—	
9	瓶 残高 5.1	把手・断面梢円形。	ナデ	ナデ	—	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~4) —	—	
10	坪壠 (13.0)	大井井部は丸味があり、口縫端部は内 斜窓 3.3	ヨコナデ・ハラケズリ	⑨ヨコナデ・ハラケズリ →回転ナデ・ナデ	暗灰色 灰色	密 ○	—	—	
11	坪壠 (12.8)	天井部は丸く、口縫端部は内傾す る。	ヨコナデ (5本/cm)	⑩ヨコナデ・ナデ →ナデ	青灰色 青褐色	密 ○	火打字	5	
12	坪壠 (13.4)	口縫端部は丸い。口縫部外間に 斜窓 3.0	ナデ	⑪ヨコナデ・ハラケズリ →回転ナデ	灰色 暗灰色	密 ○	—	—	
13	坪壠 (14.0)	底部は丸く、たちあがりは強く内 斜窓 2.7	ヨコナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	密 ○	—	—	
14	坪壠 (12.0)	底部は丸く、たちあがりは強く内 斜窓 3.9	ヨコナデナデ	⑫ヨコナデナデ →ナデ	灰色 乳灰色	密 ○	—	—	
15	坪壠 (11.9)	底部は丸く、たちあがりは強く内 斜窓 3.7	ヨコナデナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	—	—	

SB 1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面				
16	坏身	口径(12.8) 残高 3.5	底部は丸く、たちあがり部は底に内傾する。 たわみ部は丸い。受部端に凹みがある。	回転ナデ →ナデ	回転ナデ →ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
17	坏身	口径(13.6) 残高 3.1	たちあがり部は丸い。受部端に沈積状の凹みがある。	回転ナデ →回転ヘラケズリ	回転ナデ →回転ヘラケズリ	灰色 灰色	密 ○		
18	壺	口径(16.8) 残高 5.4	口徑部は二角形状に肥厚する。	タタキ →回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ○		
19	高杯	底径(8.6) 残高 2.9	脚部は下方に屈曲する。折部 外側に凹状の凹みがある。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
20	器台	残高 5.7	四角状の凹みが巡り、凹みの間に成状文16条。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ○		
21	壺	残高 4.0	口縁下に點付凸唇文1条+押印。	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)		
22	壺	底径(6.8) 残高 2.7	平底。	ミガキ ○ナデ	ナデ(マツメ)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3)全		
23	壺	底径(3.6) 残高 2.3	平底。	タタキ ○ナデ	ハケ→ ナデアゲ	乳白色 乳白色	石・長(1~4)全 黒斑		
24	壺	残高 2.0	口縁部を上方に後退し、縁間に凹槽文3条を施す。円形浮文のはがれ斑。	ハケ(6本/cm) →ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1~2)金 ○		
25	壺	口径(24.6) 残高 2.1	口縁部は沈底文3条+前方仰向沈底+上縁部斜面上に斜面浮文(φ0.7cm)。	マツメ	マツメ	淡褐色 淡褐色	石・長(1)		5
26	壺	口径 10.0 残高 8.2	無施文。	マツメ (ミガキ?)	ヨコナデ ○ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 ○		5
27	器台	口径(34.2) 残高 2.3	口縁部に成状文を施す。底面は20mm、上から5mm の段階斜面で構成される。斜面には成状文(φ0.5cm)。	ミガキ	ナデ ヨコナデ	赤茶色 赤茶色	石・長(1~2)金 ○	塗装	5
28	分割形 上部品	残高 2.0	左の部分に表面から裏面に穿孔(穿孔)、右の部分 に斜面文(上方3mm、下方2mm)、赤色顔料を塗る。	ナデ	—	茶色	石・長(1)金 ○	谷深2	5

表7 SB 1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
29	打製石器	ほぼ完存	サスカイト	1.9	1.3	0.3	0.7	凹基無茎式	5
30	打製石器	完存	サスカイト	2.0	1.2	0.2	1.0	平基無茎式	5
31	打製石器	ほぼ完存	サスカイト	2.6	1.4	0.4	1.5	半基無茎式	5

表8 SB 1 出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
32	劍	革部欠失	鉄	8.6	1.8	0.6	19.3		5
33	刀子	身部	鉄	1.6	6.9	0.3	8.0		5

表9 SB 1 出土遺物観察表 玉類

番号	器種	残存	材質	色	法 量			備 考	図版
					直徑(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
34	白玉	完形	滑石	灰色	0.39	0.11	0.02		5
35	白玉	完形	滑石	灰色	0.38	0.20	0.04		5
36	白玉	完形	滑石	灰色	0.38	0.28	0.05		5
37	臼玉	完形	滑石	灰色	0.45	0.25	0.08		5
38	白玉	完形	滑石	灰色	0.48	0.26	0.08		5
39	白玉	1 / 2	滑石	灰色	0.49	0.22	0.04		5

表10 堀立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		色調(外面)	胎 土 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
40	坏身	口径(14.1) 残高 4.4	火井部は丸く、口縁部は内傾する。 基面三角形の明瞭な後をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		

表11 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面 (内面))	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
41	甕	口径(18.8) 残高 2.3	口縁部は内溝し、口縁端部は内 傾する面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石(1~2) ○		
42	甕	口径(18.5)	口縁部は内溝し、口縁端部は内傾す る面をもつ。口縁端部が少しひび。	ヨコナデ	マメツ	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1)金 ○		
43	甕	口径(12.5) 残高 5.1	口縁部は内溝し、立ち上がる。 口縁端部は丸い。	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ ミガキ	暗茶褐色 暗茶褐色	茶褐色 茶褐色	石(1~5) ○	黒塗 焼付着 6
44	甕	口径(12.4) 残高 4.3	口縁部は内溝し、立ち上がる。 口縁端部は丸い。	ヨコナデ ミガキ ケズリ	ヨコナデ ミガキ?	茶褐色 茶褐色	茶褐色 茶褐色	石(1~5) ○	
45	甕	口径(15.2) 残高 4.5	口縁部は内溝し、立ち上がる。 口縁端部は丸い。	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~5)金 ○	焼付着	
46	高杯	口径(17.6) 残高 3.9	口縁部はわざかに外反す。	ヨコナデ	ヨコナデ ミガキ	淡明茶色 淡茶褐色	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 ○	
47	高杯	残高 5.9	脚部部。蒸込技法。	ナデ(マメツ)	マメツ	淡茶褐色 淡茶褐色	茶褐色 茶褐色	石・長(1)金 ○	
48	高杯	底径(10.8) 残高 2.9	柱窓部焼内面に縫をもつ。標語 は水平。	マメツ(ナデ) ヨコナデ	ケズリ ヨコナデ	淡褐色 茶褐色	茶褐色 茶褐色	石・長(1)金 ○	6
49	高杯	底径(10.1) 残高 1.5	柱窓部焼内面に縫をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ ヨコナデ	淡茶褐色 茶褐色	茶褐色 茶褐色	石・長(1)金 ○	
50	甕	残高 2.8	沈線文5条+刻突文2例。	ミガキ	ナデ(ミガキ?)	茶褐色 茶褐色	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○	
51	甕	口径(27.7) 残高 4.9	大甕品。口縁部は上方に抵張 し、縫面に凹縫文5条と刻印。	ハケ→ミガキ	ミガキ	淡茶色 灰褐色	石・長(1)金 ○	黒塗 焼付着	
52	製塩土器	口径(7.6) 残高 3.2	器輪うすい。	ナデ	タタキ	淡茶褐色 淡茶褐色	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○	
53	甕	残高 2.9	脚部部。軽質土器。	塔子タタキ	ハクリ	黃褐色 暗褐色	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○	6
54	分領形 土製品 鉢	残高 4.3 3.5	表面に10ヶ所穿孔(7ヶ貫通)、裏面に 8ヶ所穿孔(6ヶ貫通)。口の表現あり。	ナデ	—	乳黃褐色	石・長(1) ○	焼取2 6	

表12 SK2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面 (内面))	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
55	甕	残高 5.5	脚部小片。	ヨコナデ (ハケ(7本/2))	ヨコナデ (ハケ→ヘラケズリ)	黃褐色	暗褐色	石・長(1~2)金 ○	

表13 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面 (内面))	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
56	甕	口径(18.2) 残高 3.4	口縁上の方は三角形に肥まる。肩部下 に直角1字を刻す。肩部下に沈線文10条。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ○	SP17	
57	甕	残高 2.3	脚部部。沈線文2条と沈線文間 に波状文5~7条を施す。	五紙ナデ	回転ナデ カキメ	灰色 灰色	密 ○	SP57 卷頭2	

表14 第IV層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面 (内面))	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
58	坏	口径 10.7 残高 4.6	回転ヘラ切り。2/3の残存。 スノコ痕。	ヨコナデ ヨナデ	ヨコナデ ヨナデ	暗灰褐色 暗褐色	密 ○	黒塗?	6
59	坏	口径(10.9) 器高 3.9	回転ヘラ切り。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ ヨナデ	乳灰褐色 乳茶褐色	密 ○	焼付着	
60	坏	口径(11.0) 器高 4.3	回転ヘラ切り。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰褐色 淡灰褐色	密 ○		
61	坏	底径 6.2 残高 2.2	回転ヘラ切り。スノコ痕。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	密 ○		
62	坏	底径 6.2 残高 1.9	回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~2) ○		
63	坏	口径(10.7) 残高 2.8	2/3の残存。	マメツ	マメツ	淡灰褐色 乳白褐色	密 ○	黒塗	6
64	坏	口径 12.9 残高 4.2	回転ヘラ切り。2/3の残存。 スノコ痕。	ヨコナデ	ヨコナデ ヨコナデ→ナデ	暗所褐色 暗灰褐色	密 ○	焼付着	6
65	坏	口径(10.9) 器高 2.6	回転ヘラ切り。2/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰褐色 灰褐色	密 ○		6
66	坏	口径(16.8) 残高 4.3	回転ヘラ切り。1/2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ ヨコナデ→ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	密 ○		

第IV層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調(外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
67	坏	底径 6.9 残高 2.7	回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白褐色 乳白色	青 ○		
68	槌	口径 19.8 残高 7.6	体部が丸味をもつ。回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ (マメフ)	乳白茶色 灰灰褐色	青 ○	黒茎 焼付青	6
69	槌	残高 2.7	体部が丸味をもつ。回転ヘラ切り。	マメフ	ヨコナデ	乳白褐色 乳白色	石・長(1~2)全 ○		
70	槌	底径 6.5 残高 2.4	回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ ミガキ	淡黃白色 淡黃灰色	密 ○		
71	穂	底径 (8.4) 残高 3.9	縫合陶筋。ヘラ切り。京都産。	施鉢	施鉢	淡緑色 淡綠色	密 ○	施上: 灰白色	卷頭2

表15 第V層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調(外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
72	尚坏	口径 (17.2) 残高 4.8	坏部。口縁部はわずかに外反する。	マメフ	マメフ	明黄色褐色 橙茶褐色	石・長(1~3) ○		
73	高坏	底径 (9.6) 残高 8.4	底部部。内面にシボリ痕。尤集接法。	ハケ・ナデ マメフ	工具ナデ ナデ(マメフ)	乳黄茶色 乳黄茶色	石・長(1~3) ○		
74	高坏	残高 8.6	往部中実。茎込技法。	マメフ	⑤板ナデ状	乳茶色 茶色	石・長(1~2) ○		
75	カマド	口径 (30.6) 残高 8.1	口縁部下に把手貼付痕を看取。ヨコナデ	ナデ	ハハケ・ナデ ヨコナデ	灰茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~6) ○	焼付青	6
76	瓶	残高 5.1	把手。断面凸形。	マメフ(ナデ)	ナデ(マメフ)	橙茶色 橙茶色	密 ○		
77	坏蓋	残高 2.1	かえりは下方に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰茶色 灰茶色	密 ○		
78	坏蓋	口径 (17.2) 残高 1.4	口縁部はわずかに下方に屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	赤茶色 灰赤茶色	密 ○		
79	坏	底径 (9.8) 残高 1.7	体部は丸味を帯びる。高台は弱く、底部の内側に付く。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰茶色	密 ○		
80	坏	底径 (7.7) 残高 2.3	回転糸切り。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 白灰色	密 ○		
81	高坏	底径 (9.2) 残高 3.5	底部は下方に屈曲して丸る。解部外間に凸起する。透かし口唇所取。	回転ナデ	回転ナデ	灰茶色 青灰色	密 ○		
82	擂钵	口径 (15.6) 残高 6.1	口縁部内面にわざかに凹字する。口縁部は子型と稱する中に沈漫文2条。	回転ナデ	回転ナデ	赤茶色 赤茶色	密 ○		6
83	壺	口径 (26.6) 残高 7.1	大型品。外以口縁。口縁部の内面を三角形に肥厚する。	底面格子彫き 回転ナデ	回転ナデ・ナデ 彫り	灰茶色 灰茶色	密 ○		
84	壺	残高 9.4	大型品。	平行印彫 →鳥足形?	ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	焼付青	
85	壺	口径 (28.9) 残高 7.6	口縁表面ナデにより凹む。押出凸凹文1条。	②ヨコナデ ④ミガキ	②ヨコナデ ④ハケ→ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○	黒茎	6
86	壺	底径 (7.8) 残高 4.8	上げ底。	ミガキ・ナデ ④ヨコナデ・ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○		6
87	壺	残高 2.7	肩部片片狀文。	ナデ	ナデ	淡茶色 淡茶色	密 ○		

表16 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調(外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
88	坏	口径 (11.5) 残高 4.1	1/4の残存。回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶褐色 乳白褐色	石・長(1~2)全 ○		
89	坏	口径 (15.5) 残高 5.1	口縁部は内溝し。口縁部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 白灰色	密 ○		

## 第3章 榛味四反地遺跡13次調査

### 1. 調査の経緯

#### (1) 調査の経緯

調査は2005（平成17）年11月1日から2006（平成18）年3月30日までの間に実施した。以下、調査工程を略記する。発掘調査は申請者の協力のもと、調査地東側隣接地を調査事務所及び廃土置き場として使用した。10月18日から調査事務所の設置や発掘機材の運搬をする。11月1日、重機にて耕作土、床土、包含層の順番で掘削し、土の種類ごとに堆土置き場においてビニールシートで養生する。11月4日からは包含層を掘り下げ、土層ごとに遺物を取り上げる。11月16日、遺構検出面と調査壁面の精査をし、第Ⅴ層上面にて竪穴住居、土坑、溝、柱穴を検出する。11月22日、測量業者に4級基準点測量を委託し、調査地内に5m四方のグリッドを設定する。その後、調査地南半分で検出した竪穴住居を中心に掘り下げ作業をおこなう。住居群調査終了後、北半分で検出した竪穴住居と溝を中心に、掘り下げ及び測量作業をおこなう。第Ⅳ層以下の土層確認のため、調査区北壁、南壁及び西壁沿いに深掘りトレンチを設定する。2006（平成18）年1月16日より、溝、土坑、柱穴の掘り下げ及び測量作業をおこない、併行して調査壁土塙岡を作成する。2月10日、高所作業車を使用し、遺構完掘状況写真を撮影する。2月18日、榛味四反地遺跡12次調査と13次調査とを合わせて、一般市民対象の現地説明会を開催し、100名を超える参加者を得た。2月20日より、遺構内に設置したセクションベルトの除去や、半蔵の土坑や柱穴の完掘作業、及び土層や遺構の最終確認をおこなう。2月23日、最終確認作業により、新たに検出した柱穴を測量図面上に合成し、図面上及び現場での確認作業をおこなった結果、調査区南西部にて大型建物の存在を確認した。調査期間の関係上、報道関係にのみ報告をおこない、3月9日、調査を終了する。3月10日より重機による埋め戻し作業を開始する。調査地は発掘作業後も水田耕作をおこなうため、大型建物は瓦砾上で保護をした後、包含層、表土層の順に埋め戻し作業をおこなう。天候不良のため、埋め戻し作業に約3週間を費やす。3月27日から発掘機材や測量図面、遺物などを埋蔵文化財センターに運ぶ。3月30日、すべての埋め戻し作業が終了し発掘作業を完了する。

#### (2) 調査組織

調査地	松山市榛味4丁目231番1
遺跡名	榛味四反地遺跡13次調査
調査期間	2005（平成17）年11月1日～2006（平成18）年3月30日
調査面積	820m <sup>2</sup>

## 2. 層位

### (1) 基本層位 (第19・20図)

調査地は標高39.2mに立地し、調査以前は水田であった。調査地の基本層位は、以下のとおりである。なお、第Ⅶ層以下は調査地西、南、北壁に設定した深掘りトレンチで確認した土層である。

**第I層**：近現代の水田耕作に伴う耕作土である。土色の違いで2層に分層される。

第I①層 - 青灰色 (5BG6/1) 粘質土で、調査地全域に堆積する。層厚10~20cmを測る。

第I②層 - 明青灰色 (5BG7/1) 粘質土で、調査地南西部と北西部に堆積する。層厚4~6cmを測る。

**第II層**：近現代の水田耕作に伴う床土である。土色の違いで2層に分層される。

第II①層 - 黄褐色 (7.5YR7/8) 粘質土で、調査地全域に堆積し、層厚8~12cmを測る。

第II②層 - オリーブ灰色 (10Y6/2) 粘質土で、調査地西部に堆積し、層厚8~10cmを測る。

**第III層**：灰色 (7.5Y6/1) 粘質土で、調査地全域に堆積し、層厚6~18cmを測る。土層観察の結果、

本層上面より遺構〔埋土②〕が掘削されていることを確認した。

**第IV層**：褐灰色 (10YR5/1) 粘質土で、調査地中央部から南部に堆積し、層厚8~12cmを測る。本層中からは、古代の土師器、須恵器、陶磁器、瓦が出土した。

**第V層**：灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質シルトで、調査地全域に堆積し、層厚8~18cmを測る。本層中からは主に古墳時代から古代までに時期比定される土師器、須恵器のほか、石器が出土した。土層観察の結果、本層上面より遺構〔埋土③・④〕が掘削されていることを確認した。

**第VI層**：暗褐色 (7.5YR3/2) 粘質シルトで、調査地全域に堆積し、層厚12~26cmを測る。本層中からは、弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。土層観察の結果、本層上面より遺構〔埋土⑤・⑥〕が掘削されていることを確認した。

**第VII層**：黒褐色 (10YR2/3) 粘質シルトで、調査地中央部から北部に堆積し、層厚8~20cmを測る。

本層中からは弥生土器、石器が出土した。土層観察の結果、本層上面より遺構〔埋土⑦・⑧〕が掘削されていることを確認した。

**第VIII層**：極暗褐色 (7.5YR2/3) 粘質シルトで、調査地北西部に堆積し、層厚7~12cmを測る。本層上面が、調査における最終遺構検出面となる。

**第IX層**：褐色 (7.5YR4/6) 粘質シルトで、調査地全域に堆積し、層厚12~36cmを測る。土層観察の結果、本層上面より遺構〔埋土⑨・⑩〕が掘削されていることを確認した。

**第X層**：褐色 (7.5YR4/6) シルトで、調査地全域に堆積し、層厚10~35cmを測る。

**第XI層**：褐灰色 (10YR6/1) 砂疊で、調査地全域に堆積する。

第Ⅶ層上面の標高を測量すると、調査地東北部が最も高く、南西部に向けて緩傾斜する（比高差28cm）。検出遺構や出土遺物から第IV層は古代、第V層は古墳～古代、第VI・VII層は弥生～古墳時代までに堆積したものと考えられる。

### (2) 検出遺構・遺物 (表17)

本調査で検出した遺構は堅穴住居11棟〔弥生時代：2棟、古墳時代：9棟〕、大型建物1棟〔古墳時代初頭〕、掘立柱建物1棟〔古墳時代中期後半以降〕、溝7条〔弥生時代：4条、古墳時代：2条、時期不明：1条〕、土坑8基〔弥生時代：4基、古墳時代：4基〕、柱穴276基である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦、石器、鉄器、玉類（白玉）、軟質土器、分銅形土製品1点、種子、動物遺存体（骨）である。

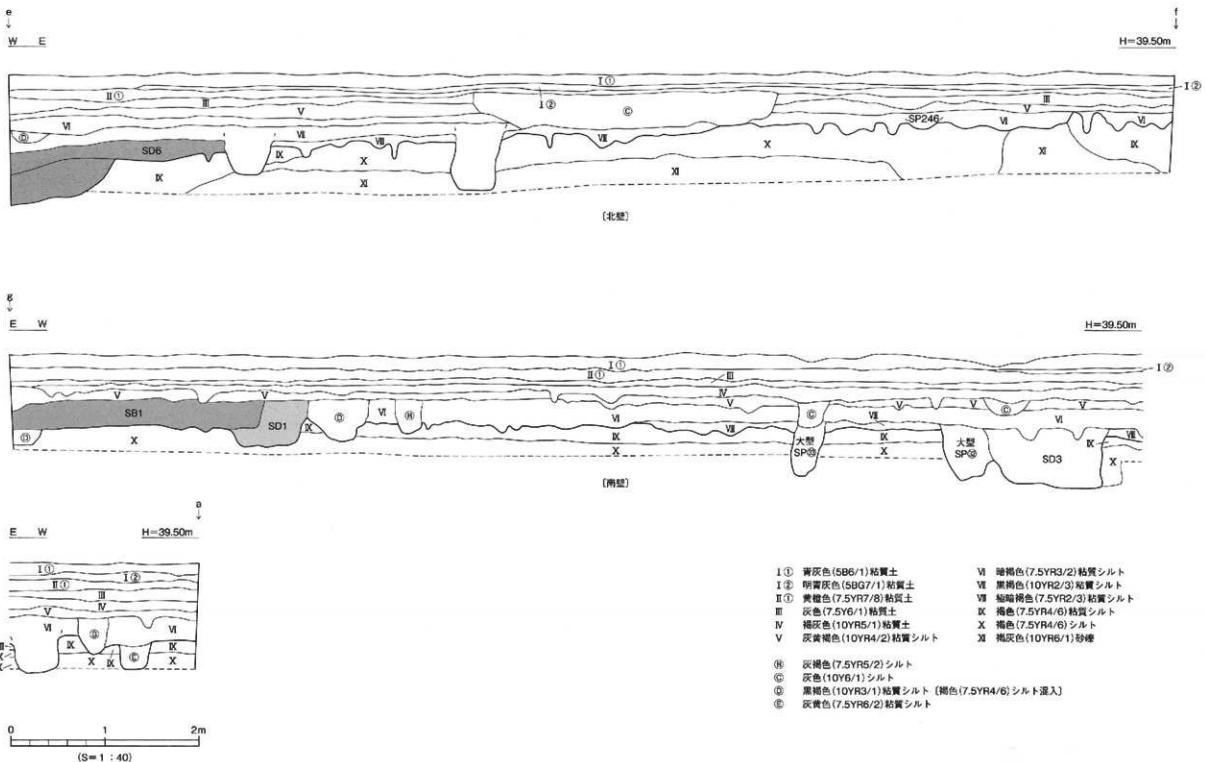
表17 遺構一覧

時期	竪穴住居	掘立柱建物	溝	土坑
弥生前期				SK 1・4
弥生後期	SB 2・4		SD 1・3・4・7	SK 6・7
古墳前期		3号大型建物	SD 2	
古墳中期	SB 1・3・5・6・8・10・11	掘立1	SD 5	SK 2・3・8・9
古墳後期	SB 7・9			
時期不明			SD 6	

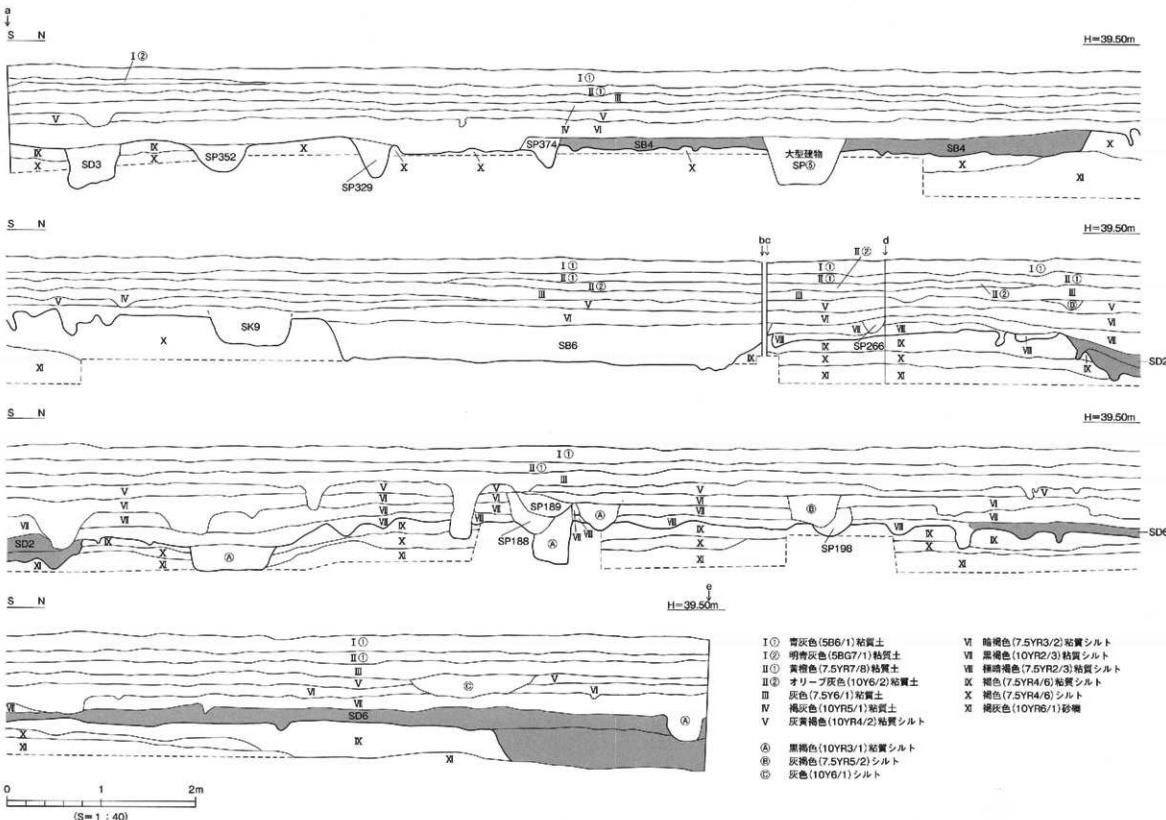
(※ SK 5は欠番)



第18図 調査地位置図 ( $S = 1 : 500$ )

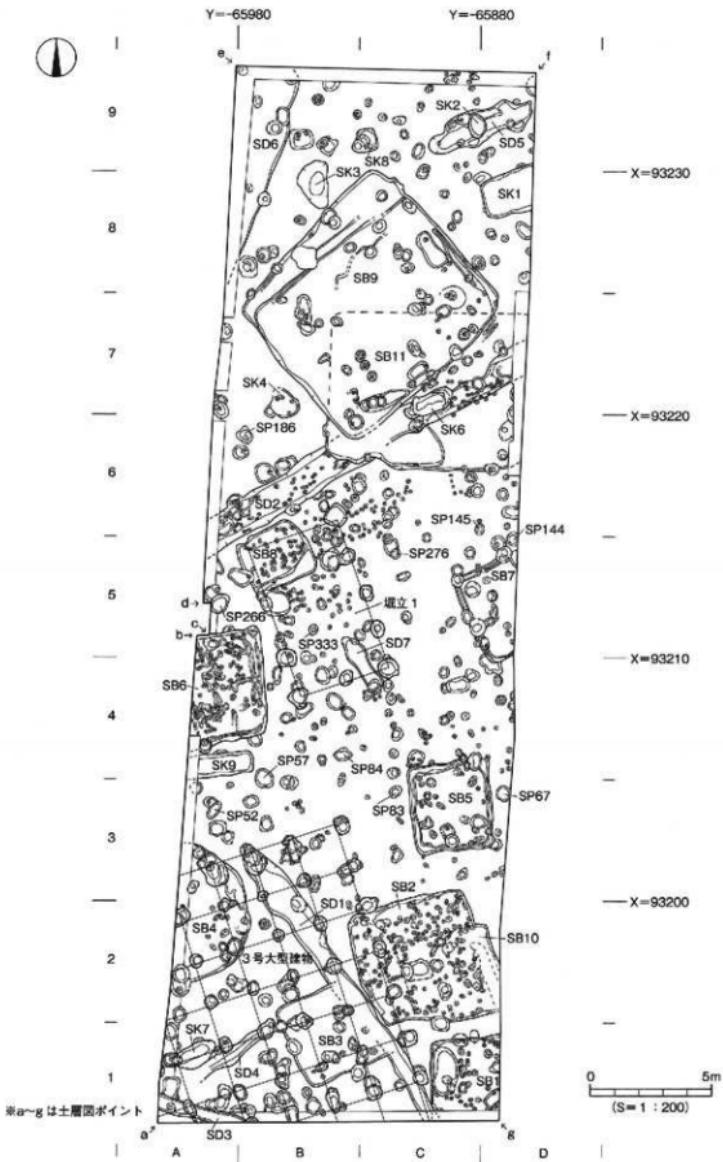


第19図 北壁・南壁土層図



第20図 西壁土層図

層位



第21図 遺構配置図

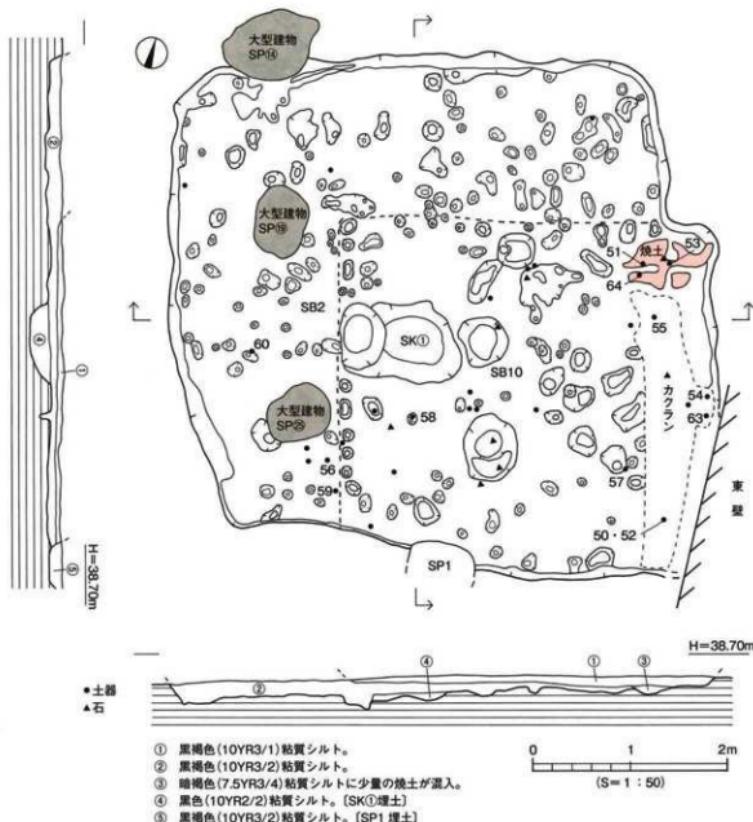
### 3. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は堅穴住居2棟、溝4条、土坑4基である。

#### (1) 堅穴住居

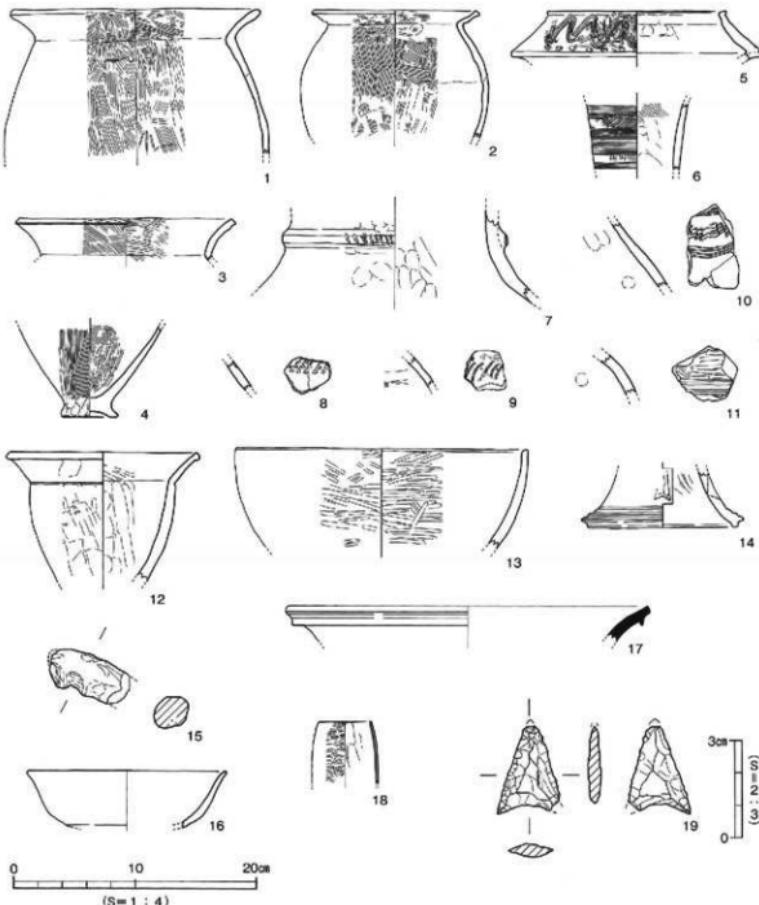
##### S B 2 (第21・22図、図版10)

調査区南東部B 2～C 3区に位置する。住居西側は3基の3号大型建物柱穴(S P⑩・⑪・⑫)と南東側はS B 10、南側はS P 1に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西長5.10m、南北



第22図 S B 2・10測量図

長4.75m、壁高は20cmを測る。住居埋土は黒褐色粘質シルト（②層）である。住居床面中央部にて炉址SK①を検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径1.25m、短径0.9m、深さ20cmを測る。埋土は黒色粘質シルト（④層）である。そのほか床面にて径10~70cm大のピットを多数検出したが、主柱穴は特定することができなかった。なお、調査時はSB10との切り合い関係が明確でなく、遺物は混在している可能性がある。遺物は埋土中から弥生土器と土師器、須恵器、石器が出土した。



第23図 SB2出土遺物実測図

**出土遺物（第23図、図版18）**

弥生土器（1～15）1～4は壺である。1～3は「く」の字状口縁で、4はやや上げ底の底部である。5～11は壺である。5は複合口縁壺で、口縁部外面に波状文と竹管文を施す。6は長頸壺の頸部で細沈線文を施す。7～11は肩部片で、7は外面に刻目凸帶文1条を施す。8・9は貝殻施文による列点文を施す。10・11はヘラ描き沈線文を施す。12・13は鉢である。12は外反口縁の鉢で、口縁端部はやや肥厚する。13は直口口縁で、内外面共にヘラミガキ調整を施す。14は高坏で、脚裾部に凹線文3条と縦縫部に凹線文1条を施す。柱部に矢羽根透かし（末貫通）1ヶ所を施す。15は支脚の受部で、断面円形を呈する。

土師器（16・18）16は高坏で、口縁部はわずかに外反する。18は製塙土器で器壁がうすい。

須恵器（17）17は壺で、口縁部下位に凸線1条を施す。

石器（19）19は凹基無茎式の打製石鎌で、材質はサスカイトである。

時期：出土した弥生土器の特徴と切り合いから、S B 2の廃棄・埋没時期は弥生時代後期後半とする。

**S B 4（第21・24図、図版10）**

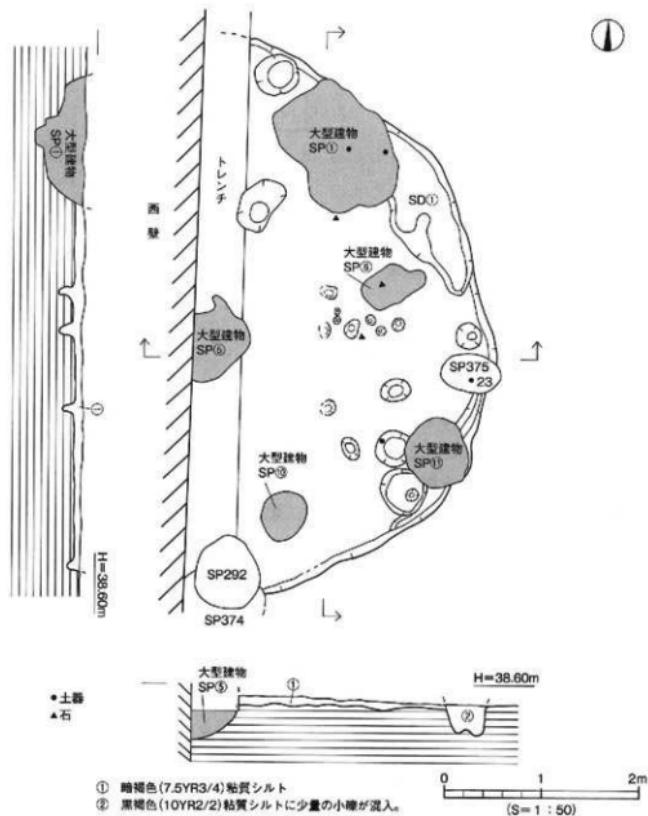
調査区南西部A 2～B 3区に位置する。住居内部を5基の3号大型建物柱穴（S P①・⑤・⑥・⑩・⑪）とS P292・374・375に切られ、西半分は調査区外に続く。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.10m、南北長5.70m、壁高は10cmを測る。住居埋土は暗褐色粘質シルト（①層）である。住居東側壁体沿いにて、溝S D①を検出した。規模は幅22～75cm、深さ7cmを測る。溝埋土は暗褐色粘質シルト（①層）である。住居床面にて径10～50cm大のピット16基を検出したが、主柱穴を特定することはできなかった。遺物は、埋土中から弥生土器片と土師器片が出土した。

**出土遺物（第25図）**

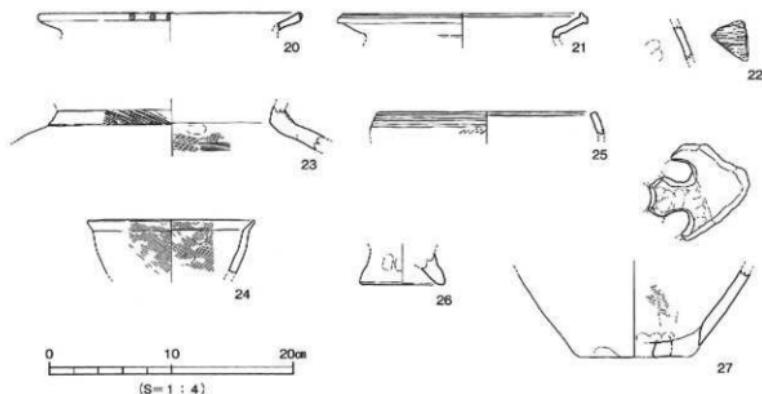
弥生土器（20～26）20～22・26は壺である。20は口縁端部に刻目を施す。21は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文1条を施す。22は胴部小片でタタキ痕を残す。26は壺の底部で、上げ底となる。23は壺で、頸部に貼付凸帶文1条とヘラ描き斜線文を施す。24は鉢で、口縁部は外反する。25は高坏で、口縁部外面に凹線文3条と刺突文を施す。

土師器（27）27は瓶で、梢円形の孔を3ヶ所看取する。

時期：出土した弥生土器の特徴と切り合いから、S B 4の廃棄・埋没時期は弥生時代後期後半とする。



第24図 SB 4 測量図



第25図 S B 4出土遺物実測図

## (2) 溝

## SD 4 (第21図)

調査区南西部A・B 1区に位置する、北東-南西方向の溝である。溝北側及び北東側は3号大型建物柱穴(S P ②・②)とS P 363に、北西側はS K 7に切られる。溝の両端は消失する。規模は検出長2.92m、幅0.56m、深さ9~13cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。溝底は南西から北東に緩傾斜する(比高差8cm)。遺物は埋土中から、弥生土器と鉄器が出土した。

## 出土遺物 (第26図、図版18)

28・29はSD 4出土品である。28は弥生土器の壺で、上げ底である。29は鉄製の鎖である。重さは6.8gを測る。

時期：出土遺物の特徴と切り合いから、弥生時代後期後半以前とする。

## SD 1 (第21図)

調査区南部B 3-C 1区に位置する、北西-南東方向の溝である。溝南西側はS B 3に切られ、溝北端、中央部及び南端は6基の3号大型建物柱穴(S P ②・⑦・⑬・⑭・⑯・⑯)に切られる。溝の北端は消失し、南端は調査区外に続く。規模は検出長13.30m、幅1.48m、深さ15~25cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。溝底は北西から南東へ傾斜する(比高差20cm)。遺物は埋土中から、弥生土器や土師器が出土した。

## 出土遺物 (第26図)

30~35はSD 1出土品である。30は壺の口縁部で口縁端部をわずかに拡張し、口縁端面に凹線文2条、頸部に刻目凸帶文1条を施す。31は複合口縁壺、32・33は高壺の脚部である。32は柱部内面にシボリ痕を看取る。33は3方向に未貫通の矢羽根透かしを施す。34は支脚で、中空となる。35は製塙土器で器壁がうすい。

時期：出土遺物(31・34)の特徴と切り合いから、弥生時代後期後半とする。

**S D 3 (第21図)**

調査区南西隅 A・B 1 区に位置する、北西-南東方向の溝である。溝中央部は 3 号大型建物柱穴 (S P 26) に切られ、溝両端は調査区外に続く。規模は検出長 3.86m、幅 0.64m、深さ 9cm を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。溝底は北西から南東方向に緩傾斜する (比高差 3cm)。遺物は埋土中から、弥生土器が少量出土した。

**出土遺物 (第26図)**

36 は S D 3 出土品である。弥生土器の甕で、口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文 2 条を施す。

時期：埋土が S D 1・4 と酷似することと切り合いから、概ね弥生時代後期後半とする。

**S D 7 (第21図)**

調査区中央部 B 5～C 4 区に位置する、北西-南東方向の溝である。溝南東部は掘立 1 柱穴 (S P 5) に切られ、北東部は S P 333、南西部は S P 97 に切られる。溝の両端は消失する。規模は検出長 2.75m、幅 0.86m、深さ 6～10cm を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。溝底は南東から北西へ緩傾斜する (比高差 7cm)。遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

**出土遺物 (第26図)**

37 は S D 7 出土品である。甕の底部で、わずかに上げ底である。

時期：埋土が S D 1・4 と酷似することから、概ね弥生時代後期後半とする。

**(3) 土 坑****S K 1 (第21・27図)**

調査区北東部 D 8・9 区に位置する。土坑北側は S P 21・216 を切り、東側は調査区外に続く。平面形態は隅丸長方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長 2.10m、南北長 1.68m、深さ 28cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが混入するものである。土坑底面中央部には、やや凹凸がみられる。遺物は埋土中から、弥生土器や石が出土した。なお、遺物は主に土坑南西側底面付近から出土した。

**出土遺物 (第27図、図版18)**

38 は折曲口縁の甕で、口縁端部に刻目、肩部上位にヘラ描き沈線文 2 条を施す。39 は大型壺の口縁部で、口縁部下に段をもち、口縁端面にヘラ描き沈線文 1 条、口縁上端部及び下端部に刻目を施す。40 は大刑壺の底部で、平底である。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代前期前半とする。

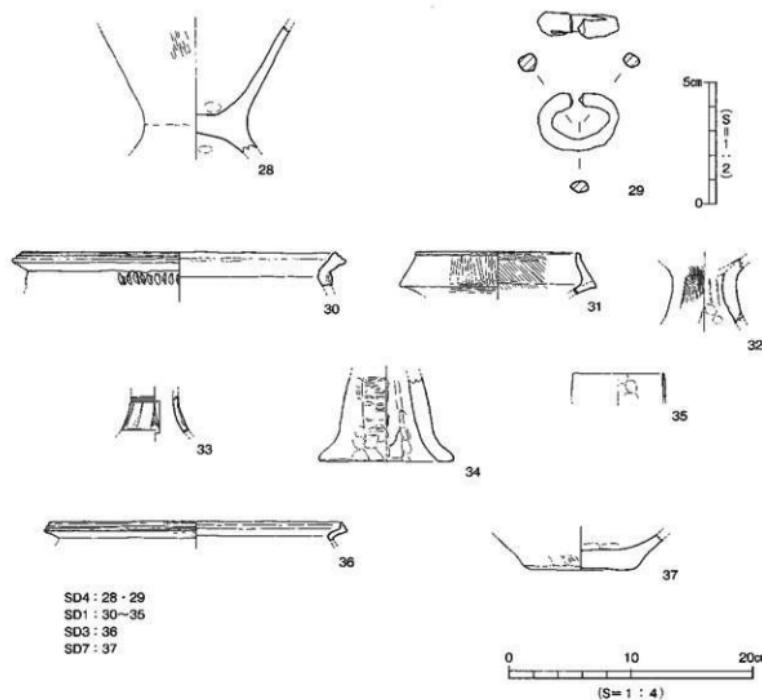
**S K 4 (第21・28図)**

調査区中央部 B 6・7 区に位置する。平面形態は椭円形を呈し、規模は長径 1.15m、短径 0.90m、深さ 48cm を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、西側壁体は一部袋状となる。埋土は黒色粘質土である。土坑底面は平坦で、径 8～12cm の小ピット 4 基を検出した。ピット埋土は黒色粘質土である。遺物は埋土中から、弥生土器が出土した。

**出土遺物 (第28図)**

41・42 は甕で、41 は肩部外面にヘラ描き沈線文 3 条と刺突文を施す。42 は平底の底部で、外面にタテ方向のヘラミガキ調整を施す。43～45 は壺である。43 は肩部片で、ヘラ描きによる線刻を施す。44 はわずかに上げ底、45 は平底の底部で、外面にヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代前期後半とする。



第26図 SD 1・3・4・7出土遺物実測図

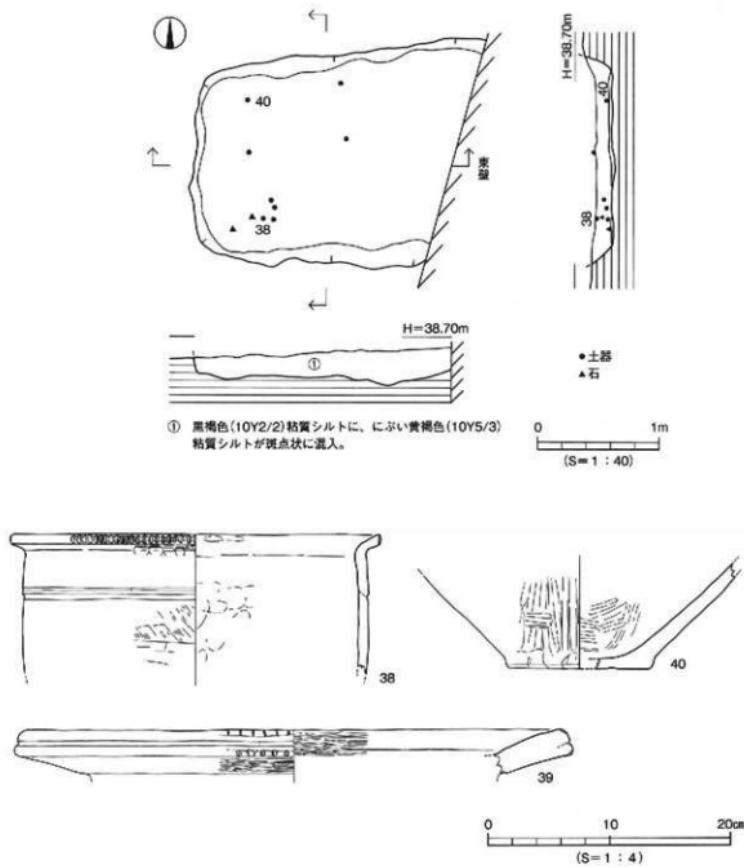
## SK 6 (第21・29図)

調査区中央部C 7区に位置し、SD 2底面にて検出した。平面形態は不整形を呈し、規模は東西長2.21m、南北長0.79m、深さ40cmを測る。断面形態は船底状で、東西壁体沿いはテラス状の高まりをもつ。土坑埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は埋土中から、弥生土器が出土した。

## 出土遺物 (第29図)

46は壺で、口縁端部に凹線文1条、口線上端部及び下端部に刻目、頸部に刻目凸帶文1条を施す。47~49は壺である。47は胴部に貼付凸帶文2条を施す。48は直口口縁壺で、口縁部はわずかに内湾する。49は尖底である。

時期：出土遺物（48・49）の特徴と検出層位から、概ね弥生時代後期後半以前とする。

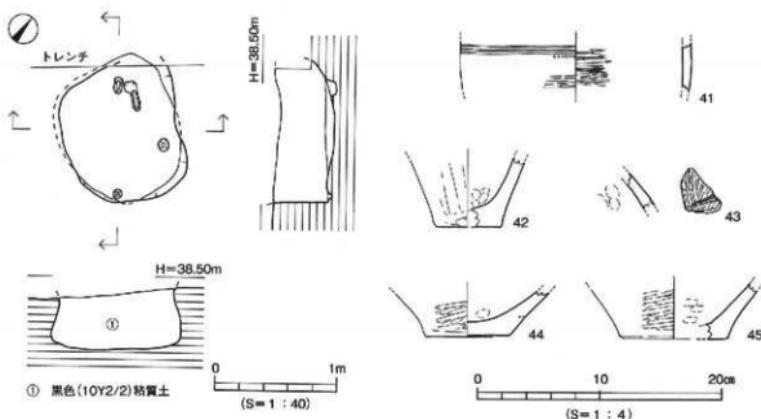


第27図 SK 1測量図・出土遺物実測図

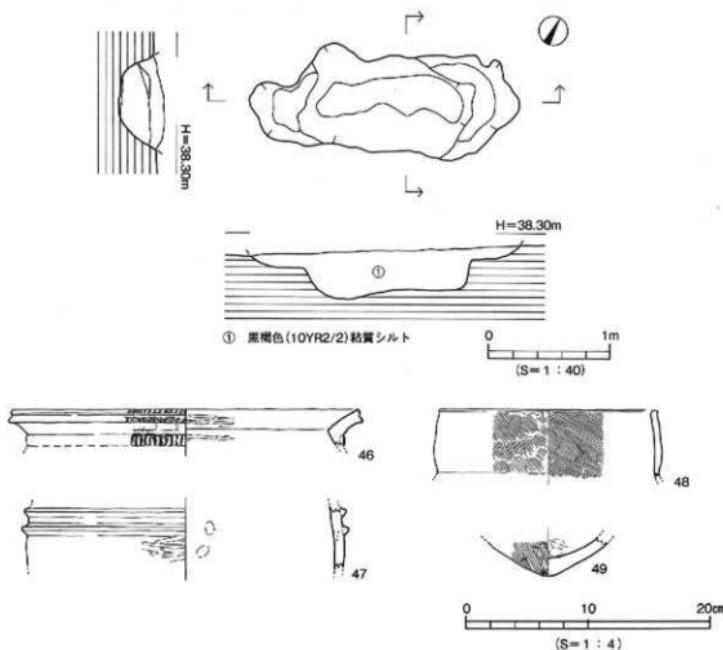
## SK7 (第21・30図)

調査区南西部A1区に位置する。土坑西側は3号大型建物柱穴 (SP②) に切られ、南側はSD4を切る。平面形態は不整楕円形を呈するものと考えられ、規模は検出長径1.56m、短径0.92m、深さ37cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は暗褐色粘質土である。土坑底面は平坦である。土坑内から、遺物の出土はない。

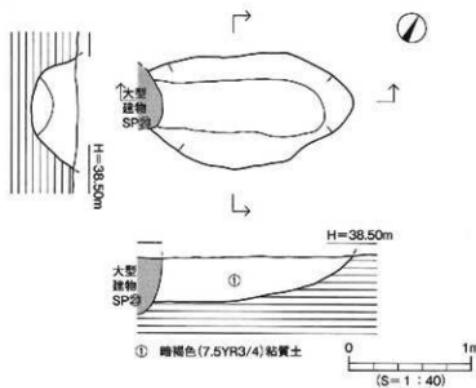
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが切り合いから、概ね弥生時代後期後半以前とする。



第28図 SK4測量図・出土遺物実測図



第29図 SK 6 測量図・出土遺物実測図



第30図 SK 7 測量図

## 4. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は堅穴住居9棟、大型建物1棟、掘立柱建物1棟、溝2条、土坑4基である。

### (1) 堅穴住居

#### S B 10 (第21・22図、図版10)

調査区南東部C・D2区に位置する。住居西側、北側はS B 2を切り、南側はS P 1に切られ、南東側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は推定東西長3.9m、推定南北長3.7m、壁高は8cmを測る。住居埋土は黒褐色粘質シルト(①層)である。住居床面にて、径10~50cm大のビットを多数検出したが、主柱穴は特定するには至らなかった。遺物は埋土中から完形品を含む弥生土器、土師器のほか白玉が1点出土した。遺物は住居中央部付近に弥生土器が集中して出土し、東側からは土師器が出土した。土師器の破片には、接合すると完形品や一部が欠損する完形品があった(50・51・54)。このほか、住居北東隅にて1.0m×0.5mの範囲に焼土の広がりを検出した。検出状況からカマドの残骸と考えられ、焼土内からは土師器壺(51・53)が出土した。なお、調査時はS B 2との切り合い関係が明確でなく、両者を同時に掘り下げたため、遺物は混在している可能性がある。

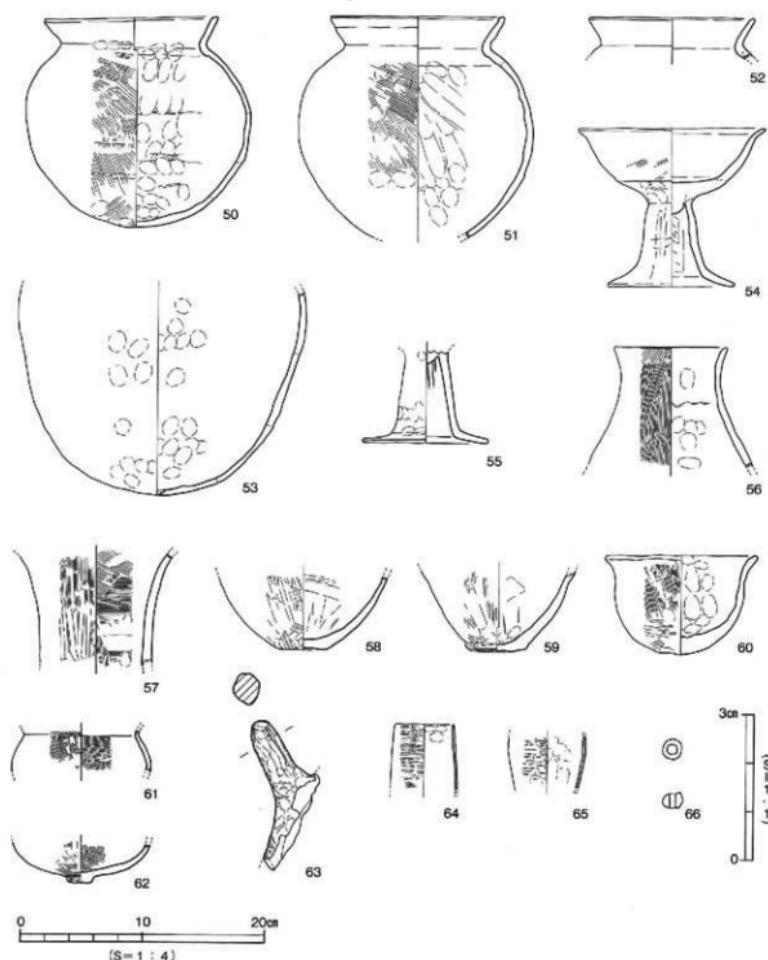
#### 出土遺物 (第31図、図版19)

土師器(50~55・64・65) 50~53は壺で、50は復元完形品である。球形の胴部に口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。51は底部が欠損するが、ほぼ完形品である。球形の胴部に口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する丸味のある面をもつ。52は口縁部が外反し、口縁端部は内傾する面をもつ。53は胴部が長胴である。54は高壺の完形品である。口縁部はわずかに外反し、壺部下位外間に明瞭な稜をもつ。脚部は「ハ」の字状に開き、柱据部内面に明瞭な稜をもつ。壺脚部の接合法は充填技法である。55は高壺の脚部で、柱据部内面に明瞭な稜をもつ。壺脚部の接合法は充填技法である。64・65は製塙土器で、器壁がうすく、熱を受けて変形している。

弥生土器(56~63) 56~58は壺で、56は広口壺、57は長頸壺である。58はわずかに上げ底の底部である。59~62は鉢である。59は平底で、わずかに突出する。60は完形品。61は胴部片で、62は突出する小さな平底である。63は支脚の受部で、断面形態は円形である。

装飾品(66) 66は滑石製の白玉で、直径0.40cm、高さ0.25cm、重さ0.05gを測る。

時期：出土した土師器の特徴と切り合いから、古墳時代中期前半とする。



第31図 S B 10出土遺物実測図

**S B 1** (第21・32図、図版11)

調査区南東部C・D 1区に位置する。住居西側は溝S D 1を切り、北側はS P 372・373に切られ、住居東側及び南側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.74m、南北検出長3.74m、壁高は18cmを測る。住居埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。住居床面西側にて、土坑S K①を検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径2.0m、短径1.0m、深さ24cmを測る。埋土は黒色粘質シルト（④層）である。床面東側にて、土坑S K②を検出した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は長さ1.0m、幅0.5m、深さ12cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが少量混入するもの（②層）である。このほか、住居床面にて径10～40cm大のピット30基を検出した。遺物は埋土中から弥生土器、土師器、須恵器のほか、土錐が出土した。

## 出土遺物（第32図、図版20）

土師器（67～70）67・68は壺で口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。69は楕で、口縁部は内湾する。70は土錐で、径0.4cmの孔を穿つ。

須恵器（71～73）71は扁平な天井部をもつ壺蓋で、口縁端部は内傾する面をもつ。72は壺身で、たちあがり端部は内傾する凹面をもつ。73是有蓋高壺の蓋で、つまみ中央部は凹み、稜は明瞭である。

弥生土器（74・75）74は壺の頸部片で、外面にヘラ描き沈線文3条を施す。75は大型壺の胴部で、外面にヘラ描き沈線文3条を施す。

時期：出土した土師器や須恵器の特徴と切り合いで、S B 1の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半とする。

**S B 3** (第21・33図、図版11)

調査区南部B 1～C 2区に位置する。住居東側はS D 1を切り、住居北側はS P 30、西側はS P 28・29、南側はS P 10に切られる。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.30m、南北長3.67m、壁高は14cmを測る。住居埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。住居床面にて径15～65cm大のピット10基を検出したが、主柱穴を特定するには至らなかった。なお、住居床面にて4基の3号大型建物柱穴（S P 28・29・30・31）を検出した。遺物は埋土中から弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。

## 出土遺物（第34図、図版20）

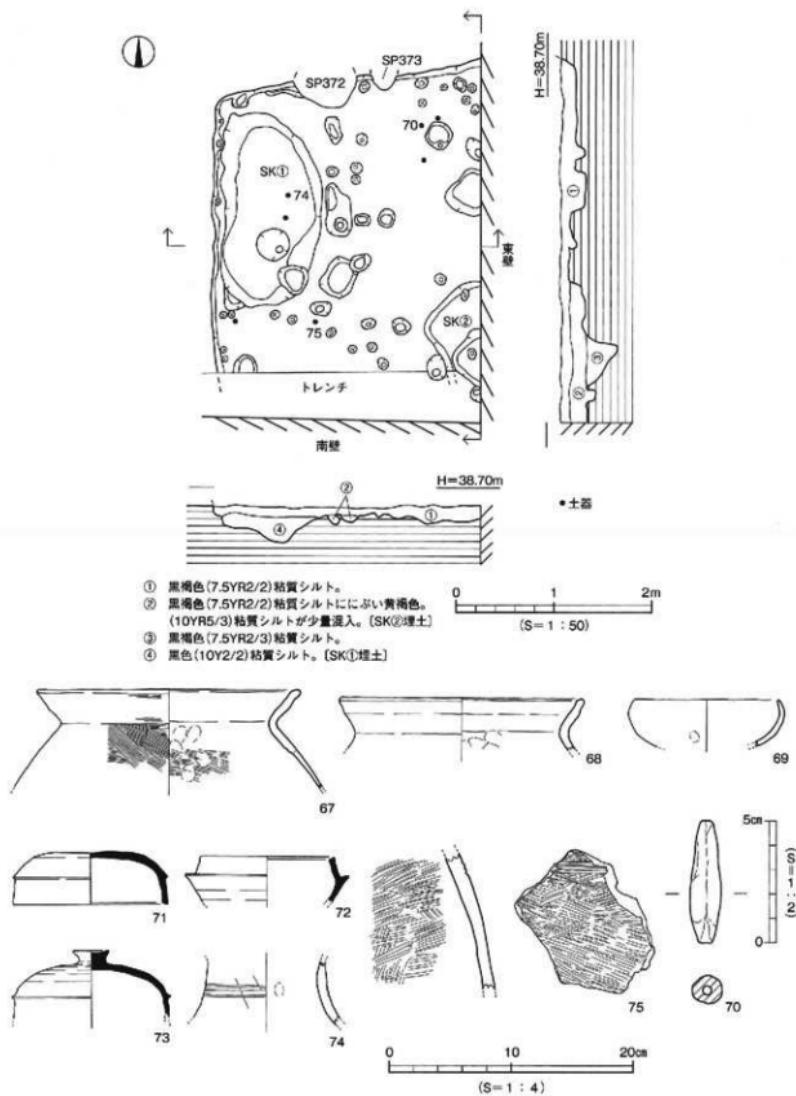
土師器（76～79）76～79は壺で、76は底部を欠損するが、ほぼ完形品である。扁球形の胴部に口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する丸味のある面をもつ。77・78は口縁部が内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。79は口縁部が直立し、口縁端部は内傾する面をもつ。

須恵器（80～82）80は壺蓋で、口縁端部は内傾する凹面をなす。81は有蓋高壺の蓋である。つまみ中央部がわずかに突出し、口縁端部は内傾する。82は無蓋高壺で、壺部中位に凸線2条、凸線間に波状文3～4条を施す。脚部に長方形状の透かし2ヶ所を看取る。

弥生土器（83）折曲口縁の壺で、口縁端部に刻目を施す。

石器（84）84は緑色片岩製の石庖丁である。

時期：出土した土師器、須恵器の特徴と切り合いで、S B 3の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半とする。



第32図 S B 1測量図・出土遺物実測図

## S B 5 (第21・35図、図版12)

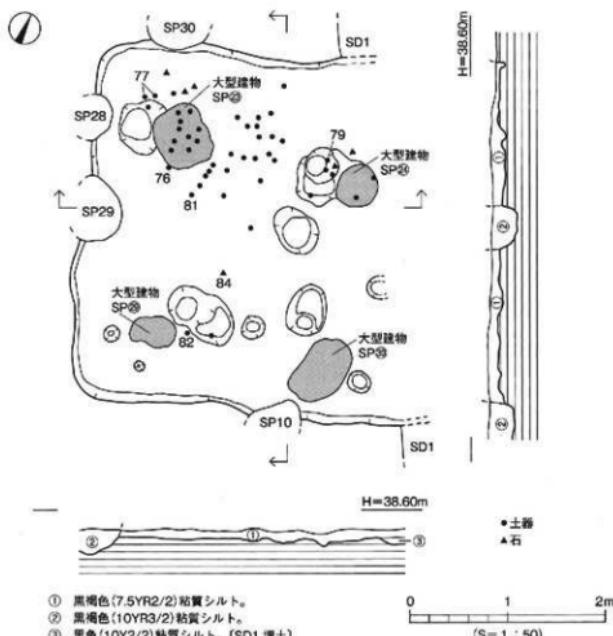
調査区南東部C 3～D 4区に位置する。住居北側はS P 68・73・74、南側はS P 271、東側はS P 277に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西長3.35m、南北長3.55m、壁高は8cmを測る。住居埋土は暗褐色粘質シルト(①層)である。主柱穴はS P ①～④の4本を確認した。各柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は径25～30cm、深さ25～40cmを測る。柱穴掘り方埋土は暗褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入するもの(②層)である。住居壁体沿いに溝を検出した。規模は幅10～31cm、深さ9cmを測る。溝埋土は暗褐色粘質シルト(③層)である。遺物は埋土中から、土師器と須恵器が出土した。

## 出土遺物 (第35図)

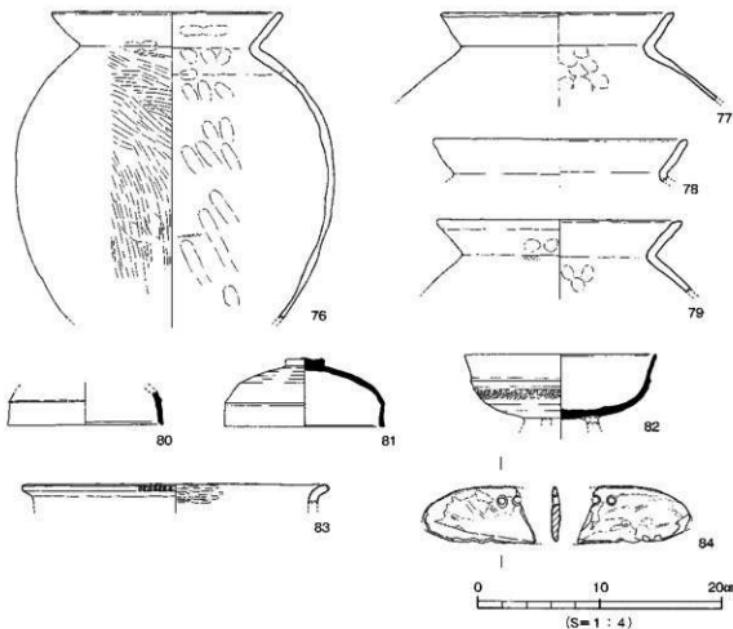
土師器 (85～88) 85～87は楕で、口縁部が内湾してたちあがる。86の底部外面にヘラ記号を看取する。88は直口口縁で、口縁端部はわずかに内傾する。

須恵器 (89・90) 89は坏蓋で、口縁端部は内傾する凹面をなす。90は坏身で底部は丸味をもち、たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みが巡る。

時期：出土遺物の特徴から、S B 5の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半とする。



第33図 S B 3測量図



第34図 S B 3出土遺物実測図

## S B 6 (第21・36図、図版13)

調査区中央部西側A 4～B 5区に位置する。住居南側はS P 86に切られ、西側は調査区外に続く。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.00m、南北長4.50m、壁高は30cmを測る。住居埋土は暗褐色粘質シルト(①層)である。住居壁体沿いに周壁溝を検出した。周壁溝は幅12～15cm、深さ3～6cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルト(①層)である。住居床面にて数条の溝を検出した。溝は幅8～12cm、深さ3～6cmを測る。溝埋土は暗褐色粘質シルト(①層)である。このほか住居底面にて大小40基のピットを検出したが、主柱穴を特定するには至らなかった。遺物は床面中央部西側の埋土下位付近から、ほぼ完形の小型壺(93)や土師器片、須恵器片などが出土したほか、埋土上位より弥生土器、鉄器、石器と径10～20cm大の円礫がまとめて出土した。

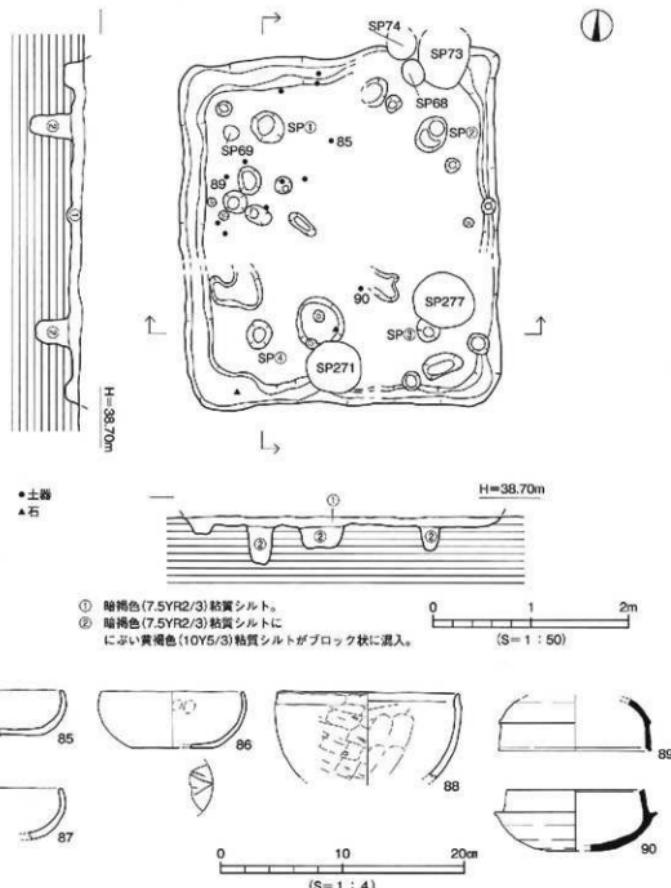
## 出土遺物 (第37図、図版21)

土師器(91～105) 91は壺で、口縁部は外反し口縁端部は丸い。口縁部中位に不明瞭な稜をもつ。92～98は壺である。92は直口口縁壺で、口縁端部は「コ」の字状である。93～98は小型壺である。93は完形品で、口縁部は外反し口縁部中位に明瞭な稜をもつ。94は口縁部が直立気味で、口縁端部は丸い。95～98は胴部片である。97・98は内面にヘラケズリ調整を施す。99はミニチュア品。100は楕で、口縁部は外傾して立ち上がる。101～105は高壺である。101・102は壺部で、口縁部はわずかに外反し、

坏部下位に不明瞭な稜をもつ。103~105は脚部である。103・104は柱裾部内面に明瞭な稜をもつ。105の坏脚部接合法は充填技法である。

須恵器 (106~108) 106は坏蓋で口縁端部は内傾し、わずかに凹面をなす。107・108は蓋である。107は口縁部に凸線1条と波状文3条を施す。108は脚部中位に径1.6cmの孔を穿つ。

瓦質土器 (109) 109は瓦質土器で、口縁部は断面形態が三角形状に肥厚する。口縁端部下位に波状文3条を施す。



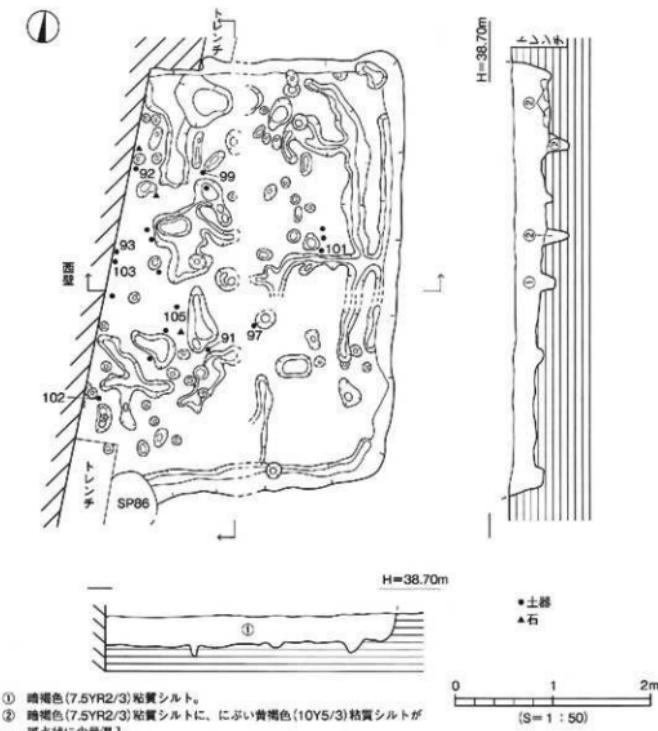
第35図 SB 5測量図・出土遺物実測図

弥生土器（110～113）110・111は壺の口縁部で、110は口縁端面に四線文1条と頸部に押圧凸帯文1条を施す。112・113は壺である。112は広口壺で口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に四線文4条を施す。113は肩部片で刺突文を施す。

石器（114・115）114・115はサスカイト製の打製石器である。

鉄器（116・117）116・117は器種不明の鉄器である。116は重量34g、117は23gを測る。

時期：出土した土師器、須恵器の特徴から、S B 6 の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半とする。



第36図 S B 6 測量図

**S B 8 (第21・38図、図版12)**

調査区中央部西側B 5・6区に位置する。住居内部を掘立1、西側はS P 262、南側はSP127・130・131に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西長28m、南北長24m、壁高は35cmを測る。住居埋土は2層に分層され、上層は黒色粘質シルト(①層)、下層は黒色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが斑点状に混入するもの(②層)、にぶい黄褐色粘質シルト(③層)である。住居南側から南東部にかけてテラス状の段を検出した。規模は幅0.4~1.0m、高さ15cmを測る。このほか、住居底面にて径10~20cm大のピットを32基検出したが、主柱穴を特定するには至らなかった。遺物は埋土中より弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

**出土遺物 (第38図、図版21)**

土師器 (118・119) 118は壺で口縁部は内湾し、口縁端部は「コ」の字状を呈する。119は壺で、胴部に貝殻文を施す。

須恵器 (120・121) 120は壺身で、たちあがり端部は内傾する面をもつ。121は高壺で、脚部に長方形の透かし3ヶ所を施す。

弥生土器 (122~124) 122は底部を欠損するほぼ完形の広口壺である。口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文2条と頸部に刻目を施す。123・124は高壺である。123は口縁部に凹線文2条と凹線文間に貝殻文を施す。124は口縁部に凹線文2条と凹線文間に刻目を施す。

時期：出土した土師器、須恵器の特徴から、S B 8の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半とする。

**S B 11 (第21・39図、図版14)**

調査区北部B 6~D 7区に位置する。住居北西側はS B 9、南側はS D 2を切り、西側はS P 187、南側はS P 149・195・382に切られ、東側は調査区外に続く。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長8.0m、南北検出長6.4m、壁高は20cmを測る。住居埋土は暗褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが混入するものである。住居底面にて40~80cm大のピット4基を検出したが、主柱穴を特定するには至らなかった。遺物は埋土中から弥生土器、須恵器、土師器、石器、白玉が出土した。

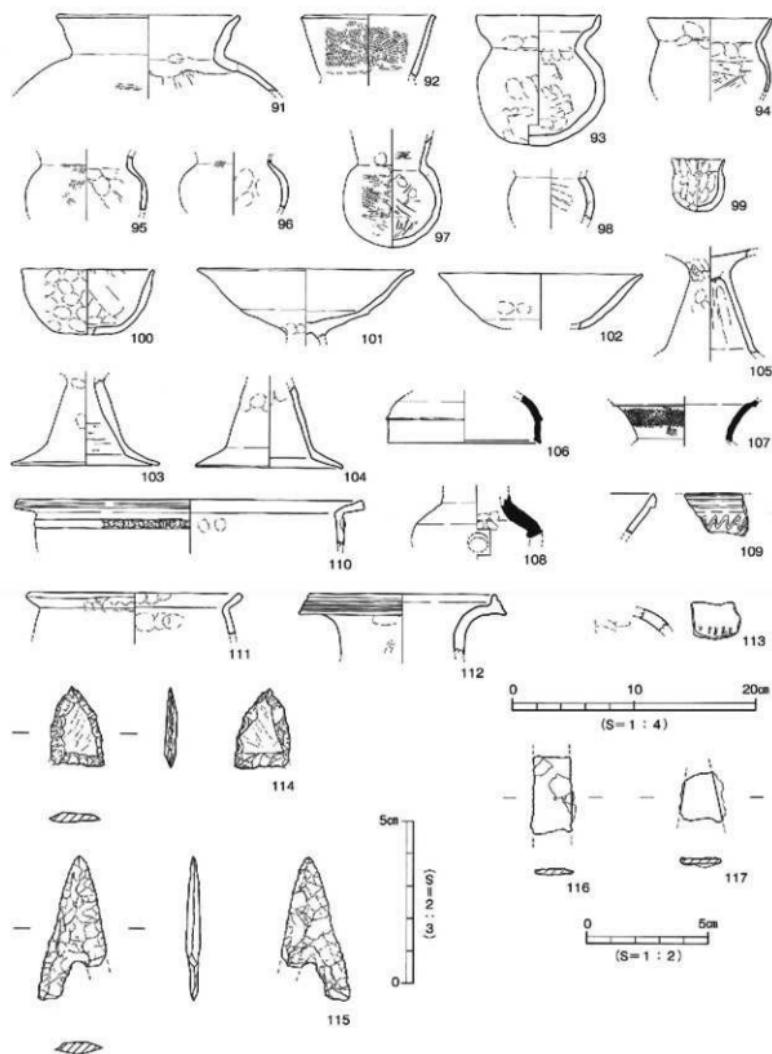
**出土遺物 (第40・41図)**

土師器 (125~127・151) 125は壺で、口縁部は内湾し口縁端部は内傾する面をもつ。126・127は高壺である。127は脚部で、壺脚部の接合法は差込技法である。151は製塩土器で器壁がうすい。

須恵器 (128~138) 128~130は壺蓋である。128は天井部が丸く、口縁端部は内傾する凹面をなし、縁は明瞭である。129・130は口縁端部が丸く、130は縁が凹線状に凹む。131・132は壺身である。両者共に底部は丸味をもち、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。133~135は高壺である。133は無蓋高壺で、壺部中央に凹線文2条と波状文を施す。134・135は脚部で、134は長方形の透かし1ヶ所を看取る。135は脚端部を下方に屈曲し、透かし1ヶ所を看取る。136・137は広口壺である。両者共に口縁端部は丸味のある長方形に肥厚する。138は壺で、口縁端部を三角形状に肥厚する。

弥生土器 (139~150) 139~141は壺である。139・140は口縁端面に凹線文、頸部に押庄凸帯文1条を施す。141は折曲口縁で、口縁端部に刻目を施す。142~145は複合口縁壺である。142は半截竹管文と竹管文を施す。144は刻目、145は波状文を施す。146・147は広口壺である。146は口縁部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文2条と刻目を施す。147は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文4条と山形文を施す。大型品。148は壺の底部で、上げ底である。149は支脚の受部で、中空となる。150は器種不明品である。

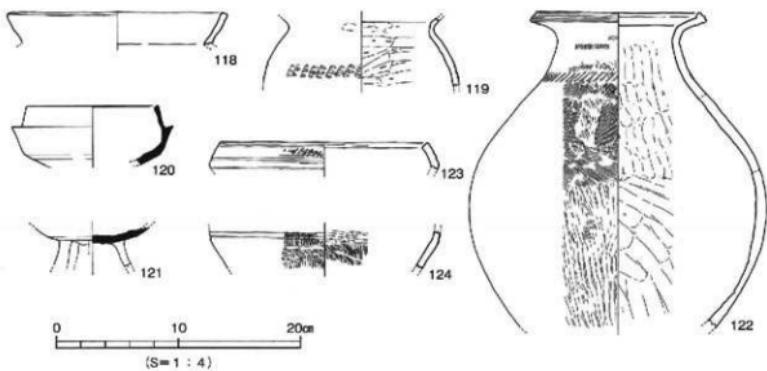
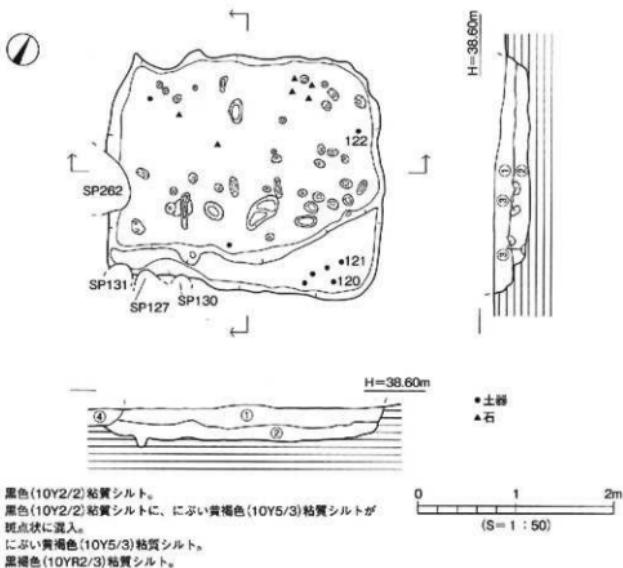
石器 (152) 152は緑色片岩製の石庵丁で、1/3の残存である。



第37図 SB 6出土遺物実測図

装飾品 (153) 153は滑石製の白玉で、直径0.70cm、高さ0.20cm、重さ0.14gを測る。

時期：出土した土師器、須恵器の特徴と切り合いから、SB11の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半とする。



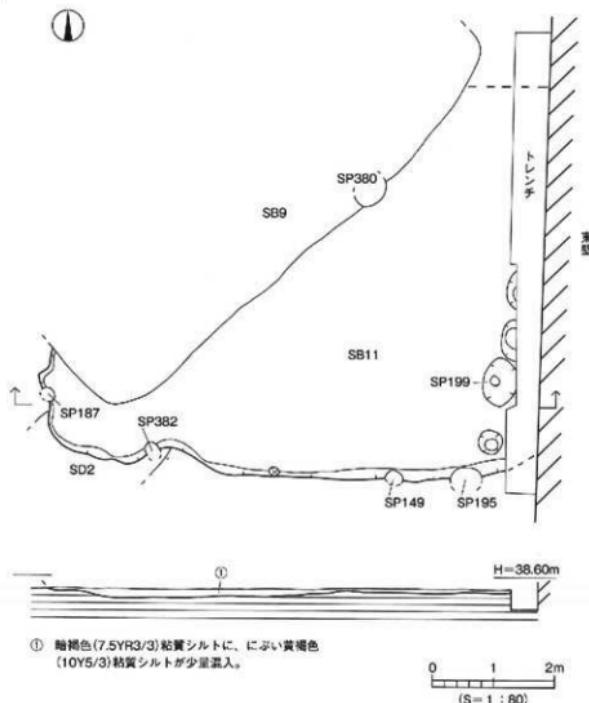
第38図 SB8測量図・出土遺物実測図

## SB9（第21・42図、図版14）

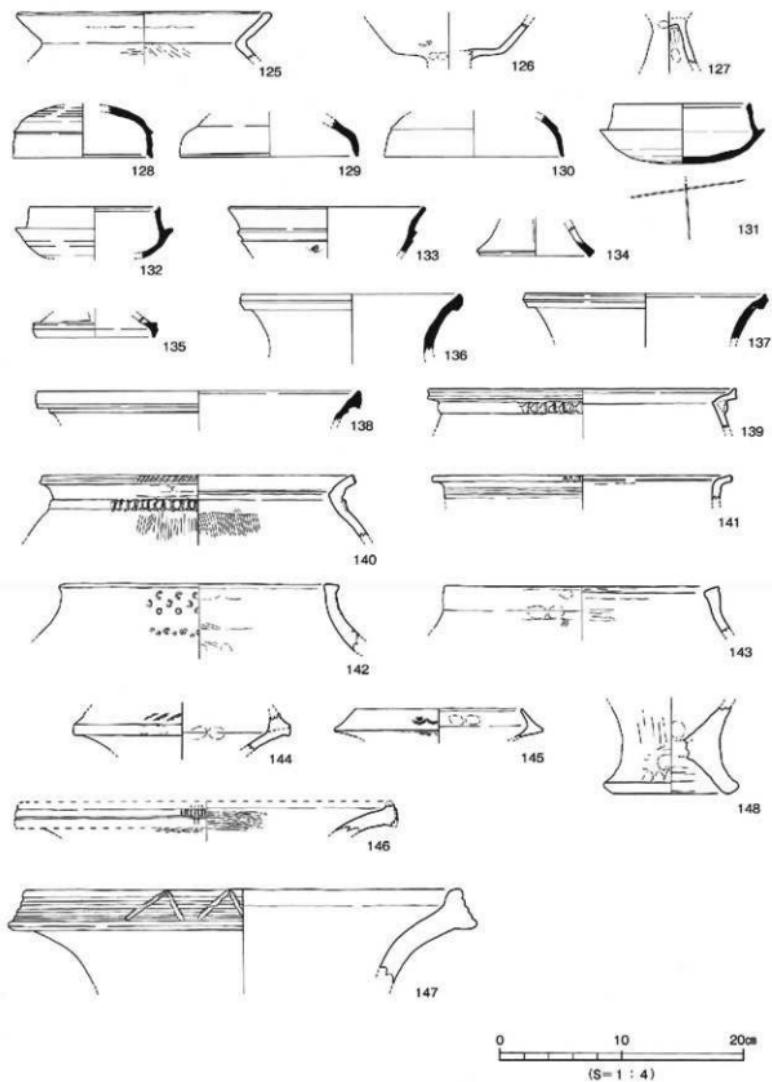
SB9は調査区北部B6～D8区に位置する。調査当初は、住居北東隅がやや突出する方形プランの住居と考え埋土の掘り下げをおこなった。埋土を掘り下げた時点で、方形プランをなす住居（改築時）を確認し、2棟の重複住居であることがわかった。

その後土層観察の結果、先行する時期の住居は埋土②、後出する時期の住居は主に埋土①の住居であることがわかった。なお、重複か建替なのか判断しがたいが、住居床面の標高値や住居形態から建替と考えた。なお、出土遺物は埋土下位で取り上げたもの（154～174）と埋土上位で取り上げたもの（175～208）とを、別々で掲載した。ここでは、構築時と改築時（縮小）とに分けて説明する。

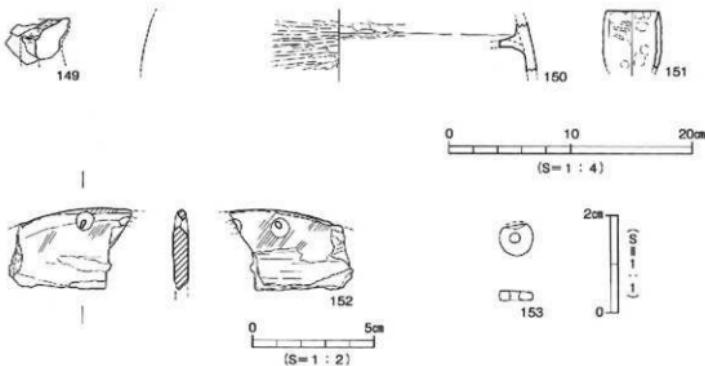
i) 構築時：住居南東側はSB11、南側はSD2を切り、5基の柱穴（SP257・261・304・379・380）に切られる。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は北東～南西長8.2m、北西～南東長7.8m、壁高24cm、床面積64m<sup>2</sup>を測る。住居埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入するもの（②層）である。住居床面にて径40cmのピット1基を検出したが、主柱穴は不明である。



第39図 SB11測量図



第40図 SB 11出土遺物実測図(1)



第41図 S B11出土遺物実測図(2)

ii) 改築時：平面形態は方形を呈し、規模は北東－南西長8.6m、北西－南東長6.6m、壁高20cm、床面積56m<sup>2</sup>を測る。住居埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。主柱穴はS P①～④の4本を確認した。各柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は径30～60cm、深さ20cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色粘質シルトに、灰黄色粘質シルトが少量混入するもの（⑤層）である。周壁溝は住居北西側と北東側で検出した。規模は幅15～30cm、深さ10cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトに、灰色砂が少量混入するもの（④層）である。このほか、住居床面にて柱穴30基を検出した。平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は径40～80cm、深さ15cmを測る。埋土は黒色土である。また、住居北東側で土坑SK①を検出した。平面形態は不整椭円形を呈し、規模は長径1.6m、短径0.6m、深さ16cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトに、灰色砂が少量混入するもの（④層）である。構築時及び改築時の北壁付近には、径1.2mの範囲に焼土塊を検出したが、おそらくカマドの残骸ではないかと推測される。遺物は住居南東部の埋土中位付近から、ほぼ完形の須恵器坏身2点（181・182）と、埋土中より土師器片や須恵器片、白玉、鉄器片、紡錘車、土鍤が出土した。

#### 出土遺物（第43・44図、図版22・23）

##### ①埋土下位出土品

土師器（154～172・174）154～165は壺である。口縁部が内湾するもの（154～156・158～165）と外反するもの（157）に分けられる。口縁部が内湾するものには、口縁部中位に稜をもつもの（159～165）、稜をもたないもの（154～156、158）がある。166は椀で、口縁部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸い。167・168は高杯である。168は柱据部内面に稜をもつ。169～172は瓶である。170は楕円形孔を1ヶ所取る。171・172は把手で、断面形態は楕円形を呈する。174は製塙土器で器壺がうすく、口縁端部は尖る。

##### 須恵器（173）173は須恵器の広口壺で、口縁端部下に凸線1条を施す。

##### ②埋土上位出土品

須恵器（175～196）175～177は壺蓋である。175は天井部がやや扁平で、口縁端部は内傾する凹面をなす。176・177は天井部が丸く、口縁端部は内傾する凹面をなす。178～182は壺身である。181・

182は完形品。178・180は底部が扁平で、179・181・182は丸い。たちあがり端部は、すべて内傾する凹面をなす。183～189は高坏である。183・184は有蓋高坏の蓋で、つまみ中央部が凹み、183は口縁端部が内傾する凹面をなす。185～187は無蓋高坏である。185は台形状の透かし3ヶ所を看取する。186・187は口縁部中位に凸線と下位に波状文を施す。188は脚部に長方形状の透かし2ヶ所、189は1ヶ所を施す。190・191は椀である。190は胴部中位に凸線2条と凸線間に波状文を施す。191は凸線1条と波状文を施す。192・193は甌である。両者共に胴部中位に沈線2条と沈線間に波状文を施す。194は短頸甌で口縁部は短く直立し、端部は丸い。195・196は甌で、195は口縁端部を長方形に肥厚する。196は口縁部下位に凸線1条を施す。

土師器（197・204）197は甌の把手で、断面形態は梢円形を呈する。204は土錐で、径0.4cm大の孔を穿つ。

弥生土器（198～203）198は甌の底部で、平底である。外面にタタキ調整を施す。199～203は壺である。199は広口壺で口縁部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文3条を施す。200～203は肩部片である。200は沈線文2条と貝殻文、201は貝殻文、202はヘラ描きによる線刻、203は刺突文を施す。

石器（205）205は完形の有孔円板である。滑石製。

鉄器（206）206は鉄製の刃である。長さ10.1cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm、重さ20.3gを測る。

装飾品（207・208）207・208は滑石製の白玉で、直径0.46～0.60cm、高さ0.30～0.41cm、重さ0.10～0.20gである。

時期：埋土上位出土品の特徴より、SB9の廃棄・埋没時期は古墳時代後期前半とする。

#### SB7（第21・45図）

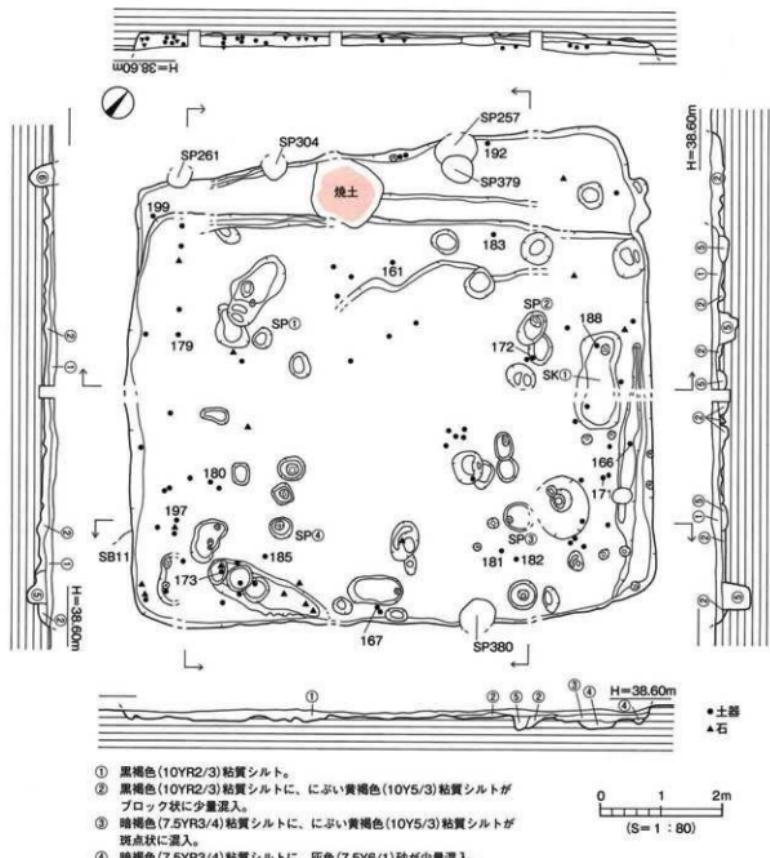
調査区中央部東側C・D5区に位置する。住居北側はSP140・300・311・376、西側はSP113・114・115・135・378に切られ、住居東側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西検出長2.8m、南北長3.8m、壁高は10cmを測る。住居埋土は極暗褐色粘質シルト（①層）である。周壁溝は住居北・西・南側で検出した。規模は幅12～24cm、深さ18cmを測る。埋土は極暗褐色粘質シルト（①層）である。床面にて径15～45cm大のビットを5基検出したが、主柱穴は特定できなかった。遺物は埋土中から土師器片、須恵器片が少量出土した。

#### 出土遺物（第45図）

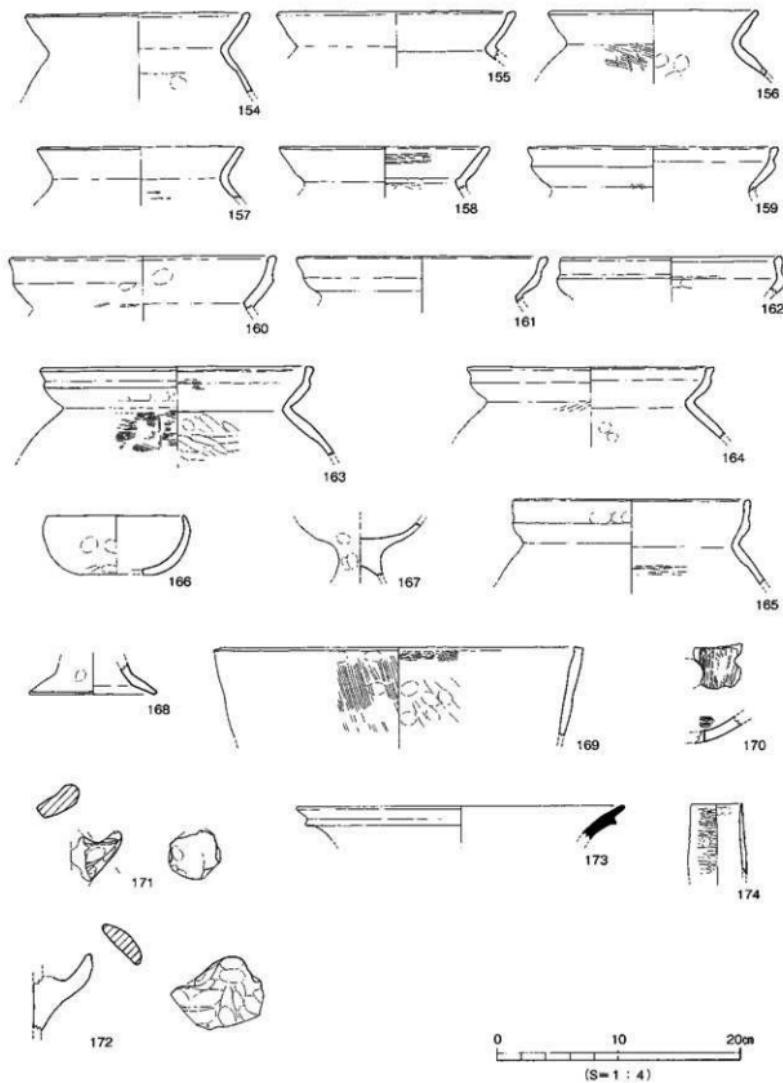
土師器（209）209は土師器の高坏で、坏部下位に明瞭な稜をもつ。

須恵器（210）210は坏蓋片で、口縁端部は内傾する凹面をなす。

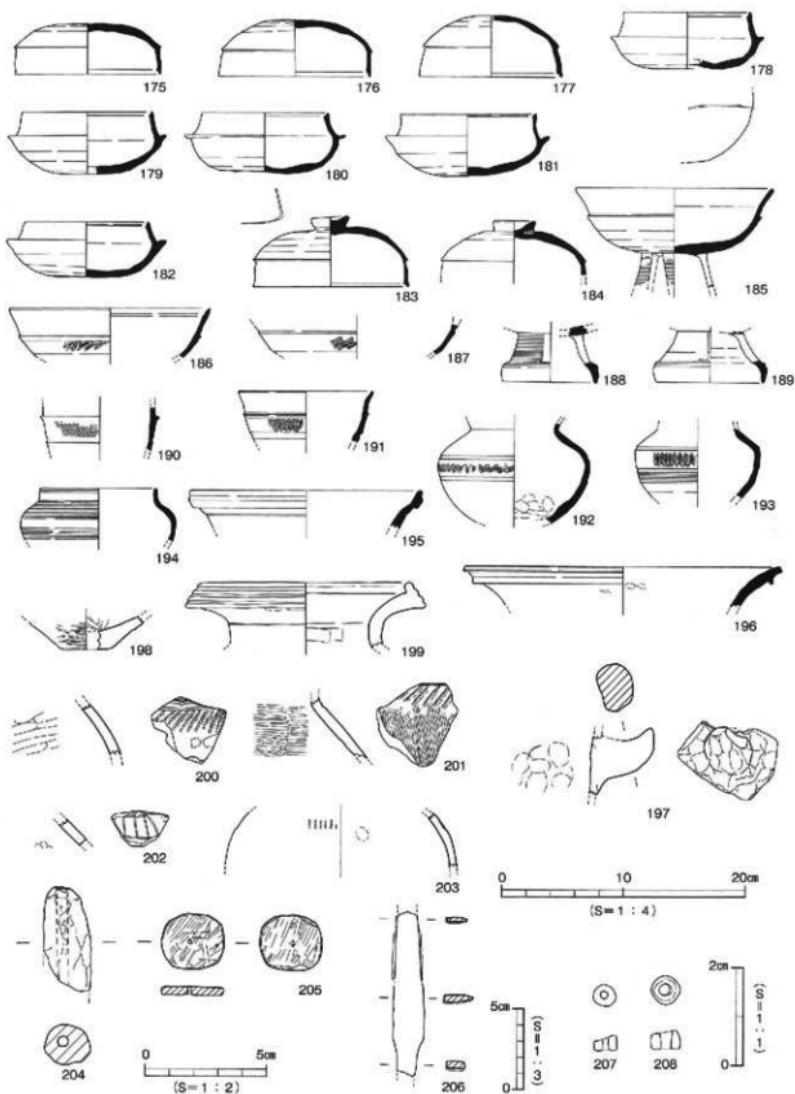
時期：出土遺物が少なく時期特定は難しいが、出土遺物の特徴より、SB7の廃棄・埋没時期は、概ね古墳時代後期前半とする。



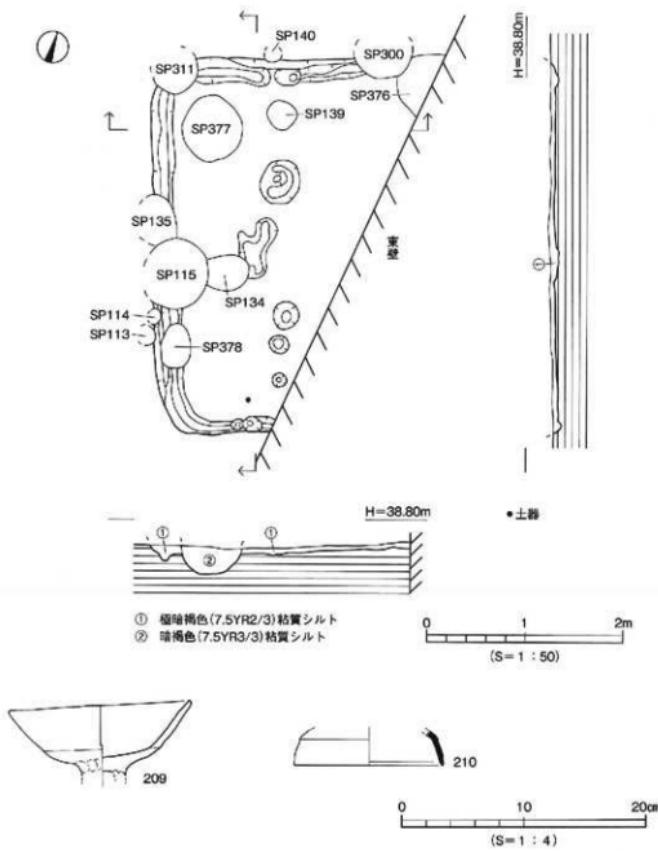
第42図 S B 9測量図



第43図 S B 9埋土下位出土遺物実測図



第44図 S B 9埋土上位出土遺物実測図



第45図 SB7測量図・出土遺物実測図

## (2) 挖立柱建物

椎味四反地遺跡ではこれまでの調査において、椎味四反地遺跡6次調査（平成10年度：1号大型建物と呼称）、同8次調査（平成15年度：2号大型建物と呼称）で、それぞれ大型建物が発見されている。今回検出した大型建物は椎味地区において3例目となるため、3号大型建物と呼称して報告する。調査当初は3号大型建物を構成する36基の柱穴のうち、10基が竪穴住居の床面で検出されたため、竪穴住居に伴う主柱穴と判断して調査をおこなった。各柱穴完掘後、調査終了時点で柱穴が並ぶことがわかり、これらの柱穴も大型建物の柱穴であることが判明した。その時点において各柱穴は完掘状態であり、土層断面図は作成できていないため、土層堆積状況は不明である。なお、各柱穴は、東西列と南北列のエレベーション図の測量のみをおこなった。大型建物の断面ポイントは、東西列がA～Gライン、南北列はH～Mラインの断面図を掲載する。

### 3号大型建物（第21・46～48図、図版15・16）

調査区南西部A1～C2区に位置する。南北6間（11.06m）、東西5間以上（9.6m）を測る粙柱建物で、建物方位は東北よりやや西に振っている。建物を構成する柱穴の一部はSB2・4（弥生時代後期後半）、SB3（5世紀後半）掘り下げ後の床面にて検出された。SP②・⑦・⑬・⑭・⑮はSD1、SP⑯はSK7、SP⑰はSD4、SP⑱はSD3を切り、建物西側及び南側は調査区外に続く。調査では36基の柱穴を検出した。側柱を構成する柱穴は平面形態は隅丸長方形～楕円形を呈しており、さらに建物東側の側柱は東西に長い長方形を呈し、北側と南側は南北に長い長方形を呈する。規模は径90～120cm、深さ45～55cmを測る。なお、柱穴は建物内側部分がテラス状となっており、柱抜き取りの際の掘り方ではないかと推測される。遺物は14基の柱穴内から弥生土器片、土師器片が出上した。各柱穴内からは、主に壺形土器の胴底部片（タキ調整あり）が数多く出土している。

#### 〔建物を構成する柱穴〕

SP①：建物北西部に位置する側柱で、SB4床面にて検出した。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸140cm、短軸96cm、深さ52cmを測る。断面形態は北側と東側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

SP②：建物北西部に位置する側柱で、SD1を切る。平面形態は不整楕円形を呈し、長径130cm、短径80cm、深さ56cmを測る。断面形態は北側と南側がテラス状になる。遺物は、壺の胴部片や壺の頸部片が出土した。

SP③：建物北東部に位置する側柱である。平面形態は不整形を呈し、長径110cm、短径56cm、深さ64cmを測る。断面形態は北側と南側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

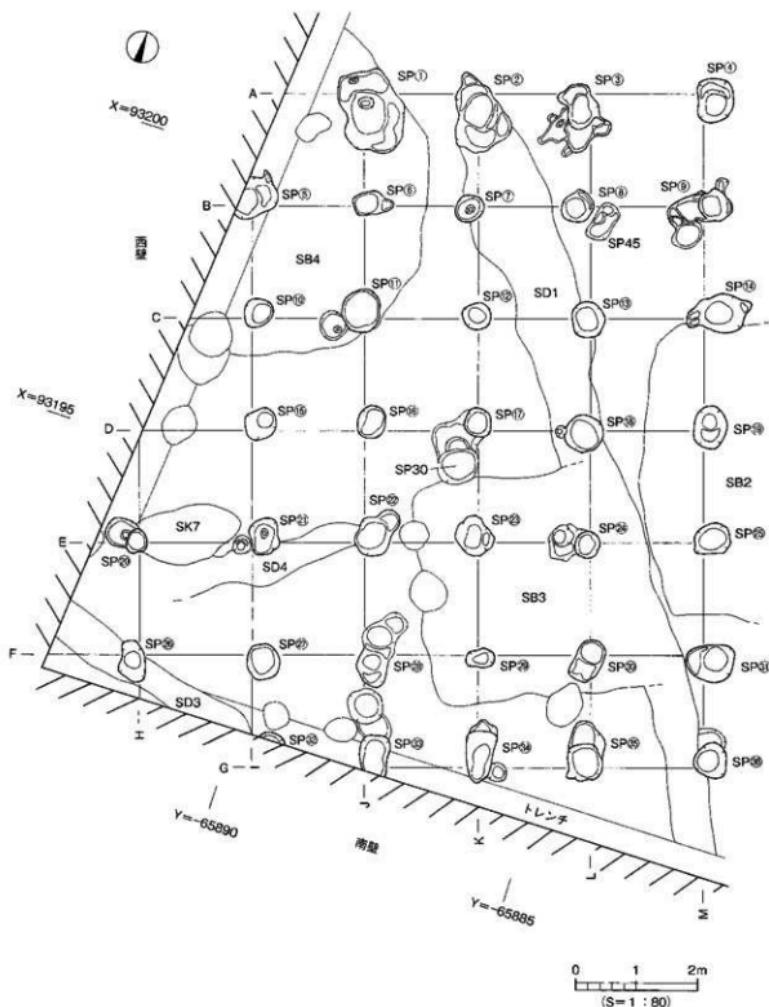
SP④：建物北東隅に位置する側柱である。平面形態は隅丸方形を呈し、長軸70cm、短軸60cm、深さ50cmを測る。断面形態は北側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

SP⑤：建物北西部に位置する東柱で、西側は調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈し、検出長径70cm、短径70cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。断面形態は北東側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

SP⑥：建物北西部に位置する東柱であり、SB4床面にて検出される。平面形態は楕円形を呈し、長径66cm、短径36cm、深さ32cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。断面形態は東側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

SP⑦：建物北西部に位置する東柱で、SD1を切る。平面形態は円形を呈し、径44cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。柱穴内から、遺物の出土はない。

SP⑧：建物北東部に位置する東柱である。平面形態は円形を呈し、径56cm、深さ36cmを測る。柱



第46図 3号大型建物測量図

穴内から、遺物の出土はない。

S P ⑨：建物北東部に位置する側柱である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸100cm、短軸44cm、深さ50cmを測る。南側がテラス状になる。遺物は、壺の胴部片が数点出土した。

S P ⑩：建物中央部西側に位置する束柱で、S B 4床面にて検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径50cm、短径44cm、深さ44cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。柱穴内から、遺物の出土はない。

S P ⑪：建物中央部西側に位置する束柱で、S B 4の床面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径76cm、短径60cm、深さ28cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。遺物は、タタキ痕が施される壺と壺の胴部片が出土した。

S P ⑫：建物中央部に位置する束柱である。平面形態は円形を呈し、径40cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。遺物は、須恵器坏蓋の小片が出土した。

S P ⑬：建物中央部東側に位置する束柱で、S D 1を切る。平面形態は円形を呈し、径60cm、深さ40cmを測る。柱穴内から、遺物の出土はない。

S P ⑭：建物中央部東側に位置する側柱で、S B 2を切る。平面形態は不整楕円形を呈し、長径110cm、短径64cm、深さ44cmを測る。柱穴内から、遺物の出土はない。

S P ⑮：建物中央部西側に位置する束柱である。平面形態は円形を呈し、径50cm、深さ48cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。遺物は、タタキ痕が残る鉢の胴部片が出土した。

S P ⑯：建物中央部西側に位置する束柱である。平面形態は楕円形を呈し、長径60cm、短径40cm、深さ38cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。柱穴内から、遺物の出土はない。

S P ⑰：建物中央部西側に位置する束柱である。平面形態は円形を呈し、径40cm、深さ36cmを測る。断面形態は西側がテラス状になる。遺物は、タタキ痕が残る鉢の胴部片が出土した。

S P ⑱：建物中央部東側に位置する束柱で、S D 1を切る。平面形態は円形を呈し、径56cm、深さ30cmを測る。柱穴内から、遺物の出土はない。

S P ⑲：建物中央部東側に位置する側柱で、S B 2床面にて検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径76cm、短径58cm、深さ28cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。断面形態は南側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

S P ⑳：建物南西部に位置する束柱で、S K 7を切る。平面形態は円形を呈し、径30cm、深さ48cmを測る。断面形態は西側がテラス状になる。遺物は、壺の口縁部と底部が出土した。

S P ㉑：建物南西部に位置する束柱で、S D 4を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径60cm、短径44cm、深さ44cmを測る。柱穴内から、遺物の出土はない。

S P ㉒：建物南西部に位置する束柱で、S D 4を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径60cm、短径50cm、深さ40cmを測る。断面形態は北東側がテラス状になる。遺物は、壺の口縁部片、瓶の把手、須恵器の坏身片が出土した。

S P ㉓：建物南東部に位置する束柱で、S B 3床面にて検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径64cm、短径50cm、深さ30cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルト（②層）である。断面形態は東側がテラス状になる。遺物は、タタキ壺の胴部片が数点出土した。

S P ㉔：建物南東部に位置する束柱で、S B 3床面にて検出した。平面形態は円形を呈し、径40cm、深さ20cmを測る。埋土は2層あり、暗褐色粘質シルト（②層）と黒褐色粘質シルト（③層）である。遺物は、弥生土器の壺の口縁部片、鉢の口縁部片が出土した。

S P ㉕：建物南東部に位置する側柱で、S B 2床面にて検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径

60cm、短径48cm、深さ36cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。柱穴内から、遺物の出土はない。

S P ⑩：建物南西部に位置する東柱で、SD 3を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径64cm、短径40cm、深さ60cmを測る。柱穴内から、遺物の出土はない。

S P ⑪：建物南西部に位置する東柱で、平面形態は円形を呈し、径60cm、深さ36cmを測る。柱穴内から、遺物の出土はない。

S P ⑫：建物南西部に位置する東柱である。平面形態は不整楕円形を呈し、長径80cm、短径50cm、深さ44cmを測る。遺物は、鉢の口縁部片が出土した。

S P ⑬：建物南東部に位置する東柱である。平面形態は楕円形を呈し、長径50cm、短径30cm、深さ32cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルト（②層）である。柱穴内から、遺物の出土はない。

S P ⑭：建物南東部に位置する東柱である。平面形態は楕円形を呈し、長径70cm、短径44cm、深さ24cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルト（②層）である。柱穴内から、遺物の出土はない。

S P ⑮：建物南東部に位置する側柱である。平面形態は楕円形を呈し、長径80cm、短径60cm、深さ58cmを測る。断面形態は西側がテラス状になる。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器の小片が少量出土した。

S P ⑯：建物南西部に位置する側柱で、南側は調査区外に続く。東西長42cm、南北検出長16cm、深さ20cmを測る。埋土は墨褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入するもの（④層）である。柱穴内から、遺物の出土はない。

S P ⑰：建物南西部に位置する側柱で、南側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形を呈し、長軸62cm、短軸48cm、深さ22cmを測る。埋土は褐灰色粘質シルトに、にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入するもの（⑥層）である。遺物は、タタキ痕が施される壺の胴部片が数点出土する。

S P ⑱：建物南東部に位置する側柱である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸100cm、短軸42cm、深さ50cmを測る。埋土は2層あり、黒褐色粘質シルト（①層）と暗褐色粘質シルト（②層）である。断面形態は北側がテラス状になる。遺物は、弥生土器、土師器の小片が出土する。

S P ⑲：建物南東部に位置する側柱である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸96cm、短軸60cm、深さ60cmを測る。断面形態は北側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

S P ⑳：建物南東部に位置する側柱で、SD 1を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径60cm、短径50cm、深さ60cmを測る。断面形態は北側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

#### 出土遺物（第49・50図、図版23）

S P ②（211・212）211・212は弥生土器である。211は壺の胴部片で、タタキ調整を施す。212は壺の頸部片で、貼付凸帯文1条と凸帯上に斜格子文日文を施す。

S P ⑨（213）213は弥生土器壺の胴部小片で、タタキ調整を施す。

S P ⑪（214～216）214～216は弥生土器である。214は壺の胴部小片で、タタキ痕が顕著である。

215は壺の底部片で、平底である。216は壺の剥離部小片である。

S P ⑯（217）217は須恵器壺蓋の口縁部小片である。

S P ⑯（218）218は弥生土器鉢の胴部小片で、タタキ調整を施す。

S P ⑰（219～222）219～222は弥生土器である。219は広口壺の口縁部片、220は壺の胴部小片である。221は鉢の胴部小片で、外面にタタキ調整を施す。222は支脚の受部で、断面は楕円形を呈す。

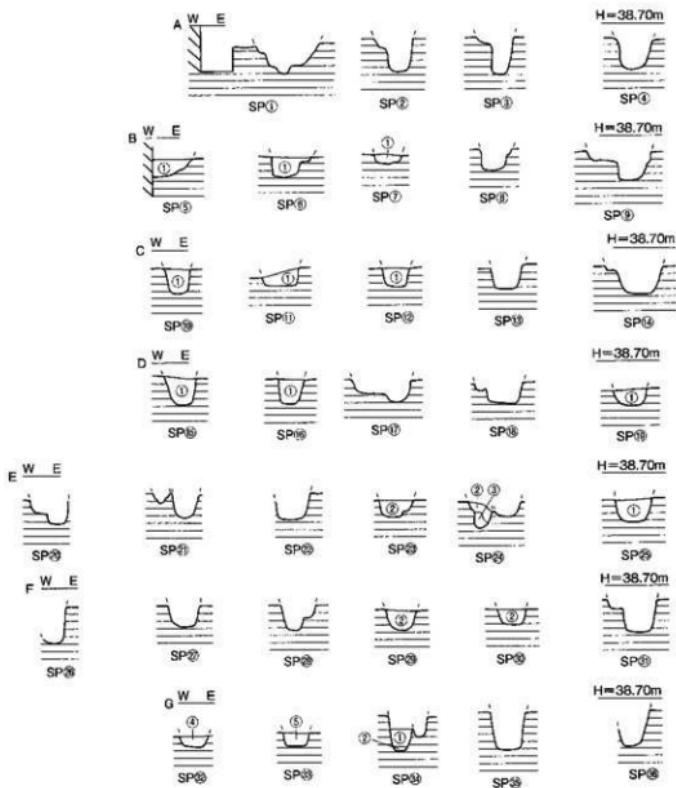
S P ⑲（223・224）223・224は弥生土器である。223は壺の口縁部小片、224は底部片で、タタキ調整を施す。

S P ㉙ (225~227) 225は土師器壺の口縁部小片で、口縁端部は内傾する面をもつ。226は土師器瓶の把手である。227は須恵器坏身の小片である。

S P ㉚ (228・229) 228・229は弥生土器である。228は壺の胴部片で、タタキ調整を施す。229は複合口縁壺の口縁部である。

S P ㉛ (230・231) 230・231は弥生土器である。230は広口壺で口縁端部を下方に拡張し、口縁端面に波状文5条を施す。231は鉢の口縁部小片である。

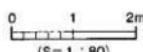
S P ㉜ (232) 232は弥生土器鉢の小片で、口縁部は直立する。



※A~Gは断面図作成ライン

- ① 東褐色(10YR3/1)粘質シルト。
- ② 暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルト。
- ③ 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。

- ④ 東褐色(10YR3/1)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10Y5/3)シルトがブロック状に混入。
- ⑤ 褐灰色(7.5YR4/1)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10Y5/3)シルトがブロック状に混入。



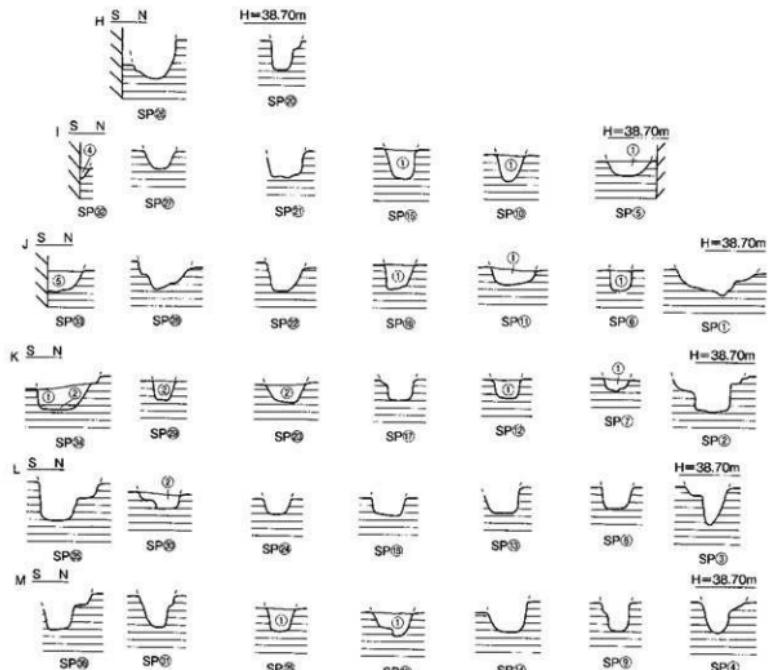
第47図 3号大型建物柱穴断面図(1)

S P ④ (233~235) 233は上部器高部の壊部小片で、234は弥生土器の壺で上げ底の底部である。235は須恵器壺蓋の小片で、稜は明瞭である。

S P ⑤ (236~238) 236・237は弥生土器である。236は壺の胴部小片で、タタキ痕が残る。237は折曲口縁の鉢小片である。238は須恵器壺身の小片である。

S P ⑥ (239~243) 239~242は弥生土器である。239は壺の口縁部、240は壺の肩部小片で、貝殻文を施す。241は突出する鉢の底部片である。242は支脚片で中空となる。243は土器の高部で、柱状部内面に明瞭な稜をもつ。

時期：出土遺物の特徴と遺構の切り合ひ等から、古墳時代初頭とする。

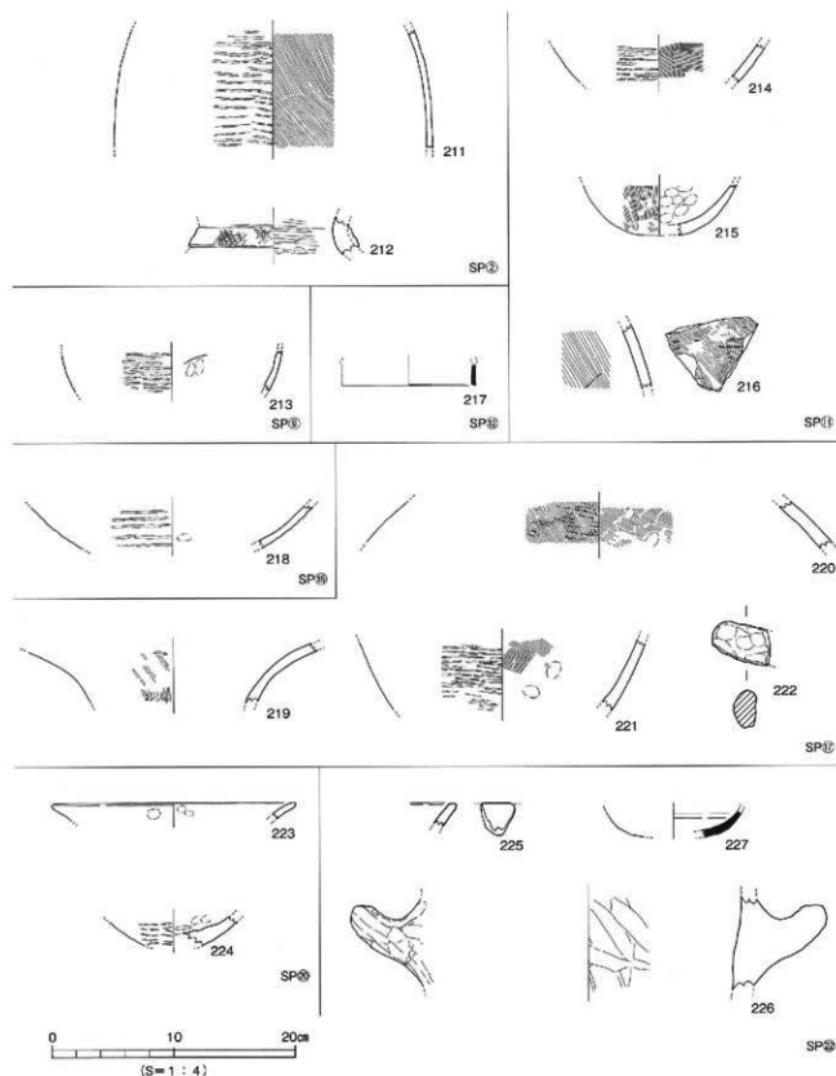


\*H~Mは断面図作成ライン

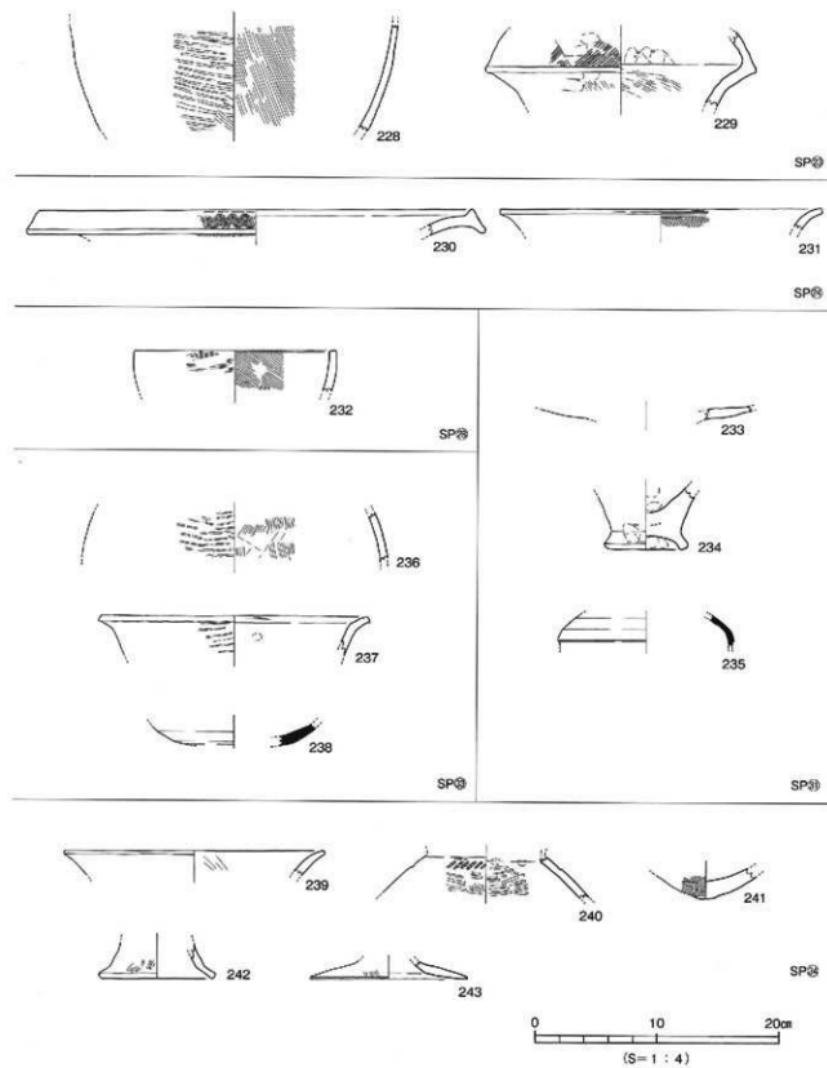
- ① 黒褐色(10YR3/1)粘質シルト。
- ② 暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルト。
- ③ 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。

- ④ 黒褐色(10YR3/1)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10Y5/3)シルトがブロック状に混入。
- ⑤ 暗灰色(7.5YR4/1)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10Y5/3)シルトがブロック状に混入。

第48図 3号大型建物柱穴断面図(2)



第49図 3号大型建物出土遺物実測図(1)



第50図 3号大型建物出土遺物実測図(2)

**掘立1（第21・51図）**

調査区中央部西側B・C4～B6区に位置する。2間×4間の南北棟で、3基の建物柱穴（S P⑩～⑫）はSB8を切り、SP②はSP160に切られる。建物方位は真北より19°西へ振っている。規模は桁行長3.70m、梁行長6.40mを測る。各柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径60～90cm、深さ10～20cmを測る。柱穴掘り方埋土は暗褐色粘質シルト（①層）である。柱痕はSP⑥で検出され、柱痕径は15cmを測る。柱痕埋土は黒褐色粘質シルト（②層）である。遺物は柱穴掘り方内から、弥生土器片や土師器片が少量出土した。

**出土遺物（第51図）**

244は弥生土器である。広口壺の口縁部で、口縁端部を上方に拡張し口縁端面に凹線文3条を施す。245・246は土師器である。245は小型壺で、内外面共にナデ調整を施す。246は高壺の坏部で、口縁部はわずかに外反する。

時期：出土した土師器の特徴と遺構の切り合い等から、古墳時代中期後半以降とする。

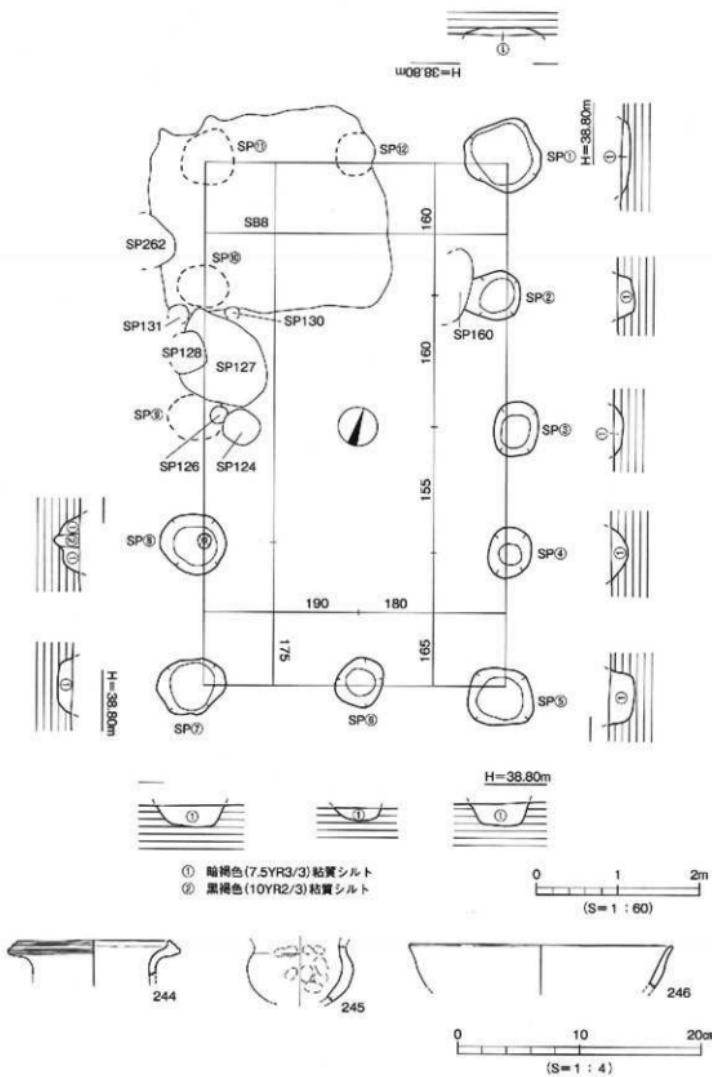
**（3）溝****S D 2（第21・52図、図版16・17）**

調査区中央部、A5～D7区に位置する北東～南西方向の溝である。SD2は、平成10年度に実施した捺味四反地遺跡6次調査検出の溝SD001の延長部分である。

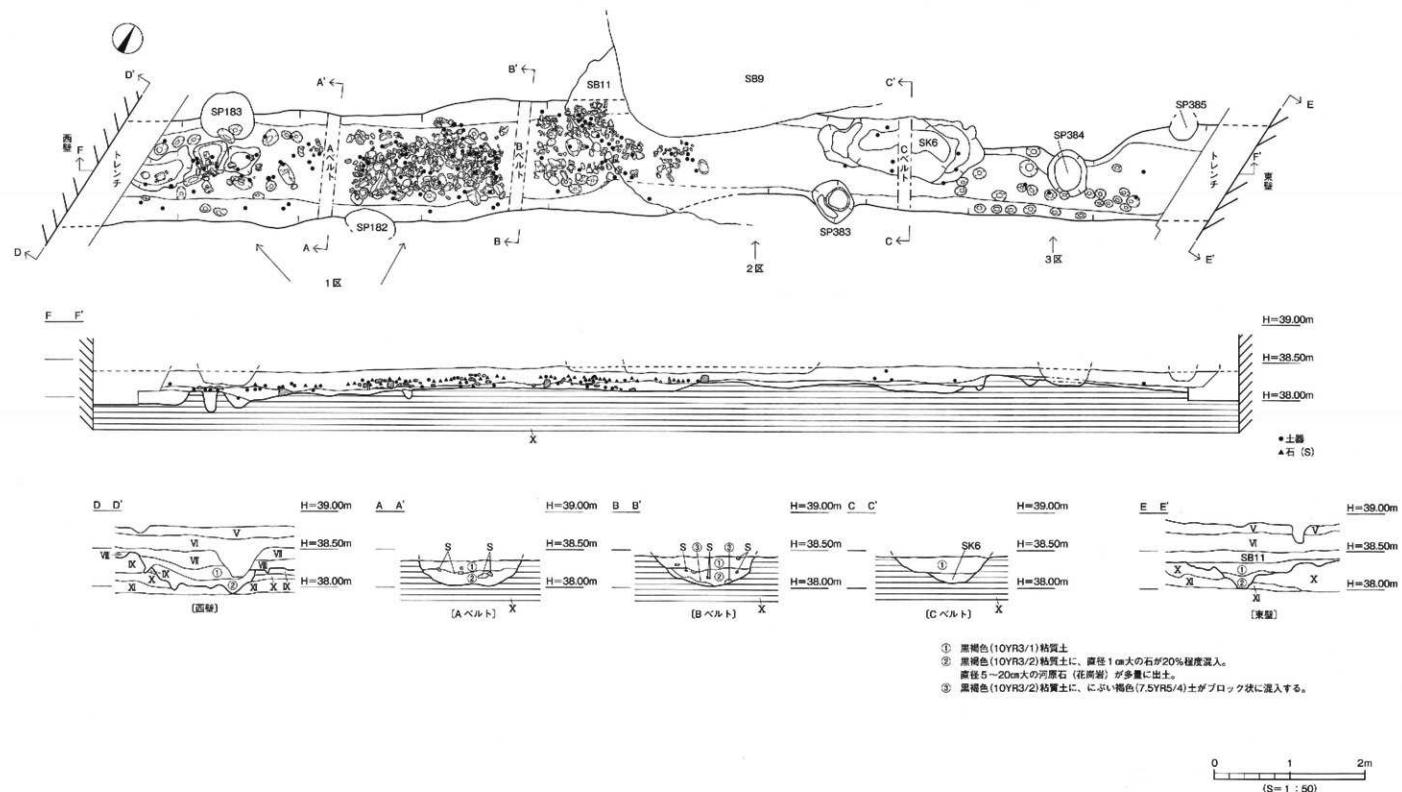
溝中央部はSB9・11、北側はSP183・384・385、南側はSP182・383に切られ、両端は調査区外に続く。溝は第IX層上面で検出し、溝上面は第VII層が覆う。規模は検出長145m、幅0.80～1.50m、深さ20～38cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は3層に分層され、上層は黒褐色粘質土（①層）で、厚さ15～20cm（第VII層上面下）、下層は黒褐色粘質土に直径1cm大の石が混入するもので、下位には直径5～20cm大の河原石が多量に出土した（②層）。厚さ20cmを測る。最下層は黒褐色粘質土に、にぶい褐色土がブロック状に混入するもの（③層）で、厚さ5cmを測る。溝は①層・②層・③層の順で掘り下げをおこない、遺物を取り上げた。溝西側の1区、2区では①層を掘り下げた後、②層上面にて径10～20cm大の河原石（礫層）が出土した。溝東側及び西側底面では径10～50cm大のピット35基を検出した。溝底はほぼ平坦である。遺物は上層、下層、礫層、及び調査時に設定したセクションベルト、トレーンチ内から出土した。すべての地点からは、弥生時代中期後半から古墳時代の土器が混在して出土した。このうち、下層出土品には分銅形土製品が1点含まれる。

**出土遺物****i) 1区下層出土品（第53・54図、図版23）**

弥生土器（247～263・265～276）247～257は壺である。247は折曲口縁で、口縁端部に刻目を施す。248は口縁部下に貼付凸帯文1条と、凸帯上に押印を施す。249は口縁部が「く」の字状を呈し、口縁端部はナデにより凹む。251～253は口縁部が「く」の字状を呈し、口縁端部は丸い。254～256は底部で、254・255は平底、256は上げ底である。外面にタテ方向のヘラミガキ調整を施す。257は長頸で、底部は小さな平底となる。胴部外面にタタキ調整を施す。258～268は壺である。258～261は広口壺の口縁部で、258は口縁端部に刻目、口縁内面に貼付凸帯文1条を施す。大型品。259～261は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文を施す。262は複合口縁壺で、口縁部に波状文4条を施す。263は長頸壺で、頸部にヘラ書き沈線文6条及び貼付凸帯文1条と凸帯上に貝殻文を施す。265～268は底部である。265は平底、266・267はわずかに上げ底である。268は大型壺の底部で、突出する平底である。269～273は鉢である。269・270は口縁部が外反し、271・272は突出する小さな平底である。



第51図 掘立1測量図・出土遺物実測図



第52図 SD 2測量図

274・275は高坏である。274は口縁部に凹線文を施し、凹線文下に刻目を施す。275は脚部で、坏部と脚部の接合法は差込技法である。277は分銅形上製品で、眉毛と目の表現がある。裏面から径0.3cmの孔を穿つ。

土器（264・276）264は小形壺で、口縁部は直立し頸部内面に稜をもつ。276は器台である。

石器（278）278は緑色片岩製の石窓丁の未製品である。

#### ii) 2区下層出土品（第55図、図版24）

弥生土器（279～297）279～286は壺である。279は口縁端面に凹線文1条と刻目、頸部に押圧凸帯文1条を施す。280は胴部外面に刺突文を施す。281～286は底部である。281・282は平底で、外面にタテ方向へのラミガキ調整を施す。283・284は上げ底である。285・286は平底で、外面にタタキ調整を施す。287～293は壺である。287は広口壺で、口縁部は外反し口縁端部を上下方に拡張後、口縁端面に凹線文3条を施す。288は長頸壺の口縁部で、わずかに外反する。289は底部が欠損するほぼ完形品の小壺の壺で、口縁部が外反し口縁端部は先細りする。290は大型壺の肩部で、外面に刺突文を施す。291は頸部に刻目凸帯文1条を施す。292は胴部片、293は大型壺の底部で平底となる。底部外面にタタキ調整を施す。294・295は鉢である。294は口縁部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文2条を施す。頸部に刺突文を施す。295は底部で、小さな平底である。底部外面にタタキ調整を施す。296は高坏の脚部で、脚部内面にシボリ痕を残す。297は器台の脚部で、裾部外面に凹線文5条以上を施す。

石器（298）298は、ほぼ完形品の砥石である。

#### iii) 1区上層出土品（第56図、図版24）

弥生土器（299～324）299～305は壺で、299は口縁部が「く」の字状を呈し、口縁端部は「コ」字状となる。300は口縁部が直立し、口縁端部は面をもつ。301は頸部内面に明瞭な稜をもつ。302は胴部片、303・304は底部片である。304は平底で、底部外面にヘラミガキ調整を施す。305は上げ底の底部である。306～316は壺である。306・307は広口壺で、306は口縁部が外反し、口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文4条を施す。307は小型品で口縁部が外反し、口縁端部を上下方に拡張し、口縁端部に凹線文3条を施す。308は広口壺で、口縁部は下方に垂下し、口縁端面にヘラ描き斜線文を施す。309は複合口縁壺で、口縁拡張部外面に刻目を施す。311・312は鉢である。311は口縁部が外反し、口縁端部は先細りする。頸部外面に不明瞭な稜をもつ。312は口縁部が直立し、口縁端部は丸い。頸部外面に明瞭な稜をもつ。313は頸部に貼付凸帯文1条と刻目を施す。314・315は平底の底部である。314は底部内外面共にヘラミガキ調整を施す。316は口縁外面に凹線文5条以上と、口縁端面に2条を施す。317～320は高坏である。317は裾部外面に凹線文3条と裾端面に凹線文1条を施す。柱部下位に矢羽根透かし（末貫通）1ヶ所を看守する。318は坏部下位に稜をもつ。319は脚部片で、柱部内面にシボリ痕を看守する。320は裾部小片で、赤色顔料が付着する。321～323は支脚である。321は受部片で、322・323は中空となる。323は外面にタタキ調整を施す。324は器種不明品で、円形浮文上に押圧竹管文を施す。

#### iv) 2区上層出土品（第57図、図版24）

弥生土器（325～396）325～328は壺である。325は小型品で、口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文1条を施す。326は口縁部が「く」の字状口縁を呈し、口縁端部は丸い。327は「く」の字状口縁を呈し、口縁端部は先細りする。328は胴部片である。329～334は壺である。329・330は広口壺の大型品である。329は口縁部が外反し、口縁端面に凹線文3条と頸部に刻目凸帯文1条を施す。330は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上下方に拡張後、口縁端面に凹線文3条を施す。331は頸部に

刻目凸帯文1条を施す。332～334は平底の底部である。332は底部外面にヘラミガキ調整を施す。335・336は支脚である。335は角状に伸びる受部で、断面楕円形である。336は受部片である。

須恵器(337)337は高坏で、柱裾部に凹線状の門み2条と、脚部に長方形形状の透かし3ヶ所を施す。

#### v) 3区上層出土品（第57図）

弥生土器（338～346）338・339は壺である。338は折曲口縁で、口縁端部に刻目と胴部上位にヘラ描き沈線文3条以上を施す。339は口縁部が外反し、口縁端部は「コ」の字状である。内面に初圧痕が残る。340～343は壺である。341は広口壺で、口縁部は外反し、口縁端部は平坦である。340・342・343は底部で、342はわずかに上げ底、343は平底である。343は底部外面にヘラミガキ調整を施す。344・345は高坏の脚部である。344は柱部に沈線文8条以上を施し、脚部に矢羽根透かし1ヶ所を看取する。345は裾部に凹線文4条を施す。346は器台もしくは壺の口縁部片で、口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文3条以上を施す。

#### vi) 磨層出土品（第58図、図版24）

弥生土器（347～360）347～352は壺である。347～349は広口壺で、347は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文3条を施す。348は口縁端面が平坦で、349は口縁端部が丸い。350・351は複合口縁壺で、350は沈線文5条と波状文5条を施す。351は頭部に貼付凸帯文1条と凸帯上に斜格子文を施す。352は頭部に貼付凸帯文1条と凸帯上に刻目を施す。353～355は壺である。353は胴部外面にタタキ調整を施す。354は上げ底、355は平底である。356・357は壺の底部平底となる。358は鉢の底部である。359は高坏で柱部にヘラ描き沈線文8条と刻目、柱部に矢羽根透かしを施す。吉備地方からの搬入品。360は支脚で、中空となる。

#### vii) ベルト出土品（第58図）

弥生土器（361～367）361は広口壺で、口縁部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文3条を施す。362は複合口縁壺で、貝殻施文による刻目を看取する。363は無頭壺で、沈線文3条と刻目を施す。364は胴部上位に櫛焼きによる波状文と沈線文を施す。365は大型鉢で、口縁部は外反する。366はわずかに突出する鉢の底部である。367は高坏で、口縁部外面に凹線文2条と竹管文を施す。

#### viii) ドレンチ出土品（第58図、図版24）

弥生土器（368～372）368・369は広口壺で、口縁部は外反する。368は口縁部内面に竹管文2列を施す。369は貼付凸帯文1条に布目押圧を施す。370は肩部片で外面に貝殻文を施す。371・372は高坏で、371は柱部内面にシボリ痕を残す。372は裾部に凹線文4条を施し、径0.7cm大の円孔を3ヶ所看取する。搬入品。形態は吉備地方のものに類似する。

時期：出土遺物や切り合いから、SD2は弥生時代末から古墳時代前期前半とする。

#### SD5（第21図）

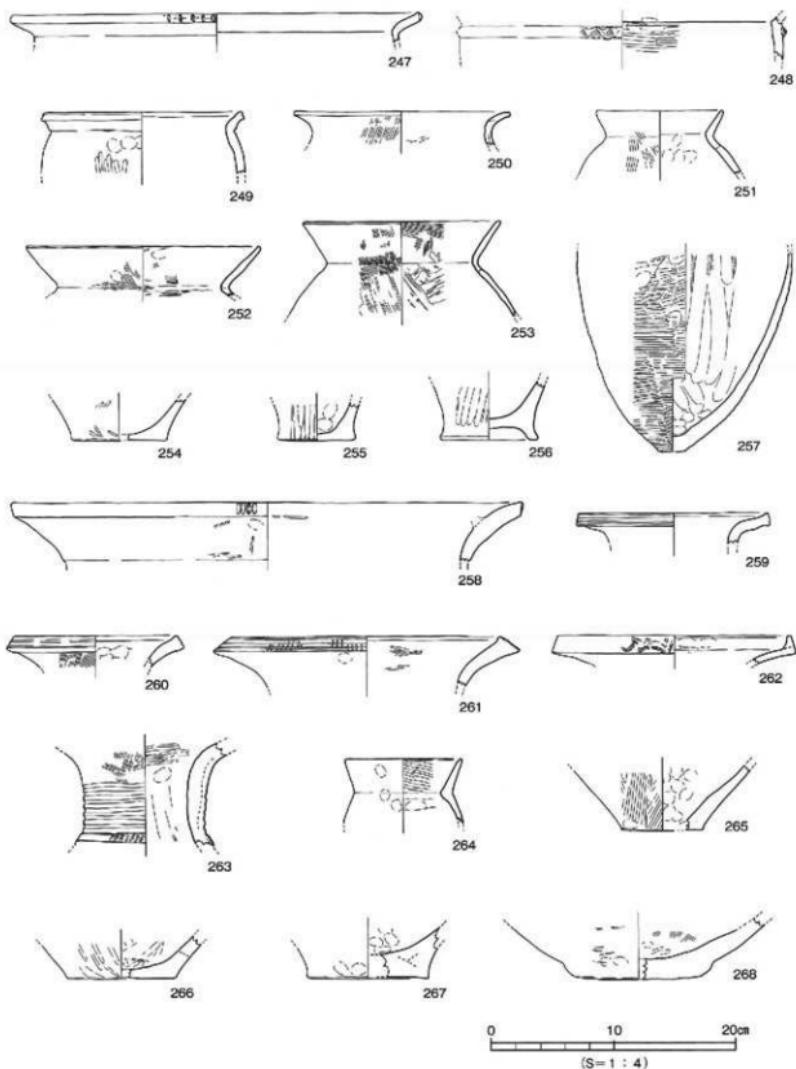
調査区北東部C・D9区に位置する、北東-南西方向の溝である。溝中央部をSK2、溝の一部は柱穴に切られ、両端は消失する。溝の規模は検出長4.54m、幅1.52m、深さ30cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。溝底は北東から南西へ傾斜する（比高差18cm）。遺物は埋土中より須恵器片、土師器片が少量出土した。

#### 出土遺物（第59図）

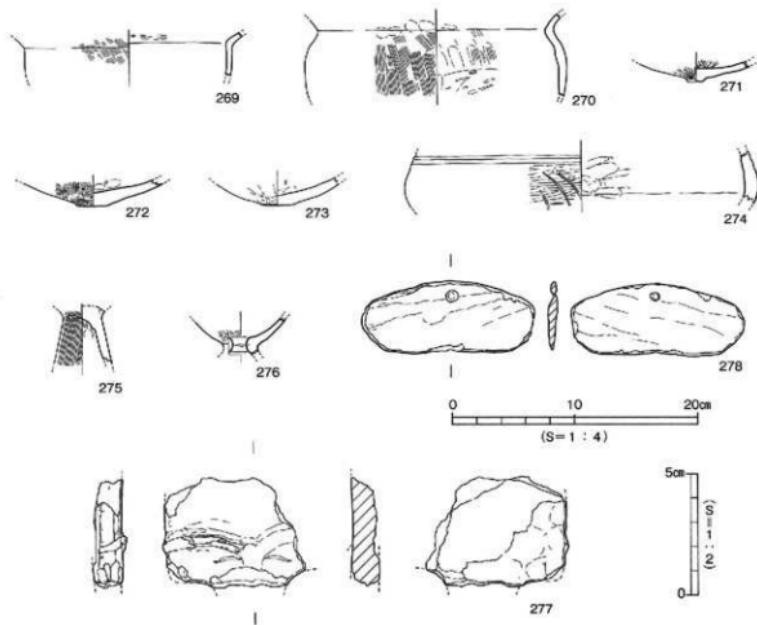
須恵器（373）373は壺蓋片で、口縁端部は内傾する。

土師器（374・375）374は壺の口縁部片で、口縁端部は内傾する面をもつ。375は高坏で、裾部内面に明瞭な稜をもつ。

時期：出土遺物の特徴や切り合いから、古墳時代中期後半とする。



第53図 SD 2 1区下層出土遺物実測図(1)



第54図 SD 2 1区下層出土遺物実測図(2)

## (4) 土 坑

## SK 9 (第21・60図)

調査区中央部西側A・B 4区に位置し、土坑西側は調査区外に続く。平面形態は隅丸長方形を呈るものと考えられ、規模は東西検出長2.23m、南北長0.94m、深さ28cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。遺物は埋土中より、土師器片、須恵器片が少量出土した。

## 出土遺物 (第60図)

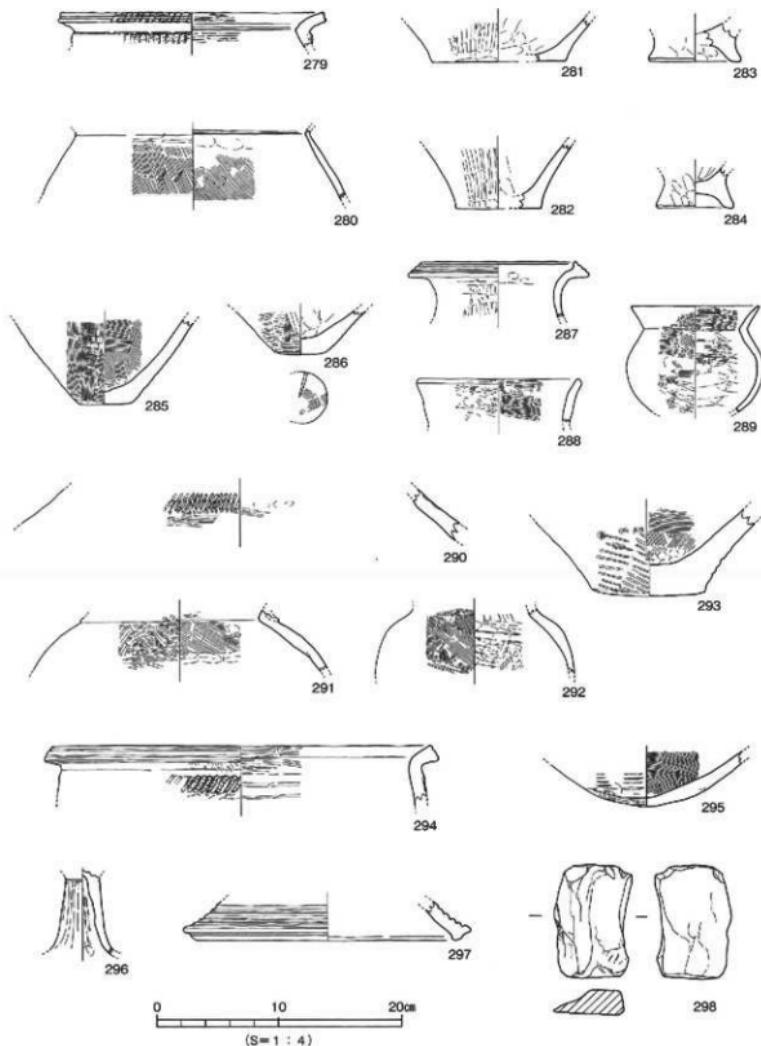
376は土師器碗で、口縁端部はわずかに内湾する。377は須恵器坏身で底部は丸く、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。

時期：出土遺物の特徴から、古墳時代中期後半とする。

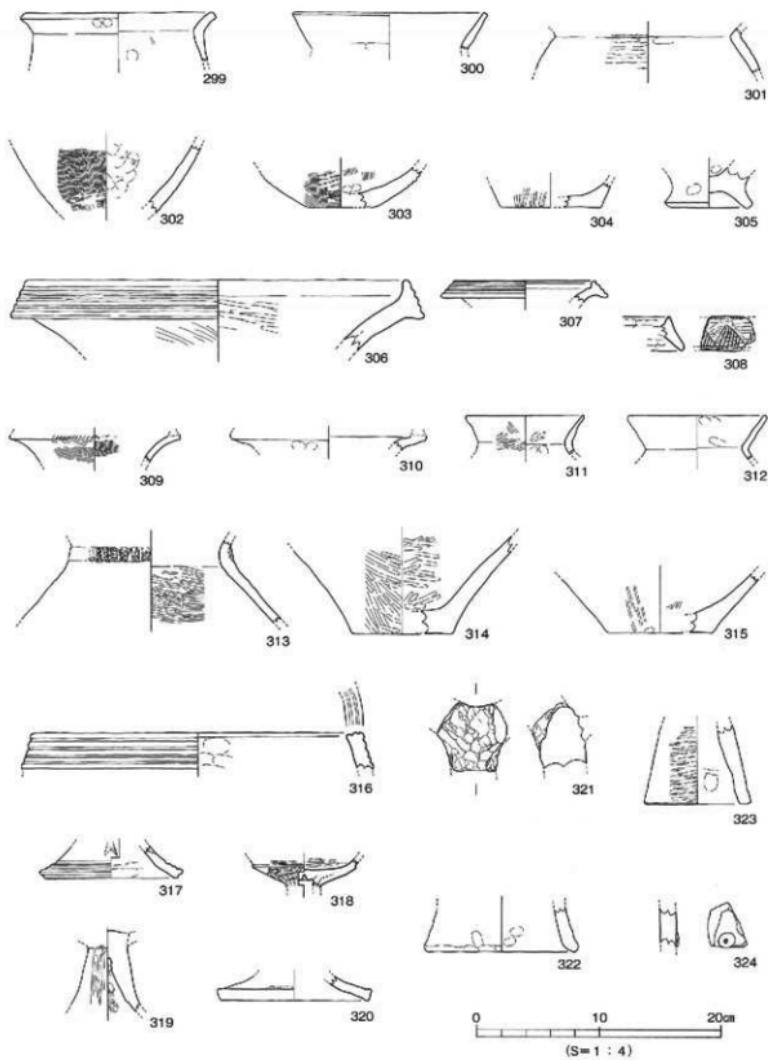
## SK 2 (第21・61図)

調査区北東部C・D 9区に位置し、SD 5を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.05m、短径0.74m、深さ8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色粘質シルトである。土坑内から遺物の出土はない。

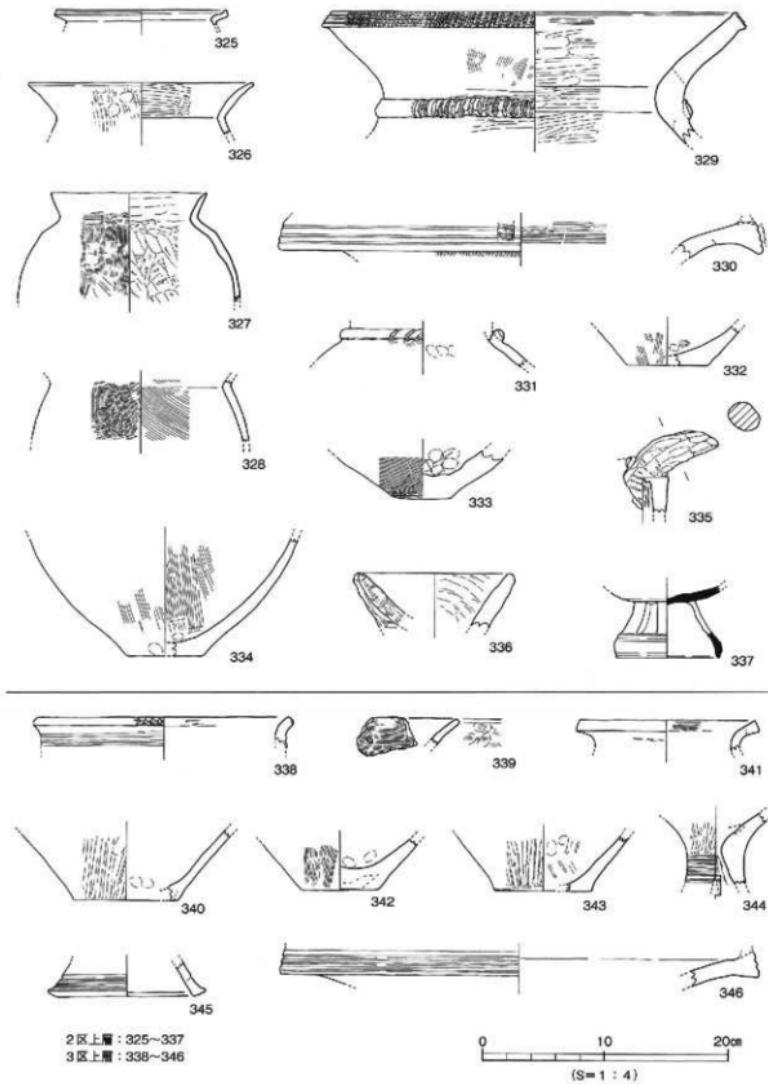
時期：出土遺物がなく時期特定はしかねるが、SD 5との切り合いから、概ね古墳時代中期後半以降とする。



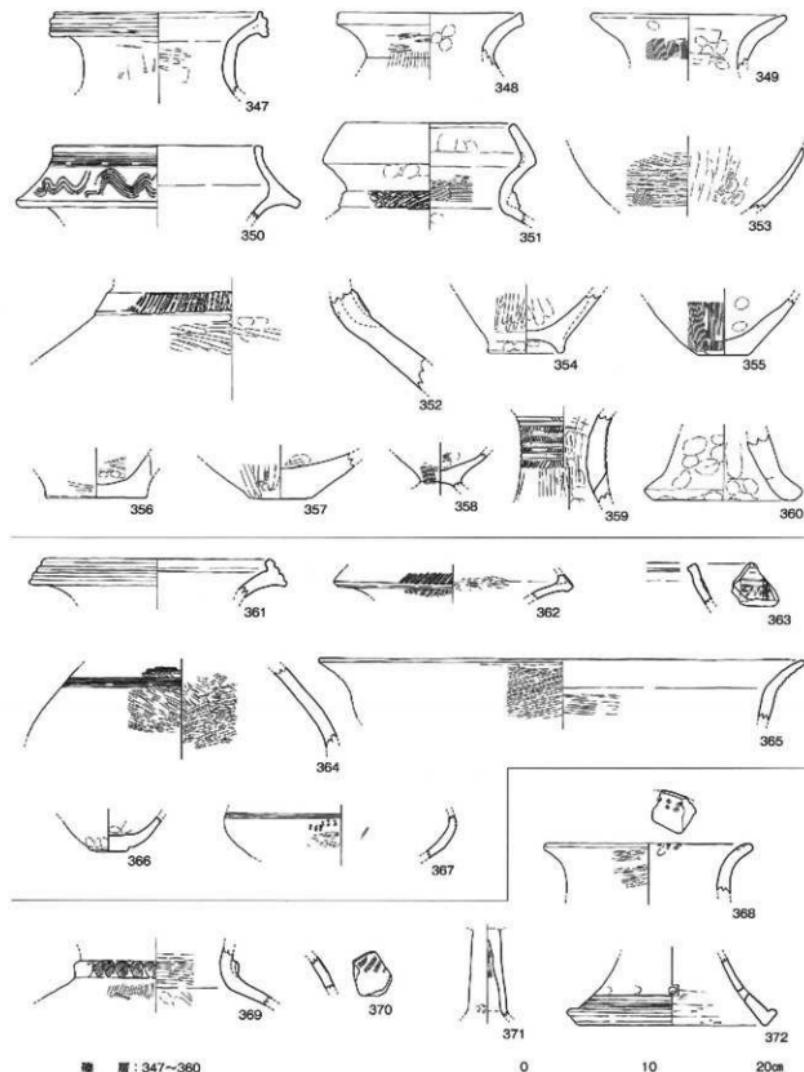
第55図 SD 2-2区下層出土遺物実測図



第56図 SD 2 1区上層出土遺物実測図



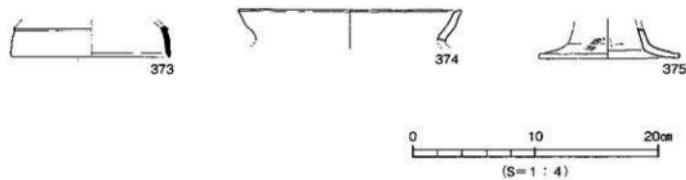
第57図 S D 2 2区上層・3区上層出土遺物実測図



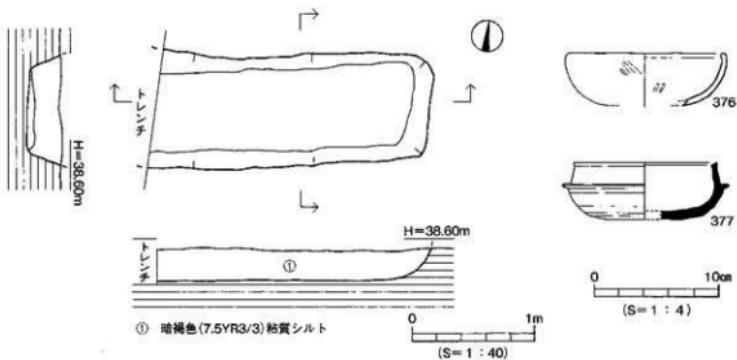
縄 層: 347~360  
ベルト: 361~367  
トレンチ: 368~372

0 10 20cm  
(S=1:4)

第56図 SD 2 縄層・ベルト・トレンチ出土遺物実測図



第59図 S D 5出土遺物実測図



第60図 SK 9測量図・出土遺物実測図

## SK 8 (第21・61図)

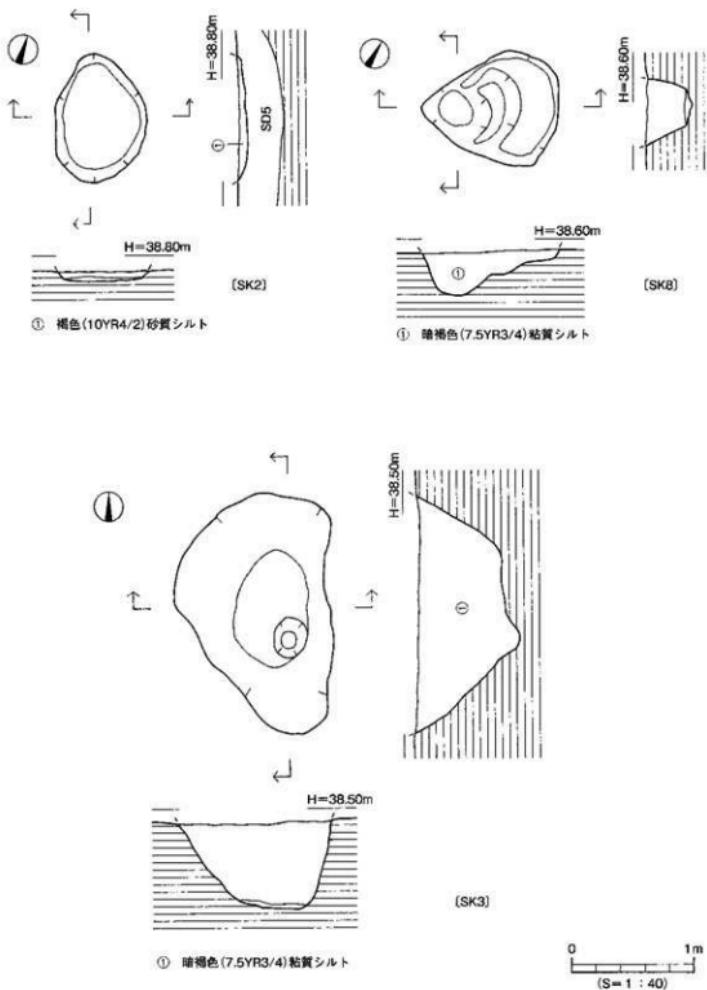
調査区北部B・C 9区に位置する。平面形態は不整形を呈し、規模は東西長1.11m、南北長0.95m、深さ34cmを測る。断面形態は船底状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。土坑内から遺物の出土はない。

時期：埋土がSK 9と酷似することから、概ね古墳時代中期後半頃の遺構とする。

## SK 3 (第21・61図)

調査区北西部B 8・9区に位置する。平面形態は不整形を呈し、規模は東西長1.24m、南北長1.95m、深さ72cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。土坑内から遺物の出土はない。

時期：埋土がSK 9と酷似することから、概ね古墳時代中期後半頃の遺構とする。



第61図 SK2・3・8測量図

## 5. その他の遺構と遺物

### (1) 時期判断が困難な遺構

#### S D 6 (第21図)

調査区北西部 A 8 ~ B 9 区に位置し、溝東側は柱穴に切られ、両端は消失する。溝の規模は検出長 7.50m、検出幅1.80m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は極暗褐色粘質シルトである。溝底は南から北へ緩傾斜する（比高差 4 cm）。溝内から遺物の出土はない。

### (2) 柱 穴

調査で検出された柱穴は276基である。埋土の違いにより、少なくとも3分類（A・B・C類）される。柱穴の平面形は円形もしくは椭円形を呈し、柱穴径は最小20cm、最大80cmを測る。A類は調査区全域に分布がみられ、B類及びC類は散在する。

A類 埋土が黒褐色粘質シルトであるもの ..... 245基

B類 埋土が灰褐色粘質シルトであるもの ..... 25基

C類 埋土が黒色土であるもの ..... 6基

なお、圓化しうる遺物が出土した柱穴は、以下のとおりである。

A類 : S P 266・199・333・161・83・57・67・276・186・30・120・144・84・25・52・145

B類 : S P 149

C類 : S P 96

遺物は掘り方埋土中から出土したもので、大半が小片であるが、ここでは実測可能な遺物を掲載する。

#### 出土遺物 (第62図、図版24)

土師器 (378~384・398) 378は壺で口縁部は外反し、頸部内面に不明瞭な稜をもつ。379は鉢で、口縁部は短く直立する。380~384は椀である。380~382は口縁部が内湾し立ち上がる。380は底部に葉脈痕を看取する。384は口縁端部が内傾する面をもつ。398は製塙土器で、2次焼成痕を看取する。

須恵器 (385~393) 385は壺蓋で、稜は明瞭である。386は壺身で、底部は丸く、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。387~390は高杯である。387は脚端部を下方に屈曲し、柱部中位に円孔を3ヶ所穿つ。388はたちあがり端部が内傾する凹面をなす。柱部中位に円孔を穿つ。389は長方形状の透かしを2ヶ所看取する。390は低脚で、円孔を2ヶ所施す。391は椀で、胸部中位に凸線1条、下位に波状文を施す。392は広口壺で、口縁端部は三角形状に肥厚する。393は器台の壺部で、凸線4条と凸線間に波状文を施す。

弥生土器(394~397) 394は壺で、貼付凸帯文1条と凸带上に指頭押圧を施す。395は壺の大型品で、ヘラ描き沈線文1条を施す。396は壺の底部でわずかに上げ底を呈し、2次焼成痕を看取する。397は直口口縁の鉢である。

石器 (399) 399は緑色片岩製の石臼である。

鉄器 (400・401) 400は鉄鎌で、長さ4.2cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重さ42gを測る。401は鉄笄で、重さ29.2gを測る。

### (3) 包含層出土遺物

#### 第VI層出土遺物（第63図、図版25）

土師器（402～405・427）402は壺の口縁部で、口縁端部は内傾する面をもつ。403～405は壺である。405は把手で、断面楕円形を呈する。427は厚みのある壺の底部であり、内外面共に赤色顔料が付着する。

須恵器（406～415）406は鉢で、口縁部は外反する。407～409は壺蓋である。大井部が扁平で、口縁端部は内傾する凹面をなす。後は明瞭である。410は壺身で、たちあがりは短く内傾する。底部外面にヘラ切り痕が残る。411は有蓋高壺の蓋で、つまみ中央部は凹み、口縁端部は内傾する。412・413は高壺である。412は無蓋高壺で、胴部中位に凸線1条と下位に波状文を施す。413は低脚の脚部で、脚部中位に円孔を施す。414は壺で、円孔1ヶ所を看取する。415は器台で、凸線2条と波状文を施す。

弥生土器（416～426）416は壺で、口縁部は内湾し、口縁端部をわずかに肥厚する。417～424は壺である。417・420・421は広口壺で、417は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文3条を施す。420・421は口縁端面に波状文を施す。418・419は複合口縁壺で、418は頸部に貼付凸帯文と凸帯上に斜格子日文を施す。419は波状文と斜格子日文を施す。422は大型壺で、口縁部内面に貼付凸帯文を施す。423はヘラ描き沈線文と貝殻文を施す。424は短頸壺で、口縁部は短く外反する。425は高壺の脚部で、内外面にヘラミガキ調整を施す。426は壺の底部で平底となる。

#### 第IV層出土遺物（第64図）

土師器（428・429）428は羽釜で、断面形態が長方形状を呈する鉢が付く。429は壺で、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。

須恵器（430～432）430は壺で、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。431は壺の底部である。432は横瓶で、外面に格子叩きを施す。

### (4) 地点不明出土遺物（第64・65図・図版25）

弥生土器（433～436）433は壺の胴部で、胴部上位にヘラ描き沈線文4条を施す。434・435は壺である。434は口縁部を下方に垂下し、口縁端面に波状文5条を施す。435は大型壺で、胴部上位にヘラ描き沈線文1条を施す。436は支脚で、タタキ痕が顯著である。

土師器（437～439）437は壺で、底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。438は椀で、口縁部は内湾して立ち上がる。439は土釜で、口縁部下に断面形態が三角形状を呈する鉢が付く。

陶磁器（440）440は碗で、断面三角形状の高台が付く。

須恵器（441～445）441は壺蓋で大井部は丸味を帯び、口縁端部は丸い。442・443は壺身である。442は底部が丸く、たちあがり端部は内傾する凹面をもつ。443はたちあがりが短く内傾する。444は器台で、横描き波状文10～12条を施す。非陶色系。445は広口壺で、口縁端部を三角形状に肥厚し、口縁端部下に凸線1条と波状文7条を施す。

石器（446～448）446は滑石製の筋錘車である。447は緑色片岩製の石斧である。完形品。448はサスカイト製の打製石器である。

鉄器（449～451）449は鉄鎌で残存1/2である。450・451は鉄滓で、重さ44.6～48.0gを測る。

## 6. 小 結

今回の調査では、弥生時代から古墳時代までの遺構と弥生時代から中世までの遺物を確認することができた。

### (1) 弥生時代

前期：前期前半では方形土坑SK1、前期後半では楕円形土坑SK4をそれぞれ検出した。これまで前期の遺構は検出例が少ないものの、これら土坑の検出は調査地周辺において前期集落が存在する可能性を示す資料となる。

中期：遺構は未検出であるが、古墳時代前期前半のSD2、古墳時代中期後半SB6・8・11や古墳時代後期前半のSB9、掘立1から弥生時代中期後半の遺物が出土している。

後期：後期後半では円形住居SB4と隅丸方形住居SB2を検出した。松山平野において、該期の堅穴住居は平面形態が方形と円形とがあることから、これまでの調査結果を追認する結果となった。

### (2) 古墳時代

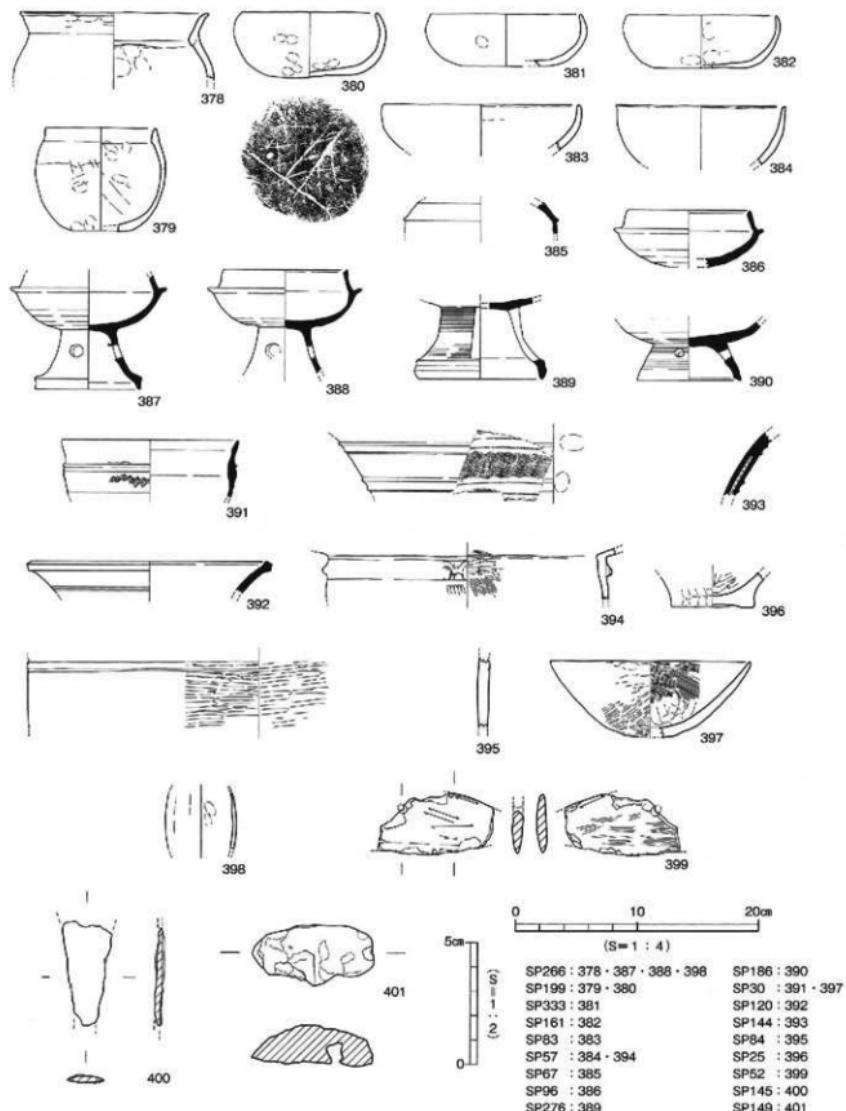
前期：前期では大型建物を検出した。これまでの調査において、大型建物2棟が検出されている。櫛味四反地遺跡6次調査において平成10年度には1号大壇建物、同8次調査において平成15年度には2号大型建物がそれぞれ検出され、今回検出した大型建物（3号大型建物と呼称）は櫛味地区において3例目となる。3号大型建物は6間×5間以上を測る縦柱構造を呈し、床面積100m<sup>2</sup>前後を測る。建物を構成する各柱穴は側柱が長軸60～140cm、短軸50～100cm、深さ64cmを測る隅丸長方形及び楕円形を呈し、一方、東柱は長径45～70cm、短径40～70cm、深さ20～60cmを測る円形及び楕円形を呈している。柱穴内からは弥生時代中期後半から古墳時代前期の遺物が出土している。このほか、溝SD2を検出した。これは調査地に隣接する櫛味四反地遺跡6次調査（平成10年度）で検出した溝SD001の延長部である。長さ14.5m、幅0.80～1.50m、深さ20～38cmを測る北東～南西方向の溝で出土遺物より、大型建物と併存していた可能性が非常に高い遺構である。溝内からは弥生時代中期後半から古墳時代前期の土器が混在して出土した。櫛味地区では堅穴住居廃絶時に埋め戻し行為をおこなっている事例が多数確認されている。今回の溝SD2も土層の堆積や遺物出土状況などから、人為的に埋め戻しがおこなわれたものと考えられる。

中期：7棟の堅穴住居を検出した。中期前半ではSB10、中期後半ではSB1・3・5・6・8・11を検出した。平面形態は方形～隅丸方形を呈し、規模は3～4mを測るもののが中心となる。またSB10・11内からは白玉が出土した。これまでの調査でも住居内からガラス小片や白玉が出土する例が多数あり、住居廃絶時の祭祀行為と考えられている。

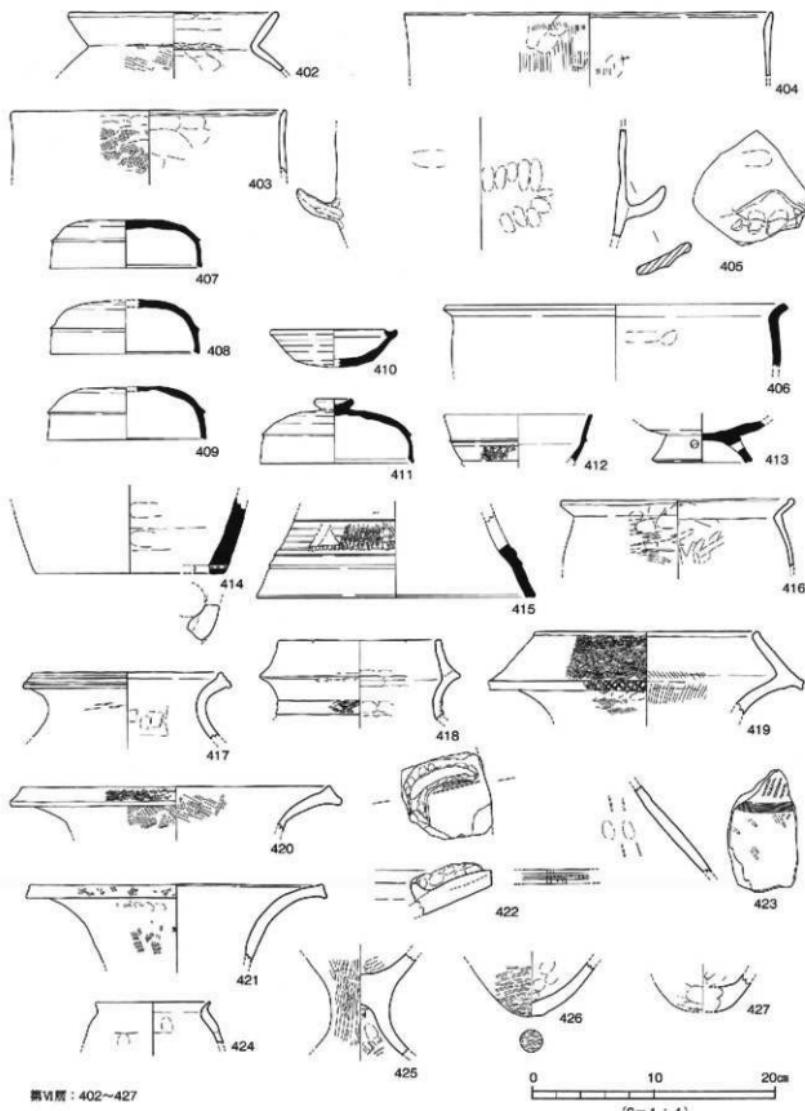
後期：後期前半ではSB7・9の2棟を検出した。このうち、SB9は一辺が8mを超える大型住居である。SB9からは、土師器、須恵器の他に、滑石製の有孔円板や白玉が出土している。

### (3) 古代～中世

古代や中世の遺構は未検出であるが、第IV層中から飛鳥時代から室町時代までの遺物が出土した。古代では7世紀中頃の須恵器坏（410）や平安時代の土師器坏（429・439）が出土した。中世では13世紀の土師器の羽釜（428）や土釜（439）のほか、陶磁器（440）が出土した。そのほか地点不明ではあるが須恵器の器台（444）と滑石製の結鉢車（446）が出土した。

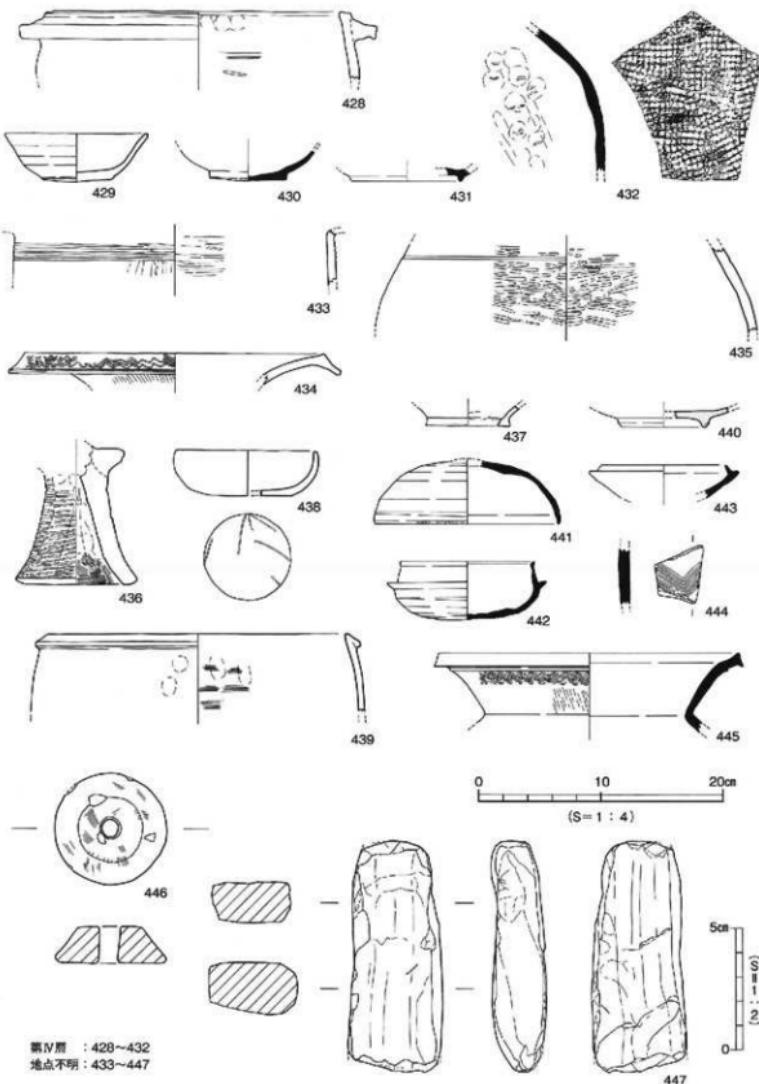


第62図 柱穴出土遺物実測図

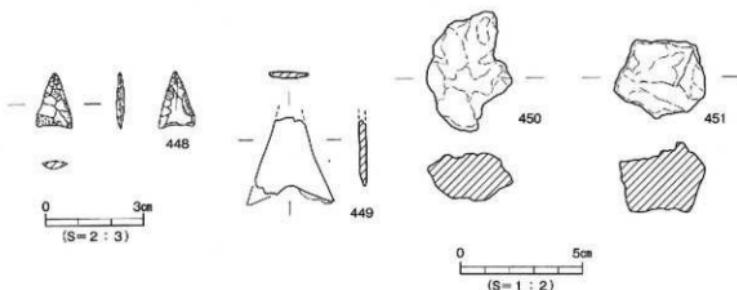


第VI層：402～427

第63図 包含層出土遺物実測図(1)



第64図 包含層(2)・地点不明(1)出土遺物実測図



第65図 地点不明出土遺物実測図(2)

## 遺構・遺物一覧 - 凡例 -

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、口端→口縁端部、天→天井部、頭→頭部、胴→胴部、  
体→体部、脚→脚部、底→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、銀→銀ウンモ、密→精製土、  
角→角閃石。

( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表18 穴穴住居一覧

窓穴 (SB)	時期	平面形	規 模 (m) 長さ(奥行)×幅(建幅)×深さ	埋 土	床面積 (m <sup>2</sup> )	内部施設				周壁溝	備 考
						主柱穴 (本)	高床	土坑	炉	カマト	
1	古墳時代 中期後半	隅丸 方形	(3.74+a)×(2.74+a)×0.18	黒褐色粘質シルト	(10.25)	—	—	○	—	—	SD1を切る。
2	弥生時代 後期後半	隅丸 方形	5.10×4.75×0.20	黒褐色粘質シルト	24.23	—	—	—	○	—	3号大型建物に切られる。
3	古墳時代 中期後半	隅丸 方形	3.67×(3.30+a)×0.14	黒褐色粘質シルト	(12.11)	—	—	—	—	—	3号大型建物に切られる。
4	弥生時代 後期後半	凹形	5.70×(3.10+a)×0.10	黒褐色粘質シルト	(14.13)	—	—	—	—	—	3号大型建物に切られる。
5	古墳時代 中期後半	隅丸 方形	3.55×3.35×0.08	黒褐色粘質シルト	11.90	4	—	—	—	—	SP68-73-74-271-277に切られる。
6	古墳時代 中期後半	方形	4.50×(3.00+a)×0.30	暗褐色粘質シルト	(13.50)	—	—	—	—	—	南壁 東壁 周仕切り溝
7	古墳時代 後期後半	隅丸 方形	3.80×(2.80+a)×0.10	黒褐色粘質シルト	(8.00)	—	—	—	—	—	北・西 南壁 S11-3-11-15-125-40-30 S11-35-38-39に切られる。
8	古墳時代 中期後半	隅丸 方形	2.80×2.40×0.35	黒色粘質シルト等	6.72	—	○	—	—	—	掘立1に切られる。
9	古墳時代 後期後半以前	方形	8.20×7.80×0.24	黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色 粘質シルトがアコロク状に少量混入	(64.00)	—	—	—	○	—	構築時
9	古墳時代 後期後半以前	方形	8.60×6.60×0.20	黒褐色粘質シルト	56.70	4	—	○	—	○	北西壁 北東壁 改築時
10	古墳時代 中期前半	隅丸 方形	3.90×3.70×0.08	黒褐色粘質シルト	14.43	—	—	—	○	—	SB2を切る。
11	古墳時代 中期後半	方形	(8.00+a)×(6.40+a)+0.20	暗褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色 粘質シルトが混入	(25.60)	—	—	—	—	—	SB9・SD2を切る。

表19 挖立柱建物一覧

掘立 (間)	方向	柱 行		方位	床面積 (m <sup>2</sup> )	時 期	備 考
		実長(m)	柱間寸法(m)				
1	2×4	南北	3.70	1.90-1.80	6.40	1.60-1.60-1.55-1.65; N-19'-W	23.68 古墳時代中期後半以降 SB8を切る。SP160に切られる。

表20 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	B3-C1	皿状	13.30×1.48×0.25	北西-南東	暗褐色粘質シルト	弥生土器	弥生時代 後期後半	3号大型建物に切られる。
2	A5-D7	レンズ状	14.50×0.80-1.50×0.38	北東-南西	黒褐色粘質シルト等 分離形土器類	弥生土器 弥生上器 火鉢	古墳時代 前期前半	SB9-11に切られる。
3	A-B1	皿状	3.86×0.64×0.09	北西-南東	暗褐色粘質シルト	弥生土器	弥生時代 後期後半	3号大型建物に切られる。
4	A-B1	レンズ状	2.92×0.56×0.13	北東-南西	暗褐色粘質シルト	弥生上器 火鉢	弥生時代 後期後半	3号大型建物に切られる。
5	C-D9	皿状	4.54×1.52×0.30	北東-南西	暗褐色粘質シルト	須恵器 火鉢	古墳時代 中期後半	SK2・SP364-365-366-367-368-369に切られる。
6	A8-B9	皿状	7.50×1.80×0.10	—	模様暗褐色粘質シルト	—	小明	SP255-311-315-331-370-371に切られる。
7	B5-C4	皿状	2.75×0.86×0.10	北西-南東	暗褐色粘質シルト	弥生土器	弥生時代 後期後半	掘立1に切られる。

表21 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規 模 (m) 長さ(基部)×幅(底面)×深さ	床面積 (m <sup>2</sup> )	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	D8-9	廣長方形	逆台形	(21.0+a)×1.68×0.28	3.43	暗褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが混入	弥生土器	弥生時代前期前半	SP21-216を切る。
2	C-D9	格円形	皿状	1.05×0.74×0.08	0.60	褐色粘質シルト	—	古墳時代中期後半	SD5を切る。
3	B8-9	不整形	逆台形	1.95×1.24×0.72	1.56	暗褐色粘質シルト	—	古墳時代中期後半	
4	B6-7	格円形	逆台形	1.15×0.90×0.48	0.96	黑色粘質土	弥生土器	弥生時代前期後半	
5	C7	不整形	船底状	2.21×0.79×0.40	0.96	黒褐色粘質シルト	弥生土器	弥生時代前期後半	SD2を西面で検出。
7	A1	不整形	レンズ形	(1.36-a)×0.92×0.37	1.28	暗褐色粘質土	—	弥生時代後期後半	3号大型建物に切られる。
8	B-C9	不整形	船底状	1.11×0.95×0.34	0.63	暗褐色粘質シルト	—	古墳時代中期後半	
9	A-B4	廣長方形	逆台形	(2.23-a)×0.94×0.28	1.98	暗褐色粘質シルト	土器 漆器	古墳時代中期後半	SP195を切る。

## 遺物観察表

表22 SB 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	国版
				外 面	内 面				
1	甕	口径(19.5) 残高 12.0	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」の字状。	(1)ハケ ハケ(7~10本/cm)	(2)ハケ ハケ(上其痕)	淡青褐色 灰褐色	石・長(1~2)金 ○	黒斑	18
2	甕	口径(13.0) 残高 10.4	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」の字状。	(1)ハケ(9~10本/cm) →ナデ	(2)ハケ→ナデ ナデアゲ→ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1~3)金 ○	深付着	
3	甕	口径(17.2) 残高 3.5	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」の字状。	ハケ(9~10本/cm)	ハケ(7本/cm)	鸡茶褐色 米褐色	石・長(1~5) ○		
4	甕	底径 4.6 残高 7.5	上打底。	ハケ(12本/cm) →ミガキ	ハケ(12本/cm) →ミガキ	黄茶褐色 黑色	石・長(1~2)金 ○	黒斑	18
5	盞	口径(12.6) 残高 4.0	口合せ縁部、波状文4~6条+竹筋文(φ0.4cm)1列。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1~2)金 ○		18
6	盞	残高 5.5	長輪文。細沈線文3段(9条以上、15条、4条以上)。	ミガキ	ハケ(6本/cm) ナデ	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長(1) ○		
7	盞	残高 7.7	肩部小片。貼付凸帯文1条+瓶口。	ヨコナデ ナデ+ヨコナデ	ナデ+ヨコナデ	明茶色 明茶色	石・長(1~3)金 ○	黒斑	
8	盞	残高 1.9	肩部小片。貝殻施文による列点文(3ヶ1組)。	ナデ	ナデ	茶色 明茶色	石・長(1~2) ○	黒斑	
9	盞	残高 2.6	肩部小片。貝殻施文。	板ナデ?	ナデ	茶色 茶色	石・長(1~3) ○		
10	盞	残高 5.3	肩部小片。ヘラ描き沈線文(3条以上、3~4条、4条以上)。	ナデ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1~2)金 ○		
11	盞	残高 3.2	肩部小片。ヘラ描き沈線文4条以上と並す。	スガキ	ナデ	明茶色 明茶色	石・長(1~4)金 ○		
12	鉢	口径(15.2) 残高 10.6	外反口縁。口縁端部はやや肥厚する。	(1)ナデ ○板ナデ?	(2)ミガキ ○ナデアゲ	淡青褐色 茶褐色	石・長(1~4)金 ○	黒斑	18
13	鉢	口径(23.5) 残高 8.1	直口口縁。	(1)ヨコナデ ○ミガキ(マメツ)	(2)ヨコナデ ○ミガキ(マメツ)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 ○	深付着	
14	高坏	口径(12.0) 残高 4.5	陶器部、解説部に記載4系(外第3条、内第2条)、表記:先頭部違い(表記)2ヶ所。	(1)ミガキ(マメツ) ○ヨコナデ	ナデ・シリカ ○ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1~3)金 ○		
15	支脚	残高 4.4	受脚。断面円形。	ナデ	—	灰青褐色	石・長(1~2)金 ○		
16	高坏	口径(16.2) 残高 4.6	坏部。口縁部はわずかに外反する。	ヨコナデ (マメツ)	マメツ(ナデ)	淡褐色 明茶褐色	石(1~4)金 ○		
17	甕	口径(29.3) 残高 2.9	口縁部下位に凸縁1条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗綠色	石 ○	自然釉	
18	瓦盤 土器	口径(4.2) 残高 5.0	器盤うすい。	タタキ (一部ハケ?)	ナデ	淡明茶色 淡明茶色	石・金 ○		

表23 SB 2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量			備 考	国版	
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
19	打製石器	ほぼ完存	サヌカイト	2.7	1.8	0.4	16	四角無式	18

表24 SB 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	国版
				外 面	内 面				
20	甕	口径(21.2) 残高 1.5	口縁部に割れ。	ヨコナデ	ナデ	淡茶色 明茶色	石(1~3) ○		
21	甕	口径(19.4) 残高 2.1	口縁部を下方に拡張し、端面に凹縁文1条を施す。	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ	明茶色 明茶色	石・長(1~2) ○		
22	甕	残高 2.9	胴部小片。	タタキ	ナデ	乳茶色 乳茶色	石・長(1) ○		
23	甕	残高 3.6	頸部片。貼付凸帯文1条+ヘラ 描き斜縫文。	ナデ(マメツ) ハケ(5木/cm)	ヨコナデ ハケ(7~9本/cm)	弱褐色 暗灰褐色	石・長(1~4)金 ○	黒斑	
24	鉢	口径(13.6) 残高 4.4	外反口縁。口縁端部は丸い。	ハケ(9本/cm)	ハケ(7~9本/cm) →ナデ	淡青褐色 茶褐色	石(1~2)金 ○		
25	高坏	口径(17.7) 残高 1.8	口縁部外側に凹縁文3条+割 れ文(2ヶ1組、3ヶ1組)。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 茶色	石(1~3) ○		
26	甕	底径(6.6) 残高 2.6	上打底。	マメツ(ナデ)	マメツ	茶色 茶色	石・長(1~3) ○		
27	瓶	底径(8.7) 残高 7.2	横円形の孔(2.0×3.0cm)3ヶ所 垂取。	マメツ	ハケ(マメツ)	黄茶色 黄茶色	石 ○	黒斑	

表25 SD 4 出土遺物觀察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
28	甕	残高 10.4	上げ底。	ミガキ (マツ)	マツツ ④ナデ	淡褐色 淡黃褐色	石・長(1~4)金 ○	黒底	18

表26 SD 4 出土遺物觀察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法 量			備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
29	鏡?	完存	銅	24	3.3	0.7	6.8	18

表27 SD 1 出土遺物觀察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
30	甕	口径(25.4) 残高 28	口縁端部をひざむに抜壓し、腹面に凹成。光2条を施す。附付凸唇文1条+削印。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡茶色	石・長(1~2) ○		
31	壺	口径(13.2) 残高 3.4	横口縁柱。	ハケ(3~5本/cm) →ナデ	ハケ(4本/cm) ハケ(4本/cm)	淡茶色 淡茶褐色	石・長(1~2)金 ○		
32	扁壺	残高 5.4	柱部内面にシボリ痕。透かし痕。	ハケ	シボリ痕・ナデ	米色 茶褐色	石・長(1~3) ○		
33	高壺	残高 3.1	柱部小片。矢羽根透かし(未貫通)3ヶ所看取。	マツツ	マツツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ○		
34	支脚	底径(11.0) 残高 7.2	中空。内面にシボリ痕。	タタキ ④ナデ	シボリ痕・ナデ	黄茶褐色 基色	石・長(1~3) ○		
35	製塙土器	口径(7.3) 残高 2.0	器底うすい。	マツツ(ナデ)	マツツ(ナデ)	淡褐色 黑色	青 ○		

表28 SD 3 出土遺物觀察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
36	甕	口径(23.7) 残高 1.5	口縁端部を上方に抜押しし、腹面に凹線文2条を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1~2) ○		

表29 SD 7 出土遺物觀察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
37	甕	底径(8.8) 残高 3.0	わずかに上げ底。	マツツ	マツツ	淡褐色 淡灰褐色	石・長(1~3)金・角 ○		

表30 SK 1 出土遺物觀察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
38	甕	口径(30.0) 残高 11.4	折曲口縁。口縁端部に削目。胴部上位にへっ描き比翼文2条を施す。	④ヨコハケ・ナデ 板ナゲ・抜	ナデ	乳白褐色 乳白色	石・長(1~3)金 ○		18
39	壺	口径(12.6) 残高 3.7	大腹口。口縁端部にへっ描き比翼文1条、門上彫及び下部に削目を施す。	ミガキ	ミガキ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~2) ○	黒底	
40	壺	底径(11.2) 残高 8.6	大型品。平底。	ミガキ	ナデ→ミガキ	素褐色 明茶褐色	石・長(1~4)金 ○		18

表31 SK 4 出土遺物觀察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
41	甕	残高 4.0	胴部片。ヘラ描き比翼文3条+削突文。	ミガキ (マツツ)	ミガキ	茶褐色 明茶褐色	石・長(1~3)金 ○		
42	甕	底径(5.0) 残高 5.5	平底。	ミガキ・マツツ (工具狀)	ナデ	淡灰茶色 黄茶褐色	石・長(1~3)金 ○		
43	甕	残高 3.0	肩部片。ヘラ描き比翼文3条を施す。	ミガキ	ナデ	乳茶色 乳茶色	石・長(1~2)金 ○		
44	甕	底径 6.7 残高 3.6	わずかに上げ底。	ミガキ (マツツ)	ナデ	淡褐色 乳褐色	石・長(1~3)金 ○	黒底	
45	甕	底径(8.8) 残高 4.6	平底。	ミガキ ④ナデ	マツツ	乳茶褐色 淡灰茶褐色	石・長(1~4)金 ○		

## 遺物観察表

表32 SK6出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色譜 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
46	甕	口径(26.0) 残高 3.0	口縁部に只輪支 1 条、口縁上側面及び 脚部に脚目を施す。貼付凸唇文 1 条+好印。	ヨコナデ ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ ミガキ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1~3) ○		
47	甕	残高 5.2	貼付凸唇文 2 条。	ミガキ	ナデ	暗茶褐色 暗灰褐色	石・長(1~2)全・角	黒斑?	
48	甕	口径(17.0) 残高 5.5	直口口縁部。	ナデ→ハケ (9~10本/cm)	ハケ (9~10本/cm)	橙茶色 淡灰褐色	石・長(1~3) ○		
49	甕	底径 1.3 残高 3.2	尖底。	ハケ(6~4本)→タキ ⑨ナデ	ナデ	淡黄褐色 灰褐色	石・長(1~3)全 ○	黒斑	

表33 SB10出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色譜 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
50	甕	口径(14.0) 底径 17.3	復元充形品。球形の胴部。口縁部は 内窓なし。通部は内窓する面をもつ。	⑩ヨコナデ ⑪ナデ→ハケ(マツフ) ⑫ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ナデ(指壓痕) ⑮ヨコナデ	灰黃褐色 灰褐色	石・長(1~3) ○	黒斑 焼付着	19
51	甕	口径 14.0 残高 18.1	直部が欠損する復元充形品。肩部の斜口 部は内窓なし。通部内窓が内窓する面をもつ。 ⑯ハケ	⑯ヨコナデ ⑰ヨコナデ ⑱ナデ	⑲ヨコナデ ⑳淡褐色	灰黃褐色 淡褐色	石・長(1~3)全 ○	黒斑	19
52	甕	口径(13.6) 残高 3.3	外反口縁。端部は内窓する面を もつ。	マツフ	マツフ	灰黃褐色 灰黃褐色	石・長(1~2)全 ○		
53	甕	底径 8.0 残高 16.8	長柄。	ナデかハケ? (マツフ)	ナデ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1~3)全 ○	黒斑 焼付着	19
54	高环	口径 13.3 底高 10.3	充形品。口縁部はわざかに外反する。柱 部は内窓なし。通部内窓が内窓する面をもつ。 ①ヨコナデ(ハケ) ②ミガキ・ ③(ハ)ケリズ	④ヨコナデ(ハケ) ⑤ナデ ⑥(ハ)ケリズ	明透褐色 明透褐色	石・長(1~3)全 ○	黒斑		19
55	高环	底径 10.1 残高 7.7	柱部内面に明瞭な後をもつ。 内面にシボリ痕。光透技法。	マツフ (ナデ・ミガキ?)	シボリ痕	淡茶褐色 淡茶褐色	密・全 ○		19
56	壺	口径(9.0) 残高 9.9	広口壺。	ハケ(8本/cm)	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~6)全 ○		
57	壺	底径 9.4 残高 9.4	長柄壺。	ハケ→ミガキ	ハケ(10本/cm) →ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)全 ○		
58	壺	底径(3.8) 残高 6.0	わざかに上げ底。	板ナデ次→ミガキ ⑨ナデ	板ナデ (マツフ)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○		
59	鉢	底径 5.0 残高 6.6	わざかに突出する半底。	⑩ハケ(一部ナデ) ⑪ケズ・ ⑫ケズ	板ナデ	乳黃褐色 淡乳黃褐色	石・長(1~3)全 ○		
60	鉢	口径 12.4 底高 8.1	充形品。外反口縁。	ハケ・タキ	ナデ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1~4)全 ○	黒斑	19
61	鉢	残高 3.4	胴部片。	ハケ(12~13本/cm) (マツフ)	ハケ (8~11本/cm)	茶褐色 黑色	石・長(1~2)全 ○	黒斑	
62	鉢	底径 2.0 残高 3.2	突出する小さな平底。	ハケ(11本/cm) ⑩ナデ	ハケ (9~10本/cm)	茶褐色 黑色	石・長(1~3)全 ○	黒斑	
63	支脚	残高 12.2	受部。瓶面円形。	ナデ・ハケ(6本/cm) タキ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3)全 ○		
64	製塙上器	口径(4.6) 残高 5.3	器壇うすい。	タキ (マツフ)	ナデ	茶褐色 茶褐色	密・全 ○		19
65	製塙上器	残高 4.2	器壇うすい。	マツフ (タキ)	マツフ (ナデ)	灰茶色 灰茶色	密 ○		

表34 SB10出土遺物観察表 玉類

番号	器種	残 存	材 質	色	法 量			備 考	図版
					直徑(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
66	F玉	完形	滑石	綠灰色	0.40	0.25	0.05		19

表35 SB1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色譜 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
67	甕	口径(21.6) 残高 8.1	口縁部は内窓し、端部は内傾す る面をもつ。	⑩ヨコナデ ⑪ハケ	⑬ヨコナデ ⑭ハケ・ナデ	灰黃褐色 灰黃褐色	石・長(1~4)全 ○		20
68	甕	口径(19.7) 残高 4.3	口縁部は内窓し、端部は内傾す る面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1)全 ○	黒斑	
69	瓶	口径(11.6) 残高 3.8	口縁部は内窓し、端部は丸い。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	密・全 ○	黒斑	
70	土瓶	長さ 5.0 幅 1.3	穿孔(φ0.4cm)。	ナデ	工具ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長(1)全 ○	煤付着	20
71	坏壺	口径(12.6)	扁平な大井部をもち、口縁端部 は内傾する面をもつ。	⑮回転ヘラケツリ ⑯回転ナダ	回転ナダ	青灰色 青灰色	密 ○		20

SB 1出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
72	环身	口径 (10.9) 残高 3.7	たちあがり縁部は内傾する凹面をなす。内部は外方にのげる。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ○		
73	壺	口径 2.9 残高 5.5	有蓋壺外の蓋、つまり中央部は凹む。内側は明瞭。	つぶら回転ナデ 凹回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ○		
74	壺	口径 5.2	頭部にヘラ描き沈線文3条を施す。	ナデ(ハケ痕)	ナデ	暗灰茶褐色 暗灰褐色	石・長(1~3)金 ○	黒斑	20
75	壺	残高 11.4	大型品。ヘラ描き沈線文3条を施す。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 乳黃褐色	石・長(1~2)金 ○		20

表36 SB 3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
76	壺	口径 18.7 残高 25.0	球形の胴部。口縁部は内傾し、通す。口縁部は内傾する丸いある面をもつ。	①マツ(ナデ) ②マツ(ハケ) ③ナデ(マツ)	④コナデ(マツ) ⑤コナデ(ハケ) ⑥ナデ(マツ)	灰黄褐色 灰黄褐色 ○	石・瓦(1~3)金 ○	黒付着	20
77	壺	口径 18.4 残高 7.2	口縁部は内傾し、底部は内傾する丸いある面をもつ。	⑦コナデ(マツ) ⑧マツ	⑨コナデ(ナデ) ⑩ナデ(マツ)	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1~4)金 ○	黒斑	20
78	壺	口径 20.4 残高 3.5	口縁部は内傾し、底部は内傾する丸いある面をもつ。	マツ	マツ	茶褐色 茶褐色	石(1~3)金 ○		
79	壺	口径 20.0 残高 5.9	口縁部は直し、底部は内傾する丸いある面をもつ。	マツ(ハケ)	⑪⑫コナデ マツ	淡黄褐色 灰黄褐色	石(1~3)金 ○		
80	环身	口径 12.4 残高 2.7	口縁端部は内傾する凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
81	壺	口径 3.2 残高 3.6	有蓋壺外の蓋、つまり中央部がわずかに突出する。口縁部は内傾する。	⑬⑭回転ナデ ⑮回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 乳白色	密 △		20
82	高杯	口径 15.5 残高 5.7	年輪の凹凸を2条。凸部は内傾する。内側は明瞭な凹みがある。	⑯回転ナデ ⑰回転ヘラケズリ ⑱きま→ナデ	⑯回転ナデ ⑰回転ヘラケズリ ⑱きま→ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ○	自然釉	20
83	壺	口径 24.8 残高 1.6	口紐曲線。口縁端部に斜片。	ヨコナデ	ヨコミガキ	淡乳褐色 淡乳褐色	石・長(1~2) ○		

表37 SB 3出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量			備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
84	石碗丁	2/3	緑色片岩	4.6	9.2	0.6	47.1	

表38 SB 5出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
85	壺	口径 (11.8) 残高 3.7	口縁部は内傾し、立ち上がる。	⑪マツ ⑫マツ(二具裏)	マツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○		
86	壺	口径 11.6 器高 4.6	口縁部は内傾し、立ち上がる。	⑬ナデ(マツ)	ナデ(マツ)	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~4)金 ○		
87	壺	口径 11.6 残高 4.2	口縁部は内傾し、立ち上がる。	マツ(ナデ)	ヨコナデ (マツ)	茶褐色 茶褐色	密 ○		
88	壺	口径 14.7 残高 7.0	直口口縁。口縁端部はわずかに内傾する。	⑭ヨコナデ ⑮回転ナケズリ状	⑯ヨコミ(ヨコナデ) ⑰マツ(ナデ)	雅茶褐色 暗茶褐色	石・瓦(1~3)金 ○	黒斑?	
89	壺	口径 12.3 残高 4.2	口縁端部は内傾する凹面をなす。	⑯回転ナデ ⑰回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
90	环身	口径 11.2 残高 5.0	底部は丸形をもち、たちあがり端部は内傾し、受泡溝に沈没状の凹みがある。	⑯回転ナデ ⑰回転ナケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		

表39 SB 6出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
91	壺	口径 (14.5) 残高 6.2	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。	ヨコナデ ⑨ナデ	⑩ヨコナデ ⑪ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	密 ○	黒斑	21
92	壺	口径 10.3 器高 10.7	直口口縁。口縁端部は「コ」の字状。	⑫ヨコナデ ⑬ハケ→ナデ	⑭ヨコナデ ⑮ナデ→ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	密・全 ○		
93	壺	口径 10.0 器高 10.7	完形品。口縁部は外反し直立す。	ナデ	⑯ヨコナデ ⑰ナデ(丁具)	淡茶褐色 淡赤茶色	石・長(1~2) ○	黒斑	21
94	壺	口径 (10.0) 残高 6.1	小形品。口縁部が直立し、口縁部は丸い。	ナデ	⑯ヨコナデ ⑰ナデ・ケズリ	明茶褐色 明茶褐色	密 ○		
95	壺	残高 4.7	小形品。腹部小片。	ハケ(6.4/cm) マツ	ナデ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1~2)金 ○		

## 遺物観察表

SB 6 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) 淡灰褐色	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
96	壺	残高 4.0	小型品。肩部小片。	①ハケ→ヨコナフ ②マツツ(ハケ?)	マツツ	淡黄褐色 淡灰色	石・長(1~2)		
97	壺	底径 1.0 残高 9.1	小型丸壺。内面に手持ちヘラ ケズリによる測定。	①ナデ ②ハケ	①ハケ(マツツ) ②ナデ・ケズリ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長(1~3) 金 黒斑?		
98	壺	残高 3.6	小型壺。内面に手持ちヘラケズ リによる測定。	ナデ	ナデ・ケズリ	乳灰褐色 淡灰色	石・長(1)		
99	ミニチュア	口径 4.2 器高 4.2	ミニチュア品。	ナデ	ナデ	茶褐色 淡黄褐色	石・長(1) 金 黒斑	21	
100	壺	口径(10.6) 器高 5.3	口縁部は外傾し、立ち上がる。	ナデ(指痕質)	ナデ	褐色 褐色	密・全 ○		
101	壺	口径(17.5) 残高 5.7	口縁部はわずかに外反する。壺部下 位に明瞭な棱をもつ。柄介せ柱孔。	①ヨコナデ(マツツ) ②ナデ(マツツ)	①ヨコナデ(マツツ) ②ナデ(マツツ)	淡褐色 淡褐色	密 ○		
102	壺	口径(16.5) 残高 4.5	口縁部はわずかに内反する。	マツツ	マツツ	淡黄褐色 黄茶色	密 ○		
103	壺	口径(11.9) 残高 7.1	柱窓部内面に明瞭な棱をもつ。	マツツ	ケズリ	茶褐色 茶褐色	密 ○		21
104	壺	底径(12.1) 残高 6.8	柱窓部内面に明瞭な棱をもつ。	ナデ・マツツ	マツツ	乳黃褐色 乳黃褐色	密 ○	黒斑	
105	壺	残高 7.8	尤裏技法。	ナデ(マツツ)	①マツツ ②シボリ痕・ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~2) ○		
106	壺	口径(12.3) 残高 4.9	山根部は内傾し、わずかに凹 曲をなす。	①回転ヘラケズリ ②回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
107	壺	残高 3.4	内側 1 条、波状文 3 段(2 条、 16~19 条、5 条)。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○		
108	壺	残高 3.7	胸中位に円孔(φ16cm)。	回転ナデ	ナデ 回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
109	壺	残高 3.3	口縁部が三角形に肥厚する。口縁 部下位に波状文 3 条以上。柱孔。	マツツ	マツツ	灰白色 灰白色	密 ○		
110	壺	口径(28.1) 残高 3.7	口縁端面に凹縫文 1 条を施す。 貼付凸縫文 1 条 + 柱脚押印。	マツツ	マツツ	淡黄褐色 淡灰褐色	石・長(1~2) ○		
111	壺	口径(17.1)	口縁端部は丸い。	①ヨコナデ ②マツツ	①ヨコナデ・ナデ ②ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~2) ○		
112	壺	口径(15.0) 残高 4.9	口縁端部を上下方に拡張し、端 面に凹縫文 4 条を施す。	①ヨコナデ ②ナデ(ハケ?)	ヨコナデ ナデ(マツツ)	茶褐色 淡黄褐色	石・長(1~3) ○		
113	壺	残高 1.8	刺突文(4ヶ、3ヶ、2ヶ)。	マツツ	ナデ(マツツ)	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1~3) ○		

表40 SB 6 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
114	打製石器	ほぼ完存	サスカイト	24	16	0.3	15	平基無茎式	21
115	打製石器	5 / 6	サスカイト	44	18	0.4	24		21

表41 SB 6 出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
116	不明	—	鉄	32	1.8	0.2	34		21
117	不明	—	鉄	21	1.9	0.3	23		21

表42 SB 8 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) 淡灰褐色	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
118	壺	口径(12.1)・山根部は内傾し、溝部はコの字型。	ヨコナデ	ナデ(マツツ)	ナデ(マツツ)	暗灰褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 黒斑		
119	壺	残高 5.6	貝殻文(3ヶ 1組)。	ヨコナデ	①ヨコナデ・ナデ ②ケズリ	乳白色 乳白色	密 ○		21
120	壺	口径(10.6) 残高 4.5	たちあがり溝部は内傾する面 をもつ。	①回転ナデ ②回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 暗灰褐色	密 ○		
121	壺	残高 3.3	長方形状の透かし 3 所。	①回転ナデ ②回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗灰褐色 灰色	密 ○		
122	壺	口径(13.4) 残高 2.57	ほぼ完形品。口縁端部を上方に拡張 し、表面に凹縫文 2 条と底部に刻目。	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ→ミガキ	ヨコナデ ナデアゲ	暗茶色 茶褐色	石・長(1~4) 金 黒斑 深付着		

SB 8出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・鈴文	調 整		色調(外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
123	高坏	口径 (16.1) 残高 2.1	口縁部に凹縞文 2条を施す。凹縞文間に直波文(4ヶ1組)。	ヨコナデ (ハケ底)	ヨコナデ (ハケ底)	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~2)全 ○	黒底	21
124	高坏	残高 3.3	口縁部に凹縞文 2条以上を施す。内縞文上に划目。	ハケ→ミガキ	ハケ(10本/cm) ・ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○		21

表43 SB 11出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・鈴文	調 整		色調(外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
125	甕	口径 (20.8) 残高 3.9	口縁部は内湾し、腹部は内傾する面をもつ。	①ヨコナデ ②ハケ	①ヨコナデ ②ハケ	系褐色 茶褐色	石・長(1~3)全 ○		
126	高坏	残高 3.1	坏部部。	マツツ	マツツ	乳褐色 乳褐色	密 ○		
127	高坏	残高 3.7	脚部部・系込技法。	マツツ	ナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	密 ○		
128	坏蓋	口径 (11.4) 残高 4.2	天井部は丸く、口縁端部は内傾する面をなす。底は明瞭。	①凹輪転ヘラケズリ ②回転ナデ	①凹輪転ヘラケズリ ②回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ○	自然釉	
129	坏蓋	口径 (14.4) 残高 3.1	口縁端部は丸い。	①凹輪転ナデ	①凹輪転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
130	坏蓋	口径 (14.6) 残高 3.3	口縁端部は丸い。底は内縞状に凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	岩 ○		
131	坏身	口径 (11.2) 残高 4.9	底部は丸味があり、たちあがり部は内傾し、凹面をなす。	①回転ナデ ②回転ヘラケズリ	①回転ナデ ②回転ヘラケズリ	白灰色 白灰色	光 ○		
132	坏身	口径 (10.4) 残高 4.1	底部は丸味があり、たちあがり部は内傾し、凹面をなす。	①回転ナデ ②回転ヘラケズリ	①回転ナデ ②回転ヘラケズリ	灰色 灰色	密 ○		
133	高坏	口径 (15.8) 残高 3.9	無蓋高坏。坏部中央に凸縫 2条。下位に波文5条以上を施す。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ○		
134	高坏	口径 (8.9) 残高 2.5	脚部部。方形状形の透かし1ヶ所有。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
135	高坏	口径 (9.6) 残高 3.7	脚部部は下方に屈曲する。脚部面に凹縫 1条。透かし1ヶ所有。	回転ナデ	回転ナデ	墨灰色 灰色	密・金 ○	自然釉	
136	壺	口径 (17.5) 残高 5.3	口縁端部は丸味のある長方形5次に拡張する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
137	壺	口径 (19.4) 残高 3.7	口縁端部は長方形に肥厚する。口縁端部内側をわずかにまみ上げる。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ○		
138	甕	口径 (26.2) 残高 2.4	口縁端部は三角形に肥厚する。口縁部下位に波文1条と内縞文1条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	黑色 灰色	密 ○		
139	甕	口径 (25.0) 残高 3.2	口縁端部は三角形に肥厚する。縫間に凹縫 1条と内縞文1条と内縞文1条を施す。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3)全 ○	塗付兼	
140	甕	口径 (25.2) 残高 5.1	口縁端部は西側(左)と東側(右)に各1条の内縞文と内縞文1条と内縞文1条を施す。	①ヨコナデ ②ヨコナデ ③ヨコナデ ④ハケ(4本/cm) ⑤ハケ	①ヨコナデ ②ヨコナデ ③ヨコナデ ④ハケ ⑤ハケ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) ○		
141	甕	口径 (24.2) 残高 2.1	折曲口縁。口縁端部に刻目。	ヨコナデ マツツ	ヨコナデ マツツ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1~2)全 ○		
142	壺	口径 (22.8) 残高 5.5	複合口縁。半截竹管文と竹管文を施す(2列、1列、2列)。	ヨコナデ ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ ハケ→ヨコナデ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1~2)全 ○		
143	壺	口径 (20.0) 残高 3.8	複合口縁。口縁端部は「コ」の字状。	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~3)全 ○		
144	壺	残高 3.2	複合口縁。刻目。	ヨコナデ マツツ	ヨコナデ マツツ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1~3)全 ○		
145	壺	口径 (13.6) 残高 2.3	複合口縁。波状文5条以上を施す。	ハケ→ナデ	マツツ	橙褐色 橙褐色	石・長(1~2)全 ○		
146	壺	残高 2.3	口縁部は上方に張出し、縫間に凹縫文2条+刻目を施す。	ミガキ ヨコナデ 1カキ	ヨコナデ 1カキ	茶色 茶褐色	石・長(1~2)全 ○		
147	甕	口径 (34.0) 残高 7.7	大型甕。口縁部は上方に張出し、縫間に凹縫文4条+山形文を施す。	マツツ	マツツ	淡赤褐色 淡黄褐色	石・長(1~3) ○		
148	甕	口径 (9.5) 残高 7.2	上げ底。	ミガキ ヨコナデ	工具ナデ ナデ	茶褐色 茶茶色	石・長(1~3)全 ○	黒底	
149	支脚	残高 3.8	受部片・中空。	ナデ	ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~4) ○		
150	小房	残高 4.1	器種不明。	ミガキ	ヨコナデ ナデ	淡褐色 茶褐色	石・共(1~5)全 ○	墨底	
151	製塙土器	口径 (4.2) 残高 1.7	器形うすい。	ナデ→タキ	マツツ	灰黃褐色 灰茶色	石・共 ○		

表44 SB11出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
152	石斧	1/3	緑色片岩	32	4.3	0.6	17.0	

表45 SB11出土遺物観察表 玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量			備考	図版
					直径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
153	F玉	3/4	滑石	無灰色	0.70	0.20	0.14		

表46 SB9出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整			色調(外面)	色調(内面)	胎土成	備考	図版
				外 面	内 面	色調(内面)					
154	甕	口径(18.2) 残高 6.6	口縁部は内溝し、端部は内傾する面をもつ。	マメツ	ヨコナデ ヨコナデ(マメツ)	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1~3)全	○			
155	甕	口径(19.0) 残高 4.0	口縁部は内溝し、端部は内傾する面をもつ。	マメツ	ヨコナデ (マメツ)	黄茶褐色 茶褐色	密・金	○			
156	甕	口径(16.6) 残高 5.5	口縁部は内溝し、端部は丸い。 腹上位に二つ記号。	マメツ ハケ	マメツ (ハケ)	淡褐色 淡褐色	密・金				22
157	甕	口径(16.0) 残高 4.3	口縁部は外溝し、端部には「コ」の字状。	マメツ	マメツ	乳赤褐色 淡灰褐色	石・長(1~3) ○				黒斑
158	甕	口径(17.1) 残高 3.6	口縁部は内溝し、端部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ 板ナデ	ヨコナデ 板ナデ	褐色 赤褐色	石・長(1~3)全 ○				
159	甕	口径(19.8) 残高 3.8	口縁部は内溝し、端部は内傾する面をもつ。	マメツ	マメツ	淡黃茶色 淡褐色	密	○			
160	甕	口径(21.1) 残高 4.4	口縁部は内溝し、端部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ (工具痕?)	マメツ	明茶褐色 明茶褐色	密	○			
161	甕	口径(19.5) 残高 3.8	口縁部は内溝し、端部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ	淡褐色 灰褐色	長(1~2) ○				媒付有
162	甕	口径(17.8) 残高 3.1	口縁部は内溝し、端部は内傾する面をもつ。	マメツ	ヨコナデ	灰茶褐色 灰褐色	石・長(1~2)全 ○				
163	甕	口径(22.0) 残高 7.4	口縁部は内溝し、端部は丸い。	ヨコナデ (ハケ)	ヨコナデ	乳白褐色 白乳褐色	石・長(1)全				22
164	甕	口径(19.8) 残高 5.9	口縁部は内溝し、端部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ (マメツ)	マメツ	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1~4) ○				
165	甕	口径(18.6) 残高 6.0	口縁部は内溝し、端部は内傾する出をもつ。	マメツ	ヨコナデ (マメツ) (ハケ?)(マメツ)	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1~3)全 ○				
166	瓶	口径(11.0) 高さ 4.8	口縁部は内溝して立ち上がり、 端部は丸い。	マメツ (工具痕)	ヨコナデ	明茶色 乳褐色	密・金 ○				
167	高杯	高杯 残高 4.4	環脚部片。	マメツ	マメツ	樹茶色 樹茶色	密	○			
168	高杯	高杯 残高 2.6	柱粘部内面に後をもつ。	ナデ ヨコナデ	ナデ	明茶色 明茶色	石・長(1~2)全 ○				
169	甕	口径(28.4) 残高 7.3	口縁部は半圓面をもつ。	ヨコナデ (ハケ(5本/cm)) (ナデ)	ヨコナデ (ハケ(5本/cm)) (ナデ)	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長(1~3)全				
170	瓶	残高 2.1	横円形孔 1ヶ所看取。	ハケ (6~7本/cm)	ハケ (6~7本/cm)	茶褐色 茶褐色	密 ○				黒斑
171	甕	残高 3.9	把手・断面圓形。	ナデ	マメツ	黃茶褐色 黃茶褐色	石・長(1~2)全 ○				
172	甕	残高 5.9	把手・断面圓形。	ナデ	マメツ(ナデ)	暗灰褐色 暗灰褐色	密 ○				22
173	甕	口径 26.7 残高 2.8	口縁部下に内縫 1条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○				22
174	製塩土器	口径(42) 残高 5.8	器取うすい。	マメツ (タキ)	マメツ	淡赤茶色 淡茶色	密 ○				
175	环盖	口径(11.8) 残高 4.1	天井部は扁平で、口縁端部は内傾する凹面をなす。縁に明瞭。	回転・ハラケズリ 回転ナデ	回転ナデ 回転ナデ	黃灰色 青灰色	密 ○				自然釉
176	环盖	口径 12.3 残高 4.7	天井部は丸く、口縁端部は内傾する凹面をなす。縁に明瞭。	回転・ハラケズリ 回転ナデ	回転ナデ 回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○				22
177	环盖	口径(11.5) 残高 5.0	天井部は扁平で、たらあがり縁部は内傾する凹面をなす。縁に明瞭。	回転・ハラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○				自然釉
178	环身	口径(10.4) 残高 4.6	底部は扁平で、たらあがり縁部は内傾する凹面をなす。縁に明瞭。	回転ナデ 回転・ハラケズリ ナデ	回転ナデ 回転ナデ ナデ	灰色 灰色	密 ○				
179	环身	口径(10.6) 残高 5.1	底部は丸く、たちあがり縁部は内傾する凹面をなす。	回転ナデ 回転・ハラケズリ ナデ	回転ナデ 回転ナデ ナデ	白色 白色	密 ○				

SB 9出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面 内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
180	坏身	口徑(10.2) 器高 5.0	底部は扁平で、たちあがり縫部は内 側に凹凸をなす。底部はへび形。	⑤回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	青灰色 青灰色	密	-	-
181	坏身	口徑 10.8 器高 5.1	底部は丸く、たちあがり縫部は 内側に凹凸をなす。	⑤回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	暗灰色 青灰色	密	-	22
182	坏身	口徑 10.0 器高 4.5	底部は丸く、たちあがり縫部は内 側に凹凸をなす。内側に凹凸をなす音。	⑤回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	青灰色 青灰色	密	-	22
183	否	口徑 12.5 器高 5.7	口部は丸く、たるあがり縫部は内 側に凹凸をなす。内側に凹凸をなす音。	⑤回転ヘラケズリ ⑥回転ナデ	回転ナデ ⑥回転ナデ	黒灰色 青灰色	密	-	22
184	瓶	口徑 3.5 残高 4.4	右直立環の點つまみ中央部が内 側に凹凸をなす。内側に凹凸をなす音。	⑤(2)回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	灰色 青灰色	密	-	-
185	高坏	口徑(16.2) 残高 8.2	蓋・高环・台形状透かし 3ヶ所。後 は明瞭。	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ ⑥回転ナデ	暗灰色 灰色	密	-	-
186	高坏	口徑(16.1) 残高 4.0	口蓋の环・口根中位に凸縁 1 条 を施す。下位に波状文 7 条。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密	-	-
187	高坏	残高 2.5	無蓋高环・口根中位に凸縁 1 条 を施す。下位に波状文 11 条。	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	暗灰色 灰色	密	-	-
188	高坏	底径 (7.5) 残高 4.7	脚端部は下方に屈曲する。長方 形狀の透かし 2ヶ所有。	カキメ ⑥回転ナデ	回転ナデ ⑥回転ナデ	暗灰色 青灰色	密	-	-
189	高坏	底径 (8.9) 残高 4.2	脚端部は下方に屈曲する。長 方形状の透かし 1ヶ所有。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	密	-	-
190	椭	残高 3.6	脚部中位に沈縫 2 条と凸縫 1 条 を施す。下位に波状文 8~9 条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密	-	-
191	椭	口徑(10.9) 残高 4.2	脚部中位に沈縫 1 条と沈縫 1 条を 施す。凸縫と沈縫間に波状文 10 条。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密	自然釉	-
192	壺	残高 8.3	脚部中位に沈縫 2 条を施す。沈 縫間に波状文 7~8 条。	回転ナデ ⑥ナデ	⑥ナデ ⑥回転ナデ	青灰色 灰色	密	自然釉	22
193	壺	残高 5.7	脚部中位に沈縫 2 条、沈縫間に 波状文 7~8 条を施す。	(6)カキメ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	青灰色 青灰色	密	自然釉	-
194	壺	口徑 (9.5) 残高 4.3	屈曲部は短く直立し、 脚部は低い。	カキメ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密	-	-
195	壺	口徑 (18.8) 残高 3.1	口縁周辺を長方形状に肥厚す る。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密	-	-
196	壺	口徑 (25.6) 残高 3.3	外反口縁・口縁部下位に凸縁 1 条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密	-	-
197	瓶	残高 6.4	把手・断面格円形。	ナデ	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	密	-	-
198	甕	底径 (4.3) 残高 2.7	平底。	タタキ ⑥ナデ	ナデ	灰褐色 茶褐色	石・瓦(1~3)	黒底	-
199	壺	口徑 (16.8) 残高 5.3	口縫部は上方に拡張し、縫間に凹 縫文 2 条を施す。脚部に沈縫 1 条。	④回転コナデ ④マツツ	茶褐色 茶褐色	石・瓦(1~3)金	-	-	-
200	甕	残高 4.2	肩部小片・沈縫文 2 条 + 断縫文。	ナデ	ヨコナデ	明灰茶褐色 乳茶褐色	密	-	-
201	甕	残高 4.9	肩部小片。其段文。	ナデ	ナデ → ミガキ	灰青褐色 褐黑色	石・長(1~4)	-	-
202	甕	残高 2.3	肩部小片。ヘラ横沈縫文 6 条 (タテ 4 条、ヨコ 2 条)。	ナデ	ナデ	茶褐色 黑色	石・長(1~4)	黒底	-
203	壺	残高 4.4	肩部小片。刺突文。	ナデ	ナデ	淡黄褐色 淡灰褐色	石・長(1~3)	-	-
204	土錐	長さ 4.2 幅 1.9	円孔(φ 0.4cm)。	ナデ	工具ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2)金	-	23

表47 SB 9出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
205	有孔円板	完存	滑石	23	25	0.3	4.6	-	23

表48 SB 9出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
206	刀?	一	鉄	10.1	2.0	0.6	20.3	-	23

## 遺物観察表

表49 SB9出土遺物観察表 玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量			備考	図版
					直径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
207	白玉	完形	滑石	緑灰色	0.46	0.30	0.10		23
208	白玉	完形	滑石	黒灰色	0.60	0.41	0.20		23

表50 SB7出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
209	壺坏	口径(14.7) 残高 6.1	壺部下位に縫をもつ。	ヨコナデ マツツ	ヨコナデ ナデ	明茶色 明茶色 ○	青 ○	黒斑	
210	壺蓋	口径(12.0) 残高 2.8	天井部は丸く、口縁部は内傾する凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	淡褐色 淡褐色 ○	青 ○		

表51 3号大型建物出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
211	甕	残高 9.8	胴部片。	タタキ (マツツ)	ハケ (5~6本/cm)	黄褐色 淡黃褐色 ○	石・長(1~4) 黒斑	SP② 23	
212	甕	残高 3.2	貼付凸帯文1条+斜格子目文。	ヨコナデ	ハケ(3本/cm) ナデ	茶褐色 黒色 ○	石・長(1~3) 黒斑	SP③ 23	
213	甕	残高 3.4	胴部小片。	タタキ	ナデ	淡茶褐色 淡灰褐色 ○	石・長(1)全 SP④		
214	甕	残高 3.2	胴部小片。	タタキ	ハケ (8~10本/cm)	乳灰茶色 淡灰褐色 ○	石・長(1~3)全 SP⑤ 煤分有		
215	甕	底径(4.0) 残高 4.1	平底。	ハケ(6本/cm)	ナデ	米褐色 黄茶褐色 ○	石・長(1~4) 黒斑	SP⑥ 23	
216	甕	残高 5.3	胴部小片。	タタキ→ ハケ(5本/cm)	ハケ(4本/cm)	淡茶色 暗灰褐色 ○	石・長(1~3) 黒斑	SP⑦ 23	
217	壺蓋	口径(10.8) 残高 1.8	口縁部小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色 ○	青 ○	SP⑧	
218	鉢	残高 3.4	胴部小片。	タタキ	ナデ(マツツ)	淡青褐色 淡青褐色 ○	石・長(1~2) 黒斑	SP⑨ 23	
219	甕	残高 4.9	口縁部片。	ハケ・ミガキ	マツツ	明茶色 淡茶褐色 ○	石・長(1~3)全 SP⑩		
220	甕	残高 3.9	胴部小片。	タタキ→ ハケ(4~5本/cm)	ハケ(4~5本/cm) (マツツ)	淡茶褐色 乳褐色 ○	石・長(1) ○	SP⑪	
221	鉢	残高 3.9	胴部小片。	タタキ	ハケ(10本/cm)	乳褐色 淡茶色 ○	石・長(1~3)全 SP⑫ 黒斑		
222	支脚	残高 3.6	受部。断面積円形。	ナデ	—	淡褐色 ○	石・長(1~4)全 SP⑬		
223	甕	口径(19.6) 残高 1.4	口縁部小片。	ナデ	ナデ	黄茶褐色 暗褐色 ○	石・長(1~2)全 SP⑭ 黒斑		
224	甕	残高 2.5	胴部片。	タタキ (マツツ)	ナデ	淡褐色 黑色 ○	長(1~2) ○	SP⑮ 23	
225	甕	残高 2.6	口縁部は内傾する面をもつ。	マツツ	マツツ	黄茶褐色 青褐色 ○	石・長(1~2)全 SP⑯		
226	甕	残高 7.7	把手。	ナデ	ナデ	青褐色 黑色 ○	石・長(1~2) 黒斑 點状剥離	SP⑰ 23	
227	壺身	残高 2.2	小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰褐色 青灰色 ○	青 ○	SP⑲	
228	甕	残高 8.7	胴部片。	タタキ	ハケ (5~6本/cm)	淡褐色 淡青褐色 ○	石・長(1~3) ○	SP⑳	23
229	甕	残高 6.2	縫合口縁部。	マツツ(ハケ)	ハケ→ナデ ヨコナデ	明茶色 石・長(1~2) ○	石・長(1~2) 黒斑	SP㉑ 23	
230	甕	口径(35.8) 残高 2.1	口縁部を下方に拡張し、縫合に波状文5条を施す。	ヨコナデ ヨコナデ(5本/cm)	マツツ	黄褐色 暗黃褐色 ○	石・長(1~3) ○	SP㉒ 23	
231	鉢	口径(26.3) 残高 1.8	口縁部小片。	ヨコナデ	ハケ(マツツ) (ヨコナデ) ヨコナデ(5本/cm)	茶褐色 基褐色 ○	石・長(1~5)全 SP㉓ 23		
232	鉢	口径(15.5) 残高 3.4	口縁部は直立する。	ハケ(マツツ)	ハケ(マツツ) (ヨコナデ) ヨコナデ(5本/cm)	淡茶褐色 淡青褐色 ○	石・長(1~2)全 SP㉔ 23		
233	高壺	残高 1.2	年輪小片。	マツツ	マツツ	淡褐色 基褐色 ○	石(1) ○	SP㉕	
234	甕	底径(5.8) 残高 5.1	トゲ底。	ナデ→ ヨコナデ	ナデ	暗青茶色 青褐色 ○	石・長(1~3) ○	SP㉖	
235	壺蓋	残高 2.5	小片。	ヨコナデヘラケズリ ヨコナデナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色 ○	青 ○	SP㉗	

3号大型物出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 燃 成	備考	図版
				外 面	内 面				
236	壺	残高 41	側部片。	タキ	ハケ(5~6cm/cm) 板ナデ	灰茶褐色 淡黄褐色	石・長(1~2)金 ○	SP@	
237	鉢	口径(21.7) 残高 32	口縁部はわずかに外反する。	○コナデ タキ	ハケ? ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	密 ○	SP@	
238	壺身	残高 18	底部片。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	SP@	
239	甕	口径(21.2) 残高 26	口縁端部は丸い。	ナデ	ハケ(マメツ)	乳灰褐色 乳灰褐色	石・長(1) ○	SP@	
240	壺	残高 34	肩部小片。貝殻文。	ミガキ (マメツ)	ナデ ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~4) ○	SP@ 黒底?	
241	鉢	底径 16 残高 25	突出する小さな平底。	ハケ(10cm/cm)	ナデ	黑色 黑褐色	石・長(1~2)金 ○	SP@ 黒底	
242	支脚	底径(90) 残高 29	中空。	ミガキ (マメツ)	マメツ	米褐色 茶褐色	石・長(1~2) ○	SP@	
243	高坏	底径(128) 残高 14	柱縫部内面に明瞭な棱をもつ。	ミガキ (マメツ)	マメツ	淡褐色 乳黄褐色	密 ○	SP@	

表52 挖立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 燃 成	備考	図版
				外 面	内 面				
244	壺	口径(12.2) 残高 32	口縁端部を上方に拡張し、表面に凹線文3条を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○		
245	壺	残高 47	小窓型。	ナデ	ナデ	暗灰褐色 暗灰褐色	密 ○	黒底 焼付着	
246	高坏	口径(21.2) 残高 35	口縁端部はわずかに外反する。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	淡褐色 淡褐色	密 ○		

表53 SD2(1区下層)出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 燃 成	備考	図版
				外 面	内 面				
247	壺	口径(33.2) 残高 25	折曲口縁。口縁端部に刻目。	ヨコナデ	ヨコナデ (マメツ)	茶褐色 茶色	石・長(1~2) ○		
248	壺	残高 36	輪穴付円筒文1糸+押印。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ミガキ	茶褐色 茶色	石・長(1) ○		
249	壺	口径(15.8) 残高 50	「く」の字状口縁。口縁端部はナタ型。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ ミガキ	茶褐色 茶色	石・長(1~3) ○	黒底	
250	壺	口径(17.4) 残高 27	口縁部が外反し、口縁端部は丸ナタ型。	ハケ(マメツ)	マメツ	乳褐色 乳褐色	長(1~4) ○		
251	壺	口径(10.1) 残高 52	「く」の字状口縁。口縁端部は丸ナタ型。	ヨコナデ ナデ (マメツ)	ヨコナデ ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~4) ○		
252	壺	口径(18.6) 残高 41	「く」の字状口縁。口縁端部は丸ナタ型。	ハケ(10cm/cm) ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ ケズリ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 ○	焼付着	
253	壺	口径(15.6) 残高 7.8	「く」の字状口縁。口縁端部は丸ナタ型。	ハケ(10~24cm/cm) ヨコナデ	ハケ(8~12cm/cm) ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~1)金 ○	黒底	
254	壺	底径(7.5) 残高 34	平底。	ミガキ(マメツ)	マメツ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2) ○	瓜延	
255	壺	底径 6.1 残高 31	平底。	ミガキ	ナデ	茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~3)金 ○	黒底	
256	壺	底径(7.6) 残高 48	上げ底。	ミガキ→ヨコナデ ナデ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~4)金 ○		
257	壺	底径 23 残高 16.3	長胴。小さな平底。	タキ ナデ	ハケ(7cm/cm) ナデアゲ	赤褐色 淡褐色	石・長(1~4)金 ○	風連 葉付着	23
258	壺	口径(41.0)	大型品。広口壺。口縁部を削り、口縁内面に貼付凸円筒文1糸。	ナデ ミガキ?	ヨコナデ ミガキ?	茶褐色 乳褐色	石・長(1~4) ○		
259	壺	口径(15.4)	広口壺。口縁部を削り、下方に拡張し、周縁に凹線文2条を施す。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	茶褐色 灰茶色	石・長(1~2) ○		
260	壺	口径(13.2)	広口壺。口縁部を上下方に拡張。口縁内面に貼付凸円筒文2糸を施す。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3)金 ○		
261	壺	口径(22.0) 残高 4.1	広口壺。口縁部を上下方に拡張。口縁内面に貼付凸円筒文1糸と削り目。	マメツ	ヨコナデ ミガキ(マメツ)	赤茶褐色 赤茶褐色	石・長(1~2) ○		
262	壺	口径(19.1)	旋合口壺。口縁部を波状文4糸で施す。	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~2)金 ○	黒底	
263	壺	残高 8.4	頭部にヘラ巻き沈文6条、ハラ巻き沈文2条+貞文1糸+貞文1糸。	ハケ(マメツ) ヨコナデ(マメツ)	ミガキ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~5) ○		23
264	壺	口径(9.5)	小型壺。口縁部は直し、口縁部は丸い。	ナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3)金 ○		

## 遺物観察表

SD 2(1区下層)出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外觀)(内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
265	盃	底径 (6.7) 残高 5.3	平底。	ハケ(5本/cm) (#ナデ)	ナデ	淡茶褐色 灰褐色	石・長(1~3) ○	黒斑	
266	盃	底径 (8.5) 残高 3.4	わずかに上げ底。	ミガキ・ナデ (#ミガキ)	下.ナデ →ナデ	淡茶褐色 灰褐色	石・長(1~3) ○	黒斑	
267	盃	底径 (10.0) 残高 4.1	わずかに上げ底。	ナデ(ミガキ)	ナデ	明茶色 褐色	石・長(1~3) ○	黒斑	
268	盃	底径 (10.5) 残高 5.0	大型品。突出する平底。	タタキ(マメフ)	ハケ→ナデ (マメフ)	暗灰色 乳茶褐色	石・長(1~3) ○	黒斑	
269	鉢	残高 3.5	外反口縁。	ハケ(21本/cm) マメフ	#ハケ・ナデ →マメフ	茶褐色 茶褐色	茶 ○		
270	鉢	残高 6.7	外反口縁。	#ナデ (#ハケ(8本/cm))	ハケ→ナデ ケズリ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3) ○		
271	鉢	底径 12 残高 1.7	突出する小さな平底。	ミガキ (#ナデ)	ミガキ	暗茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ○	黒斑	
272	鉢	底径 24 残高 2.1	小さな平底。	ハケ(8~10本/cm) (#ナデ)	ハケ・ナデ	黑褐色 暗茶褐色	石・長(1~3) 金 ○	黒斑	
273	鉢	底径 (2.6) 残高 2.3	小さな平底。	マメフ(ナデ)	ハケ→ナデ	淡茶色 乳白褐色	石・長(1~2) 金 ○		
274	高杯	残高 4.3	山縁部外面に凹線文2条以上。 を施し、下位に刻目。	ミガキ	ナデ	淡茶褐色 茶色	石・長(1~2) ○		
275	高杯	残高 4.8	笠込技法。	ハケ(2本/cm)	ナデ 上痕	乳茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) 金 ○	黒斑	
276	器台	残高 3.1		ハケ→ミガキ	ロコナデ ナデ	暗褐色 茶褐色	茶 ○	漆分着	
277	分離形土製品	残長 4.5	裏面から円孔(Φ0.3cm)。	ナデ	—	暗灰褐色	石・長(1~2) 金 ○	黒斑 卷頭2 23	

表54 SD 2(1区下層)出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 質			備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
278	石塗丁	完存	結晶片岩	5.6	13.8	0.7	未製品	

表55 SD 2(2区下層)出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外觀)(内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
279	甕	口径 (21.3) 残高 2.9	山縁表面に凹線文1条を施し、凹線文上に刻目。貼付凸唇文1条+押印。	ヨコナデ	ミガキ→ヨコナデ ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○		24
280	甕	残高 5.9	原底部上位に刻文。	#ヨコナデ #ハケ(10本/cm)	ヨコナデ ハケ(10本/cm)	茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~2) ○		
281	甕	底径 (11.0) 残高 3.6	平底。	ミガキ→ヨコナデ ⑨ナデ	ナデ	淡茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~3) 金 ○		
282	甕	底径 (7.0) 残高 5.2	平底。	ミガキ→ヨコナデ ⑨ナデ、ミガキ?	ナデ	淡茶褐色 茶色	石・長(1~2) 金 ○		
283	甕	底径 (7.6) 残高 3.2	上げ底。	ナデ ロコナデ ⑨ヨコナデ	マメフ(ナデ)	茶色 茶褐色	石・長(1~3) ○		
284	甕	底径 (6.2) 残高 3.3	上げ底。	ナデ ⑨ヨコナデ	ナデ	淡茶褐色 乳褐色	石・長(1~2) 金 ○		
285	甕	底径 4.4 残高 7.0	平底。	タタキ→ハケ(9本/cm) ⑨ナデ	ハケ(9~10本/cm) ⑨ナデ→ハケ	淡褐色 淡灰褐色	石・長(1~4) ○		
286	甕	底径 4.4 残高 3.5	平底。	タタキ→ハケ ミガキ	ナデ	灰青色 暗灰褐色	石・長(1~3) 金 ○	黒斑	
287	甕	口径 (12.4) 長頸部。	口径部を上下方に強 張し、側面に凹線文3条を施す。	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○		24
288	甕	口径 (11.1) 残高 3.7	長頸部。	ハケ→ヨコナデ	ハケ(7~8本/cm) →ヨコナデ	乳褐色 淡灰褐色	石・長(1~2) 金 ○	黒斑	
289	甕	口径 (10.4) 残高 8.7	ほぼ完形品。小壺甕。	ハケ(8本/cm) →ナデ	⑨ハケ(7本/cm) ⑨板ナデ・ナデ	暗褐色 茶褐色	石・長(1~3) 金 ○	黒斑	
290	甕	残高 4.3	大型品。刻文2列。	ハケ→ナデ ハケ→ミガキ	ナデ・ミガキ (マメフ)	茶色 茶褐色	石・長(1~2) ○		
291	甕	残高 5.1	貼付山唇文1条+刻目。	ハケ→ミガキ	⑨ハケ(6.4/cm) →ナデ	淡茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~3) 金 ○		
292	甕	残高 5.4	頸部片。	ハケ	ケズリ	黑褐色 茶褐色	石・長(1~3) 金 ○	黒斑	
293	甕	底径 9.2 残高 7.2	大型品。平底。	タタキ→ハケ ナデ	ハケ(9~10本/cm)	茶褐色 灰褐色	石・長(1~5) 金 ○		24

SD 2(2区下層)出土遺物觀察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	回版
				外 面	内 面				
294	鉢	口径(30.6) 残高 4.9	口縁部を上方に拡張し、裏面に凹線。 又茶葉文。足付高さ1.6+剣足。	ハケ→ヨコナデ ナデ(ミガキ?)	①ハケ(4本/cm) ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1~3)		24
295	鉢	底径(2.0) 残高 4.6	小さな半底。	タタキナデ ④ケズリ・ハケ	ハケ(8本/cm)	乳褐色 乳褐色	石・長(1~4)金 ○	黒斑	
296	高杯	残高 6.4	脚部内面にシボリ痕。脚部上位に沈文文1条。	ミガキ	ナデ・シボリ痕	灰褐色 灰褐色	石・長(1~2)金 ○	黒斑	
297	器台	底径(21.0) 残高 3.2	脚部外側に凹線文5条以上。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 ○	黒斑	

表56 SD 2(2区下層)出土遺物觀察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量			備 考	回版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
298	砾石	ほぼ完存	不明	9.3	5.7	2.5	—	

表57 SD 2(1区上層)出土遺物觀察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	回版
				外 面	内 面				
299	甕	口径(15.0) 残高 4.0	「く」の字状口縁。口縁端部は「こ」の字状。	ヨコナデ ナデ(マツツ)	ナデ	灰茶褐色 灰褐色	石・長(1~2) ○	黒斑	
300	甕	口径(15.4)	口縁部が直立し、口縁端部は丸味のある圓をもつ。	ヨコナデ	マメフ (ヨコナデ)	乳白色 乳白色	4・長(1)金 ○		
301	甕	残高 3.7	胴部片。	タタキ	ナデ	淡茶褐色 淡黃褐色	石・長(1~3) ○		
302	甕	残高 5.7	胴部片。	タタキ→ ハケ(8本/cm)	ナデ	淡褐色 淡灰色	石・長(1~3) ○		
303	甕	底径(5.1) 残高 3.3	平底。	タタキ→ ハケ(6本/cm) ハケ(7本/cm)	ハケ(6本/cm) →ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1~2) ○	黒斑	
304	甕	底径(8.1) 残高 2.1	平底。	ミガキ	ナデ	茶褐色 暗褐色	石・長(1~2)金 ○	黒斑	
305	甕	底径(6.0) 残高 3.3	上げ底。	ナデ・ヨコナデ	ナデ	茶色 瓜色	石・長(1~3)金 ○	黒斑	
306	甕	口径(34.5) 残高 5.8	大口甕。広口型。口縁端部を上下方にヨコナデ 試添し、裏面に凹線文4条を施す。	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ ミガキ	暗茶色 明茶色	石・長(1~2)金 ○	黒斑	24
307	甕	口径(11.3) 残高 1.8	広口型。口縁端部を下方に拡張する。	ヨコナデ	ナデ	素褐色 素褐色	石・長(1~3)金 ○		
308	甕	残高 2.8	広口型。口縁端部が下方に垂下し、頭面にハラ描き(波文)斜線を施す。	ミガキ	ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~3)金 ○		
309	甕	残高 2.4	複合口縁。口縁拡張部外間に刻目。	ハケ(16本/cm) →ナデ	マメフ ハケ(12本/cm)	暗赤茶色 淡茶褐色	石・長(1) ○		
310	甕	残高 1.3	口縁端部を上方に拡張する。	ナデ(マツツ)	ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	長(1~3) ○		
311	甕	口径(9.4) 残高 3.2	小型甕。口縁部が外反する。	ミガキ(マツツ)	ヨコナデ ミガキ?	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 ○		
312	鉢	口径(11.2) 残高 3.6	小型甕。口縁部が直立する。	ナデ(マツツ)	ナデ(マツツ)	乳白色 乳白色	密 ○		
313	甕	残高 6.8	貼付凸筋文1条+刻目。	マツツ・ハクジ ⑤ミガキ	ナデ	淡茶褐色 茶色	石・長(1~2)金 ○		
314	甕	底径(8.0) 残高 8.0	平底。	ミガキ ⑥ナデ	ミガキ ナデ	暗褐色 茶色	石・長(1~3) ○	黒斑	
315	甕	底径(8.4) 残高 4.9	平底。	マツツ(ミガキ)	マツツ ⑦ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○		
316	甕	口径(26.8) 残高 3.0	口縁部外間に5条以上、口縁端部に2条の波文。	ナデ	ナデ	乳白色 淡茶褐色	石・長(1~2) ○		
317	高杯	底径(10.7) 残高 2.7	高杯外底に3条、瓶蓋部に1条の凹痕文。 瓶底下部に矢羽根透かし彫(木透彫)。	マツツ	ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2) ○		
318	高杯	残高 2.4	环部片。环部下位に棱をもつ。	ミガキ	⑨ミガキ ⑩工具ナデ?	淡褐色 淡褐色	石・長(1~2)金 ○		
319	高杯	残高 6.7	柱部内面にシボリ痕。並辺接法。	ナデ・ハケ (マツツ)	ヨコナデ ⑪ナデ・ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~4)金 ○		
320	高杯	底径(12.0) 残高 2.0	脚部片。赤色顔料付着。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1)金 ○		卷頭2
321	支脚	残高 5.6	受部。	ナデ	—	明黄茶褐色 茶色	石・長(1~4)金 ○		
322	支脚	底径(12.0) 残高 3.4	中空。	ナデ(マツツ)	ナデ(マツツ)	淡黄茶褐色 淡黄茶褐色	4・長(1~3) ○		

## 遺物観察表

SD 2(1区上層)出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
323	支脚	底径 (8.6) 残高 6.5	中空。	タタキ	ナデ	灰茶褐色 灰茶褐色	石・長(1~2)金 ◎	黒斑	
324	不明	残高 3.2	円形浮文(φ1.3cm)、上から φ0.3cmの押圧竹管文。	ナデ	マメツ(ナデ)	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長(1~2) ◎		

表58 SD 2(2区上層)出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
325	壺	口径 (13.8) 残高 1.2	小口品。口縁部は上方に拡張。 下部面に凹線文1条を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡茶褐色	石・長(1) ◎	黒斑	
326	甕	口径 (18.0) 残高 4.2	「く」の字状口縁。口縁端部は丸い。	マメツ(ハケ)	⑩ハケ(4本/cm) ナデ	乳褐色 乳茶褐色	石(1~3) ◎		
327	壺	口径 (12.4) 残高 8.5	「く」の字状口縁。口縁端部は丸い。	⑩ヨコナデ ⑪ハケ(10本/cm) ナデ	⑪ヨコナデ ⑫ケズリ	乳褐色 暗灰褐色	石・長(1~2)金 ◎		
328	甕	残高 5.0	胴部凹凸。	タタキ→	ハケ(6本/cm)	明茶色 灰茶色	石(1~3) ◎		
329	壺	口径 (32.5) 残高 10.8	大型品。広口。口縁部に凹線文3条以上を施す。 下部面に「相」と點付凸出文と「刃目」。	ヨコナデ ハケ	⑩ハケ→ミガキ ⑪ミガキ	米褐色 茶褐色	石・長(1~2) ◎		24
330	壺	残高 3.0	大型品。広口。口縁部を下方に拡張。 下部面に凹線文3条以上を施す。	ハケ ナデ	ハケ(5本/cm)	乳茶褐色 淡黄褐色	石・長(1~2)金 ◎		
331	壺	残高 3.0	貼付凸出文1条+刻目。	ハケ→ナデ	ナデ	茶色 墨色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
332	壺	底径 (6.1) 残高 3.3	平底。	ミガキ (マメツ)	マメツ (ミガキ?)	明茶色 阴茶色	石・長(1~2)金 ◎		
333	甕	底径 4.9 残高 4.0	平底。	ハケ(12本/cm) ⑩ハケ・ナデ	ナデ 工具痕	乳茶褐色 褐灰色	石・長(1~3)金 ◎		
334	壺	底径 (6.0) 残高 9.6	平底。	ハケ(マメツ)	ハケ (6~7本/cm)	乳灰褐色 乳褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
335	文脚	残高 6.7	受部。断面杏円形。	⑩ナデ ⑪タタキ	シボリ痕	乳茶褐色 灰茶色	石(1~3)金 ◎	黒斑	
336	支脚	全長 (12.3) 残高 4.5	受部。	ナデ	ナデ	灰茶色 淡灰茶色	石・長(1~3)金 ◎		
337	高杯	底径 8.1 残高 5.9	柱脚部に凹線文2条、長方形状。 透かし3ヶ所。	⑩透かしハラケズリ ⑪透かしナデ	透かしナデ	青灰色 暗灰色	青 ◎		

表59 SD 2(3区上層)出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
338	甕	口径 (20.4) 残高 2.5	折曲口縁。口縁部に刻目。網筋 上部にヘラ彫き沈文3条以上。	ヨコナデ	⑩ヨコナデ ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~2)金 ◎		
339	甕	残高 2.2	口縁部は「コ」の字状。切口。	マメツ(ハケ)	⑩ハケ→ナデ ハケ(8~10本/cm)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3) ◎		
340	甕	底径 (8.1) 残高 5.8	平底。	ミガキ	ナデ ナデアゲ	明茶色 明茶色 灰茶褐色	石・長(1)金 ◎	黒斑	
341	甕	口径 (14.2) 残高 2.6	広口。口縁部は外反し、椎節 は平坦面をもつ。	マメツ (ヨコナデ)	ヨコナデ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ◎		
342	甕	底径 (6.0) 残高 4.2	わざかに上げ底。	ハケ(7本/cm) →ナデ	ナデ	黄茶褐色 暗灰茶色	石(1~4)金 ◎	黒斑	
343	甕	底径 (7.8) 残高 4.6	平底。	ミガキ	ナデ ミガキ	茶色 茶色	石・長(1~3)金 ◎	黒斑	
344	高杯	残高 5.8	底部に沈文8条以上。内面にシ ボリ痕。矢羽根彫り透かしケ所看取。	ミガキ	⑩ナデ ⑪シボリ痕	茶褐色 灰褐色	石・長(1~4) ◎	黒斑	
345	高杯	底径 (11.2) 残高 2.8	器部に凹線文4条。	マメツ	ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	長(1) ◎		
346	器台	残高 2.4	大型品。口縁部は外反し、口縁 端部は平坦面をもつ。	マメツ	マメツ	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1~3) ◎		

表60 SD 2(礫層)出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
347	甕	口径 (16.6) 残高 6.7	広口。口縁部を下方に拡張。 下部面に凹線文3条を施す。	ハケ→ナデ	ミガキ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~2)金 ◎	黒斑	
348	甕	口径 (14.6) 残高 4.6	広口。口縁部は外反し、口縁 端部は平坦面をもつ。	ミガキ→ナデ ハケ	ナデ	半褐色 茶褐色	石・長(1~3)金 ◎		

SD 2 (礫層) 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
349	壺	口径 (15.6) 残高 4.0	広口壺。口縁部は外反し、口縁ハゼ(10~2本/cm)を施す。	ヨコナデ	板ナデ	褐色 褐色	石・長(1~3)全 ○		
350	壺	口径 (16.9) 残高 6.0	複合口縁壺。式縁文3条、波状文5条を施す。	ヨコナデ	マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1~5)全 ○		
351	壺	口径 (13.6) 残高 8.2	合口縁壺。貼付凸帯文1条+斜格子目字。	ヨコナデ	ヨコナデ ハケ(6~7本/cm)	乳褐色 灰茶褐色	石・長(1~5) ○		
352	壺	残高 8.3	貼付凸帯文1条+刻目。	ミガキ	ミガキ (マメツ)	茶褐色 黒色	石・長(1~6) ○	黒斑	
353	壺	残高 3.1	肩部片。	タタキ→ハケ	ハケ→ナデ	乳白色 淡茶色	石・長(1~3) ○		
354	壺	底径 6.0 残高 4.8	上げ底。	ミガキ ナデ	ナデ	暗茶褐色 茶色	石・長(1~4) ○	黒斑	
355	壺	底径 4.0 残高 4.6	半底。	ハケ (ケズリ状)	ナデ (ハケ痕)	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1~4) ○		
356	壺	底径 (8.0) 残高 3.4	半底。	ミガキ?	ナデ ミガキ?	灰褐色 淡褐色	石・長(1~3)全 ○	黒斑	
357	壺	底径 5.0 残高 3.8	半底。	ミガキ (ハケ痕)	ナデ (ミガキ痕)	淡褐色 淡灰褐色	石・長(1~4)全 ○	黒斑	
358	鉢	残高 2.9	底部片。	ナデ ハケ	ハケ→ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3)全 ○		
359	尚坏	残高 7.3	底部に凹縁文&目字、底部上に刻目。矢羽根透かし3ヶ所所取。内面にシボリ痕。	ミガキ	ナデ シボリ痕	乳白色 乳白色	石・長(1~2)全 ○		24
360	支脚	底径 (12.8) 残高 5.4	中空。	ナデ	ナデ	乳黃褐色 淡黃褐色	石・長(1~4) ○		

表61 SD 2 (ベルト) 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
361	壺	口径 (18.1) 残高 3.2	広口壺。口縁部下方向を抜張し、端面に凹縁文3条を施す。	ヨコナデ マメツ	ヨコナデ マメツ	淡黄茶色 淡茶褐色	石・長(1~2)全 ○		
362	壺	残高 2.1	複合口縁壺。貝殻施文による刻目。	ハケ(5本/cm)	ハケ→ナデ	淡茶色 淡灰褐色	石・長(1~3)全 ○		
363	壺	残高 3.4	無頸壺。式縁文3条+刻目。貼付凸帯文1条を施す。	マメツ	ヨコナデ マメツ	乳白色 乳黃灰色	石(1) ○		
364	壺	残高 6.7	肩部上位に獨脚波状文5条+獨脚波状文5~6条。	ミガキ	ミガキ	茶褐色 暗灰茶色	石・長(1~3) ○		
365	鉢	口径 (39.2) 残高 4.9	大型品。口縁部は外反する。	タタキ (ミガキ)	タタキ (ミガキ)	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) ○		
366	鉢	底径 3.2 残高 2.9	わずかに突出する平底。	マメツ	ナデ(マメツ)	乳褐色 暗褐色	石(1~4) ○		
367	尚坏	残高 3.6	口縁部外面に凹縁文2条を施す。底部内面にシボリ痕。差込孔(φ0.7cm)3ヶ所所取。	ナデ→ミガキ	ナデ	灰茶褐色 淡茶色	石・長(1~2) ○		

表62 SD 2 (トレンチ) 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
368	壺	口径 (16.3) 残高 4.1	広口壺。口縁部は外反し、口縁内面に竹管文2列を施す。	ミガキ	ナデ	茶褐色 褐色	石・長(1~2)全 ○		
369	壺	残高 5.0	貼付凸帯文1条+布目押印。	ヨコナデ ハケ	ミガキ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3)全 ○		
370	壺	残高 2.7	肩部片。其級文。	ミガキ	マメツ	明茶色 明茶色	石・長(1~2) ○		
371	尚坏	残高 7.2	柱部内面にシボリ痕。差込孔。	マメツ (ハケ?)	シボリ痕 ヨコナデ	乳白色 乳白色	石・長(1) ○		
372	尚坏	底径 (15.0) 残高 5.5	器部外面に凹縁文4条を施す。円孔(φ0.7cm)3ヶ所所取。	ナデ (ヨコナデ)	ケズリ	暗褐色 乳黃褐色	石・長(1)全・角 ○	黒斑	24

表63 SD 5 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
373	壺	口径 (12.7) 残高 2.6	口縁部は内傾する曲をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰褐色	青 ○		
374	壺	口径 (17.5) 残高 3.0	口縁部は内湾し、口縁部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	灰褐色 灰茶褐色	石・長(1~3)銀 ○		

## 遺物観察表

(2)

SD5出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
375	高杯	底径(11.1) 残高 2.5	柱部内面に明瞭な接をもつ。 (回転)ヨコナデ	ミガキ (マツ)	ケズリ? (ヨコナデ)	黒褐色 灰褐色	石(2) ○		

表64 SK9出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
376	鉢	口径(12.2) 残高 4.3	口縁端部はわずかに内湾し、端部が丸い。	ミガキ (マツ)	ミガキ (マツ)	淡黄褐色 淡黄褐色	長(1) ○		
377	环身	口径(11.1) 器高 4.6	底部は丸く、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。	回転ナデ (回転)ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 白灰色	密 ○		

表65 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
378	甕	口径(15.2) 残高 5.1	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。	マツツ	①マツツ ②ナデ	灰黄褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 煤付石	SP266	
379	鉢	口径(8.8) 器高 8.4	口縁部は斜く直立する。	③ヨコナデ ナデ(工具痕)	③ヨコナデ ナデ(マツツ)	明黄茶色 乳黄褐色	長(1~3) 金	SP199	24
380	桶	口径(11.6) 器高 5.4	口縁部は内湾し、立ち上がる。底部に脈状痕。	ナデ	ナデ	茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~2) 金	SP199	24
381	鉢	口径(12.2) 器高 4.2	口縁部は内湾し、立ち上がる。口縁端部は先鋒ある。	③ヨコナデ ④ナデ	マツツ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1) 金	SP333	黑斑
382	鉢	口径(12.1) 器高 4.3	口縁部は内湾し、立ち上がる。口縁端部は先鋒ある。	マツツ	マツツ(ナデ)	黄茶褐色 黄茶褐色	長(1~4) ○	SP161	
383	瓶	口径(15.9) 残高 3.8	口縁部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1) ○	SP83	
384	鉢	口径(13.8) 残高 4.7	口縁端部は内傾する面をもつ。	③ヨコナデ ナデ(マツツ)	③ヨコナデ ナデ	茶色 茶色	石・長(1) ○	SP57	
385	环身	残高 2.6	环片。後は明瞭。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ○	SP67	
386	环身	口径(9.9) 残高 4.6	底部は丸く、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。	③回転ナデ ④回転)ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	密 ○	SP96	
387	高杯	8.4 残高 3.4	脚端部は下方に屈曲する。柱部中に円孔(φ1.2cm)3ヶ所。	回転ナデ 回転)ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ○	SP266	
388	高杯	口径(10.0) 残高 8.4	たわがり端部は内傾する凹面をなす。柱部中に円孔(φ1.0cm)3ヶ所。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	SP266	
389	高杯	口径(10.0) 残高 6.6	脚端部は下方に屈曲する。反方形状の透かし2ヶ所有る。	カキメ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ○	SP276	
390	高杯	口径(10.4) 残高 4.7	脚上位に円孔(φ0.8cm)2ヶ所。垂取。	③ヨコナデ カキメ	回転ナデ 回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	SP186	
391	鉢	口径(14.3) 残高 4.7	脚部中央に凸線1条を施す。下位に波状文3~5条。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	SP30	自然釉
392	壺	口径(19.1) 残高 2.7	広口壺。口縁端部はV字形状に肥厚する。	回転ナデ カキメ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	SP120	
393	器台	残高 5.2	凸縁2条と凸縫間に波状文を施す。	回転ナデ	ナデ	深灰色 灰色	密 ○	SP144	
394	甕	口径(14.3) 残高 4.1	貼付凸唇文1条+指揮押印。	③ヨコナデ ④ミガキ	③ナデ→ミガキ ④ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ○	SP57	
395	甕	残高 5.8	大型甕。肩部にヘラ描き沈線文1条。	ミガキ	ミガキ	乳褐色 明茶色	石・長(1~3) 金 ○	SP84	
396	甕	口径(16.4) 残高 2.9	わざかに上げ底。2次燒成底。	マツツ ④ナデ(マツツ)	ミガキ (T.共底)	暗褐色 暗褐色	石・長(1~4) 金 ○	SP25	黑斑
397	鉢	口径(16.4) 残高 6.2	直口口縁。	⑤ナデ タタキ	ハケ(7本/cm) ⑥ナデ	灰色 黄茶褐色	長(1~3) ○	SP30	
398	製塙上器	残高 4.7	器壁うすい。2次焼成底。	マツツ	マツツ	赤茶色 暗灰茶褐色	密 ○	SP266	

表66 柱穴出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
399	石庵丁	1/2	緑色片岩	4.8	9.5	8.5	60.3	SP52	24

表67 柱穴出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
400	鉄鑿	ほぼ完全	鉄	42	2.0	0.3	42	SP145	24
401	鉄鋤	—	鉄	24	5.0	1.5	29.2	SP149	24

表68 第VI層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面					
402	甕	口径(17.1) 残高 4.9	口縁部は内側し、口縁端部は内側する面をもつ。	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ ハケ	灰茶褐色 灰茶褐色	石・長(1~2)金			
403	瓶	口径(22.2) 残高 5.2	口縁端部は内側する凹面をなす。	(ヨコ)コナデ ハケ(8本/cm)	ヨコナデ	灰褐色 淡茶色	石・長(1~2)金			
404	瓶	口径(29.9) 残高 5.2	口縁端部は内側する面をなす。	ナデ ハケ(5本/cm)	マメツ(ハケ)	淡褐色 淡褐色	石・長(1~2)金			
405	瓶	残高 9.3	把手で断面は横円形。	ナデ	ナデ	乳黃褐色 乳黃褐色	石・長(1~4)金			
406	鉢	口径(27.5) 残高 5.1	口縁部は外反する。	マメツ	(ヨコ)ナデ ナデ	灰色 灰色	密			
407	壺蓋	口径(12.3) 器高 3.9	天井部は扁平で、口縁端部は内側する凹面をなす。後は明瞭。	(ヨコ)輪ハラケズリ 回転ナデ	(ヨコ)ナデ 回転ナデ	青灰色 青灰色	密			25
408	壺蓋	口径(12.0) 器高 4.9	天井部は扁平で、口縁端部は内側する凹面をなす。後は明瞭。	(ヨコ)輪ハラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密			
409	壺蓋	口径 12.8 器高 4.3	天井部は扁平で、口縁端部は内側する凹面をなす。後は明瞭。	(ヨコ)輪ハラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密			
410	壺身	口径(10.1) 残高 5.1	たちあがりは短く内側する。底部外縁にへら切り痕がある。	(ヨコ)輪ハラカズリ 回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密			25
411	壺	口径(12.4) 器高 5.3	有蓋高輪の壺。つまみ中央部は凹む。口縁端部は内側する。	(ヨコ)輪ハラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密			
412	高杯	口径(11.9) 残高 3.8	無蓋高杯。肩部中央位に凸縁 1 余。下位に赤文 8~10 条。	回転ナデ	回転ナデ	黑灰色 黑灰色	密			
413	高杯	口径 7.3 残高 3.3	脚中位に円孔(φ 0.7cm) 4 ヶ所。	(ヨコ)輪ハラケズリ 回転ナデ	(ヨコ)ナデ 回転ナデ	青灰色 青灰色	密			
414	瓶	口径(15.3) 残高 6.3	円孔(φ 3.0cm) 1 ヶ所所取。	マメツ	ヨコナデ ナデ	乳黃褐色 淡茶褐色	密			
415	器台	底径(22.5) 残高 7.0	沈縁文 4 条以上。沈縁文上に波状文。脚部下位に凸縁 2 条。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 白色	密			
416	壺	口径(18.4) 残高 5.6	口縁部は内側し、口縁端部はわずかに肥厚する。	(ヨコ)ナデ ミガキ	(ハケ・ヨコ)ナデ ミガキ	麻茶褐色 灰茶褐色	石・長(1~3)金	黒斑		
417	壺	口径(15.5) 残高 5.5	口縁端部を下方に拡張し、端面に凹輪文 3 条を施す。	ヨコナデ 工具痕	(ヨコ)ナデ (ヨコ)輪ナデ(工具痕)	茶褐色 茶褐色	石・長(1)			
418	壺	口径(13.0) 残高 6.6	適合口縁部。貼付凸筋文 1 箇。	ヨコナデ	ヨコナデ	明黄茶色 乳茶色	石・長(1~2)			
419	壺	口径(18.2) 残高 6.8	強合口縁部。波状文 8 条(6 条 1 枚)、斜格子口文を施す。	ヨコナデ ハケ(8本/cm)	ヨコナデ ハケ(4本/cm)	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1~2)金			
420	壺	口径(25.0) 残高 3.8	広口部。口縁端部を下方に被覆し、前面に波状文 6 条を施す。	ヨコナデ ハケ(7本/cm)	ヨコナデ ハケ・ミガキ	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1)金	凹窪		
421	壺	口径(23.8) 残高 6.3	広口部。口縁端部を下方に被覆し、前面に波状文 4 条を施す。	マメツ (ナデ・ハケ)	マメツ	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1~4)			
422	壺	口径 4.2 残高 3.5	大口盆。内面斜材付口文 1 箇。凸筋文 4 条に 2 条。底盤に波状文 6 条+脚部。	ナデ	ナデ	乳白褐色 乳白褐色	石・長(1~4)			
423	壺	口径 7.2 残高 3.5	底部部。ハラカズシ波状文 5 条+其文 1 条。	ミガキ (マメツ)	ナデ 工具痕	茶色 茶色	石・長(1~2)			
424	壺	口径(9.3) 残高 3.5	短頸壺。	ナデ	(ヨコ)ナデ ナデ	黄褐色 淡茶褐色	石・長(1~2)金			
425	高杯	口径 8.4 残高 5.5	脚部部。	ミガキ	(ヨコ)ナデ ナデ	淡灰褐色 暗灰褐色	石・長(1~4)金	黒斑		
426	壺	底径 1.7 残高 4.5	半底。	タタキ	ナデ	淡黃褐色 淡黃褐色	石・長(1~2)金	黒斑 爆付透		
427	壺	口径 3.2 残高 3.2	内外面に赤色顔料付着。	ナデ	ナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1)金			卷頭2

表69 第IV層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面					
428	羽釜	口径(23.1) 残高 5.5	断面長方形状の柄が付く。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ ナデ	淡灰褐色 乳褐色	石・長(1~4)金			

(2)

第IV層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
429	坏	口径(11.6) 断高 3.9	回転ヘラ切り技法。	ヨコナデ	マメツ (ヨコナデ)	淡茶色 乳灰褐色	石・長(1) ○	黑斑 焼付有	
430	坏	底径(6.3) 残高 2.5	回転ヘラ切り技法。	マメツ	マメツ	白灰褐色 白灰褐色	石 ○		
431	坏	底径(8.9) 残高 1.1	底部片。	ナデ?	マメツ	白灰色 白灰色	石 ○		
432	横板	残高 12.7	脚部片。	格子印	当て具痕(無文) →ナデ消し	灰褐色 灰色	石 ○		

表70 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
433	甕	残高 4.6	折曲口縁。胴部上位にヘラ掻き沈線文4条を施す。	ヨコナデ ミガキ(マメツ)	ミガキ	乳白褐色 乳白褐色	石・長(1~3)金 ○		
434	壺	口径(24.1) 残高 2.5	口縁端部を下方に垂下し、端間に波状文5条を施す。	ヨコナデ ハケ(5本/cm)	マメツ	黄茶褐色 黄茶褐色	長(1~5) ○		
435	壺	残高 7.1	大型品。胴部上位にヘラ掻き沈線文1条を施す。	ミガキ	ミガキ	淡黃褐色 淡黃褐色	石・長(1~3)金 ○		
436	支脚	底径(8.2) 残高 11.4	タクキ痕が顯著。中空。	タクキ	ナデ ハケ(13本/cm)	淡褐色 淡褐色	石・長(1~6) ○	黒漆	
437	坏	底径(6.8) 残高 1.7	回転ヘラ切り技法。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	衛 ○		
438	輪	口径(11.3) 残高 3.7	口縁部は内凹し、立ち上がる。端部は丸い。	マメツ	マメツ	茶褐色 淡茶褐色	石(1) ○		
439	土釜	口径(24.1) 残高 6.3	口縁部下に断面三角形状の筋が付く。	(回)ヨコナデ ナデ	ハケ・ナデ (マメツ)	灰茶褐色 灰茶褐色	石・長(1~2)金 ○	焼付有	
440	網	底径(6.9) 残高 1.6	断面三角形状の高台。	施釉	施釉	灰綠色 淡灰色	密 ○	粘土: 灰色	
441	环形器	口径(14.9) 残高 5.1	天井部は丸く、口縁端部は丸い。	④回転ヘラケズリ ⑤記載ナデ	④ナデ ⑤回転ナデ	灰色 白灰色	密 ○		
442	环身	口径 10.8 器高 4.8	底部は丸い。たちあがり端部は内側に凹面をなす。	④回転ナデ ④回転ヘラケズリ	④回転ナデ ④ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
443	环身	口径(10.0) 残高 2.7	たちあがりは短く内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ○		
444	器台	残高 4.6	舞描き波状文10~12条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		25
445	壺	口径(24.3) 残高 6.5	口縁端部に三角形状で押出す口縫端部に波状文7条。口縫上位に凸縫1条と端部に波状文7条。	回転ナデ 印押・回転ナデ	回転ナデ	青灰色 綠灰色	密 ○	自然釉	

表71 地点不明出土遺物観察表 石製品(1)

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				直徑(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
446	紡錘草	完存	滑石	4.5	0.8	1.5	44.2		25

表72 地点不明出土遺物観察表 石製品(2)

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
447	石斧	ほぼ完存	緑色片岩	9.4	3.9	2.3	147.7		25
448	打製石器	完存	サヌカイト	17	1.0	0.2	0.3		

表73 地点不明出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
449	鉄鎌	1/2	鉄	3.3	3.2	0.3	4.7		25
450	鉄斧	—	鉄	5.0	3.5	1.9	44.6		25
451	鉄泡	—	鉄	3.3	3.7	2.8	48.0		25



## 第4章 調査の成果と課題

今回の調査では弥生時代から古墳時代の遺構と古代の遺物を検出した。12次調査では主に古墳時代中期から後期の遺構と古代（平安時代後期）の遺物を検出した。13次調査では弥生時代前期と古墳時代中期から後期までの遺構を検出した。ここでは両遺跡で確認された遺構をもとに集落変遷を中心にまとめをおこなう。

### （1）集落変遷

#### 1) 弥生時代

13次調査では前期前半の土坑SK1と前期後半の土坑SK4を検出した。このうち、SK4は直径1m、深さ48cmを測る楕円形土坑で土坑壁体が一部袋状となることから貯蔵穴の可能性がある。前期前半では櫛味遺跡1次調査から溝と土坑、前期中頃では櫛味遺跡5次調査から竪穴住居が検出されている。前期末～中期初頭では櫛味立派遺跡3次調査から大溝が検出されており、櫛味地区東部で前期集落が存在する可能性が示唆されている。中期の遺構は未検出であるが、後世の堅穴住居や土坑、溝などから中期後半の遺物が出土している。櫛味地区では、弥生時代後半から古墳時代の遺構内から該期の遺物が出土する事例が多く、埋戻しによる流入遺物と考えられている。後期では前半の遺構は未検出であるが、後半では13次調査において、直径5.70mを測る円形住居SB4と、一辺5mを測る隅丸方形住居SB2が検出されている。該期の遺構は調査地南東～北東側の櫛味四反地遺跡8・9次調査、櫛味高木遺跡8・9・11次調査から竪穴住居と土坑などを多数検出していることから、集落経営が順調であったことが窺われる。遺物では12次調査検出のSB1とSK1及び13次調査検出のSD2から分銅形土製品が出土した。松山平野では道後地区から分銅形土製品の出土例が多いが、櫛味地区でも遺構内から分銅形土製品の出土する割合は比較的高く、他地域との交流が盛んであったことを示唆するものである。

#### 2) 古墳時代

特筆すべき遺構は、1号大型建物、2号大型建物に続く3号大型建物を検出したことである。櫛味地区では平成10年度に櫛味四反地遺跡6次調査において1号大型建物、平成15年度には櫛味四反地遺跡8次調査において2号大型建物がそれぞれ検出されている。今回検出された大型建物は総柱構造を呈し、床面積100m<sup>2</sup>前後を越える。弥生時代後期後葉の竪穴住居に後出して検出されたことから、少なくとも建物の上限は弥生時代後期後葉以降と考えられる。なお、詳細は(2)大型建物で説明する。前期前半では13次調査において溝SD2を検出した。溝内からは、弥生時代中期後半から古墳時代前期に時期比定される遺物が混在して出土した。出土状況からは人為的に埋戻されたものと推測される。出土遺物より、大型建物と併存していた可能性が非常に高い遺構であり、大型建物と密接な関係にある可能性も多い。前期後半では櫛味高木遺跡16次調査にて一辺6mを測るSB1が検出されている。中期後半では13次調査にて一辺3～4mを測る方形住居SB3・5・6・8、後期前半では8mを超える方形住居SB9、後期後半では12次調査にて一辺7mを超える方形住居SB1を検出した。櫛味立派遺跡1次調査や櫛味四反地遺跡2～4・6・8次調査からは掘立柱建物が検出されており、竪穴住居から掘立柱建物に移行されていったことが窺える。竪穴住居の重複や切り合いが多数みられることから、櫛味地区では古墳時代中期から後期にかけて、集落経営が盛んにおこなわれていたことがわかる。

今回の調査で検出した12次調査のS B 1や13次調査のS B 9~11からは滑石製の臼玉が出土した。樽味地区では住居内から臼玉やガラス小玉が出土する事例が多く、住居廃絶における祭祀遺物として使用された可能性も考えられる。

### 3) 古代

12次調査からは包含層資料であるが、平安時代後期の遺物が出土した。樽味四反地遺跡8次調査や樽味森ノ木遺跡1次調査から10~11世紀代の土坑が検出されているほか、樽味四反地遺跡1・5次調査では自然流路が検出されている。

遺物は樽味四反地遺跡5次調査から円面鏡や奈良三彩の小壺が出土している。古代の遺構は検出事例が少ないものの、これらの遺物から樽味地区において官衙や寺院関係の遺構の存在が想定される。

### (2) 大型建物

古墳時代初頭の大型建物を検出した。これまでの調査において、樽味四反地遺跡6次調査（平成10年度：1号大型建物と呼称）、同8次調査（平成15年度：2号大型建物と呼称）で、それぞれ大型建物が発見されている。大型建物（3号大型建物と呼称）は樽味地区において3例目となるが、前述の2棟の建物と今回検出した大型建物と比較すると共通点と相違点がある。共通点では建物方位（軸線）、建物を構成する側柱や束柱の平面形態があげられる。平面形態では、側柱は柱抜き取りのために隅丸長方形を呈するのに対し、束柱は円形または椭円形を呈する点である。一方、相違点は、建物規模、柱穴規模などである（表74参照）。建物規模は床面積から、2号建物が最も大きく、3号建物の約1.5倍、次いで1号建物が3号建物の1.3倍となる。柱穴規模では、1号及び2号建物は側柱が長さ2mを超えるのに対し、今回検出のそれは最大のもので1.4mである。柱痕規模でも2号建物が最も大きく、3号建物のそれは2号建物の約1/2である。建物の時期は判断しえないが、3棟が同時に併存していたか、あるいは一時期の併存か、もしくは時期を隔てて存在したかは今後の議論の焦点となる。

今回の調査における最大の成果は、3号大型建物の検出である。しかしながら、天候不良等のため調査進行が当初の予定より遅れたことで建物を構成する、すべての柱穴を測量することができず、1・2号大型建物で確認できた柱穴抜き取り痕や堆積状況などの詳細な記録を取れなかったことに対しては、課題が残る結果となった。

そのほか、注目される遺構にはS B 9がある。S B 9は一辺8mを超える比較的大きな竪穴住居で、調査当初に切り合いや、建て替えがあるものと考え掘り下げをおこなった。その結果、住居の建て替えは判断できたが、遺物の取り上げは区別することができなかつたため、住居の詳細な時期や、内部施設の解明には至らなかった。今後、樽味地区における大型竪穴住居の調査は、注意する必要がある。

これからは、1号、2号、3号大型建物の構造や同時期の遺構確認をし、樽味地区における重要遺跡確認調査を進めていく必要がある。

表74 大型建物一覧

遺跡名	樽味四反地遺跡13次		樽味四反地遺跡8次		樽味四反地遺跡6次	
調査年度	平成17年度		平成15年度		平成10年度	
建物名称	3号大型建物		2号大型建物		1号大型建物	
建物規模	6間×5間? (10.6m×9.6m)		6間×6間 (14.2m×11.4m)		6間×6間 (12.7m×10.1m)	
床面積	101.76m <sup>2</sup>		161.88m <sup>2</sup>		128.60m <sup>2</sup>	
柱穴形態	側柱	隅丸長方形～ 楕円形	側柱	隅丸長方形～ 楕円形	側柱	隅丸長方形～ 楕円形
	束柱	円～楕円形	束柱	円～楕円形	束柱	円～楕円形
柱穴規模	側柱	長辺：60～140cm 短辺：50～100cm 深さ：64cm	側柱	長辺：107～255cm 短辺：93～160cm 深さ：100cm	側柱	長辺：98～220cm 短辺：60～100cm 深さ：60cm
	束柱	長径：45～70cm 短径：40～70cm 深さ：20～60cm	束柱	長径：70～140cm 短径：60～80cm 深さ：30～70cm	束柱	長径：50～120cm 短径：45～70cm 深さ：15～25cm
柱痕規模	20cm		40cm		30cm	



# 写 真 図 版

## 写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン90mm他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67 55mm他
	ニコンニューFM 2		ズームニッコール28~85mm他
フィルム	白 黒 ネオパンSS・アクロス		
	カラー アスティア100F		

2. 遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒ネガフィルムを使用しているが、一部はカラーリバーサルフィルムでも撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G
レンズ	ジンマーS 240mm F5.6他
ストロボ	コメット/CAS2・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	ネオパンアクロス・エクタクロームEPP

3. 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー45MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RCペーパー

4. 製版 写真図版175線

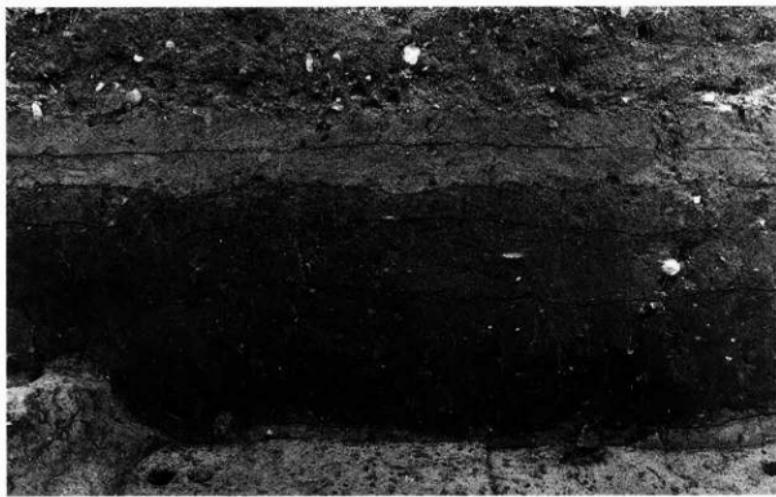
印刷	オフセット印刷
用紙	マットコート
製本	アジロ綴じ

【参考】『埋文写真研究』vol1~19 「報告書制作ガイド」

[大西朋子]



1. 調査地全景（南西より）



2. 南壁土層（北より）

図版

2



1. 東半部検出状況（西より）



2. 西半部検出状況（東より）



1. SB 1 検出状況（北より）



2. SK 1 完壠状況（北より）

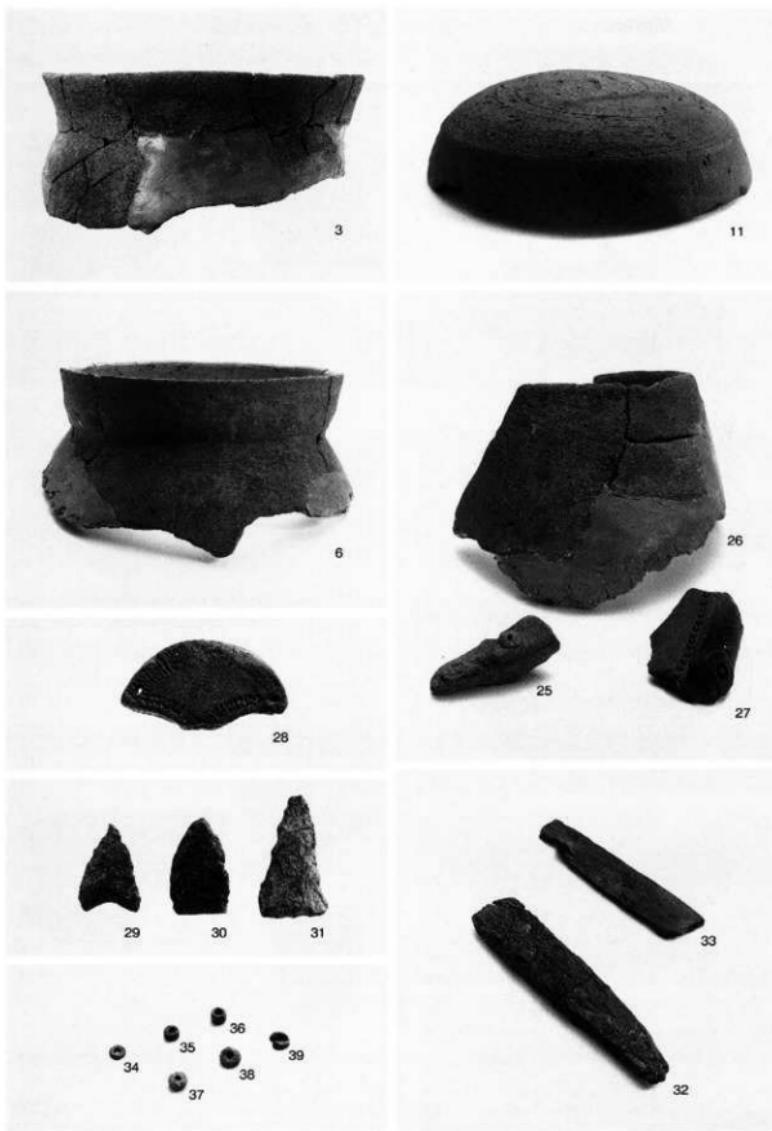
図版  
4



1. 挖立 1 完成状況（東より）



2. 作業風景（北西より）



1. SB 1 出土遺物

圖版

6



43



53



54



48



58



68



63



75



64



85



82



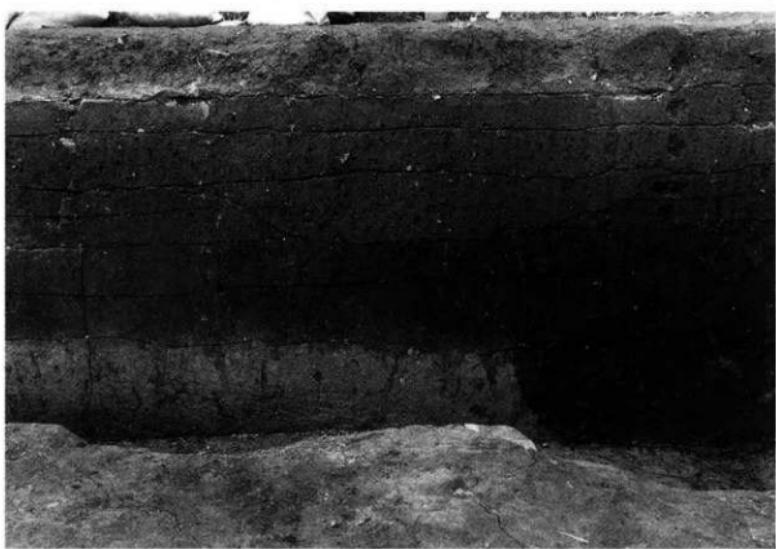
86

65

1. 出土遺物 (SK 1 : 43・48・53・54、包含層：58・63~65・68・75・82・85・86)



1. 調査地全景（北西より）



2. 西壁土層（東より）

図版

8



1. 北半部造構検出状況（北より）



2. 南半部造構検出状況（北より）



1. 遺構発掘状況（北より）



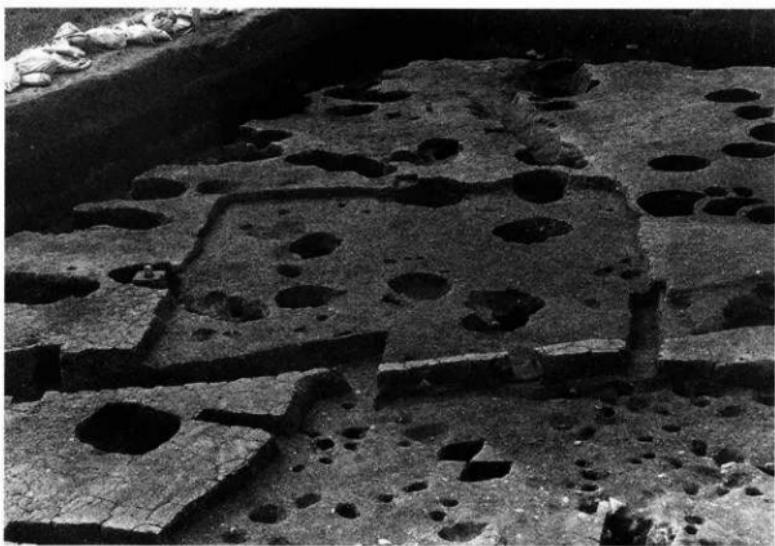
1. SB 2・10完掘状況（北東より）



2. SB 4完掘状況（北西より）



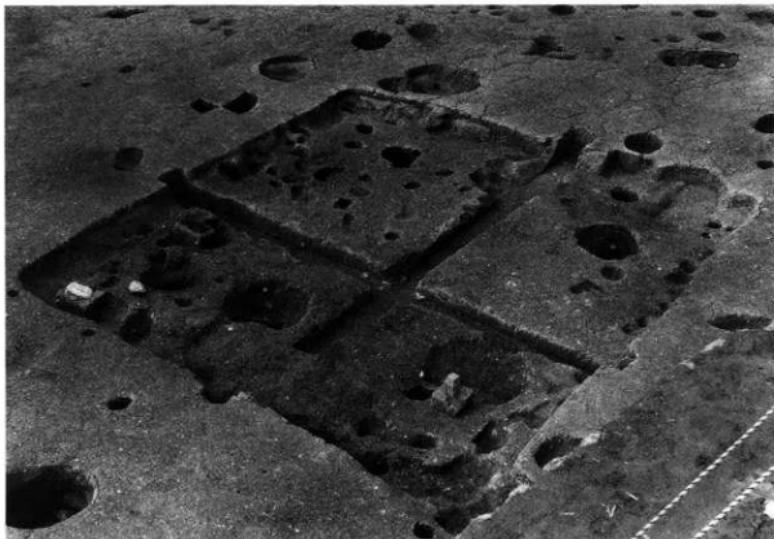
1. SB 1 完掘状況（北東より）



2. SB 3 完掘状況（北東より）

図版

12



1. SB 5 完掘状況（南東より）



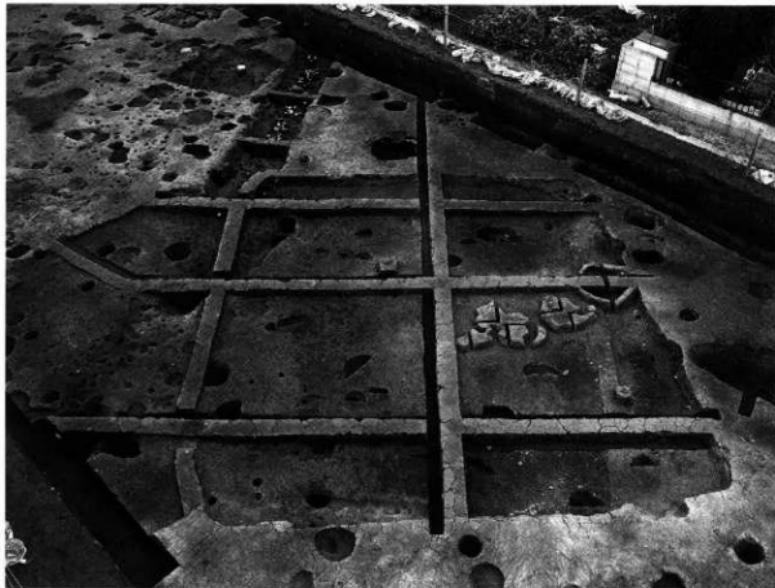
2. SB 8 検出状況（東より）



1. SB 6 完掘状況（北より）



2. SB 6 遺物出土状況（南より）



1. SB 9・11棟出土状況（北東より）



2. SB 9遺物出土状況（南東より）



1. 3号大型建物検出状況（北東より）



2. 3号大型建物検出状況（東より）

図版

16



1. 3号大型建物柱穴 (SP⑥) 完掘状況 (東より)



2. SD2断面 (東より)



1. SD 2 上層遺物出土状況（南東より）



2. SD 2 下層遺物出土状況（北東より）

圖版

18



12



19



28



38



29



40

1. 出土遺物 (SB 2 : 1・4・5・12・19、SD 4 : 28・29、SK 1 : 38・40)



1. SB 10出土遺物

図版

20



67



74

75



71



70



76



77



82

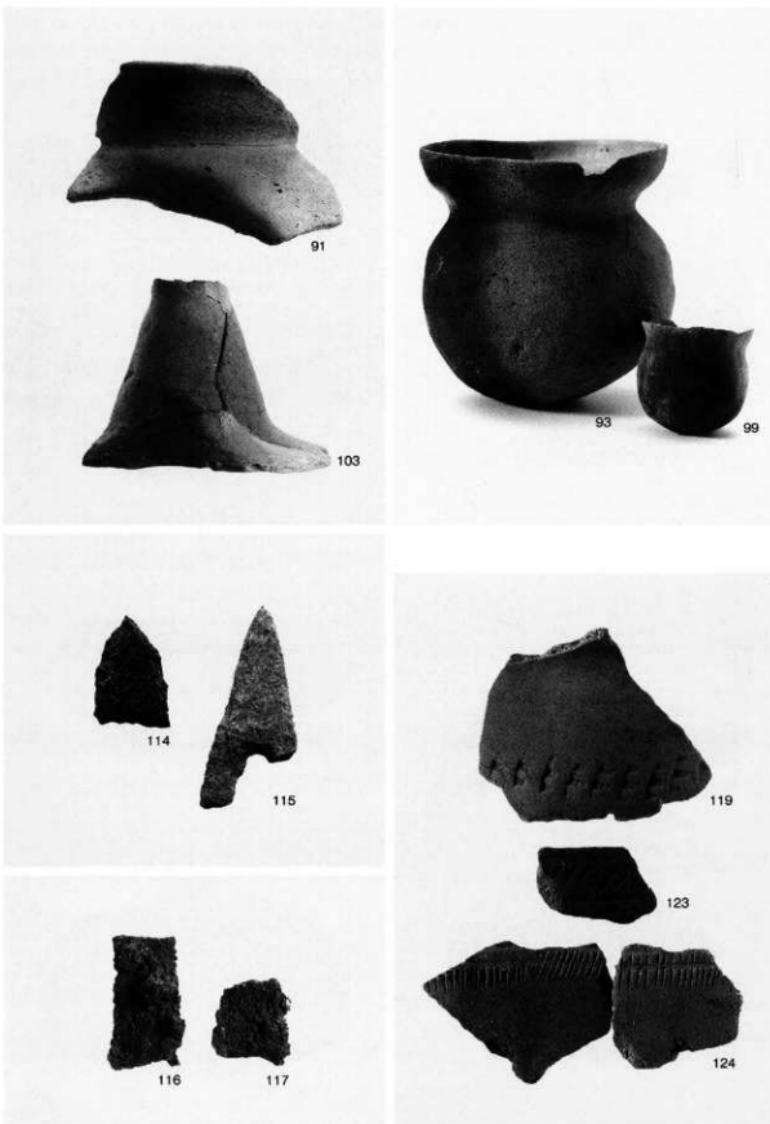


81



84

1. 出土遺物 (SB 1 : 67・70・71・74・75、SB 3 : 76・77・81・82・84)



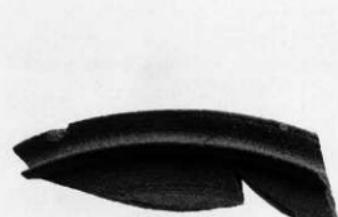
1. 出土遺物 (S B 6 : 91・93・99・103・114~117、S B 8 : 119・123・124)

図版

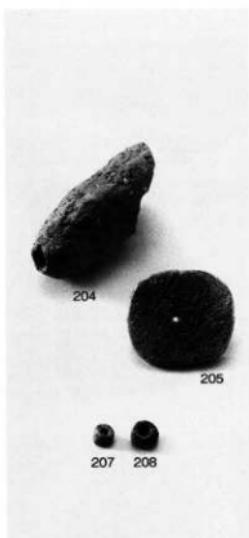
22



163



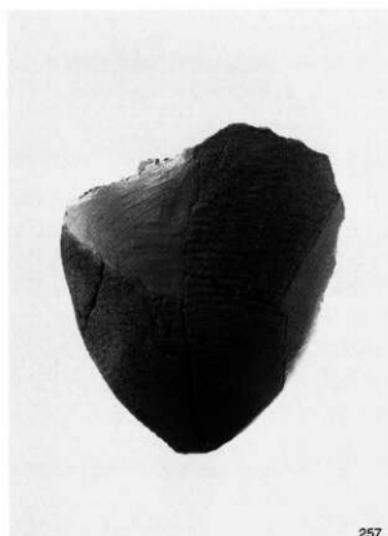
1. SB 9 出土遺物(1)



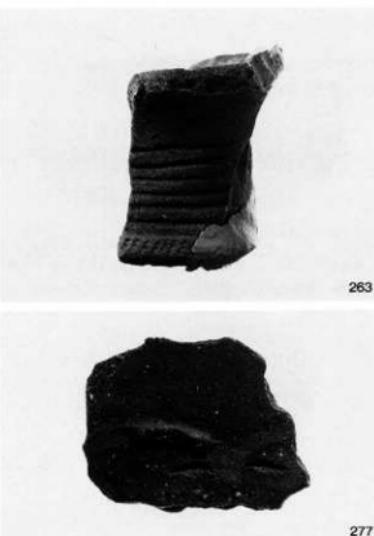
1. SB 9 出土遺物(2)



2. 3号大型建物出土遺物



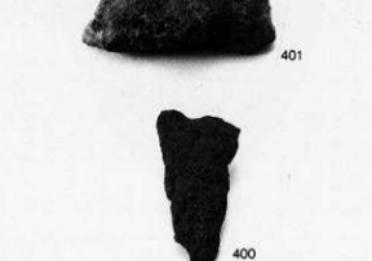
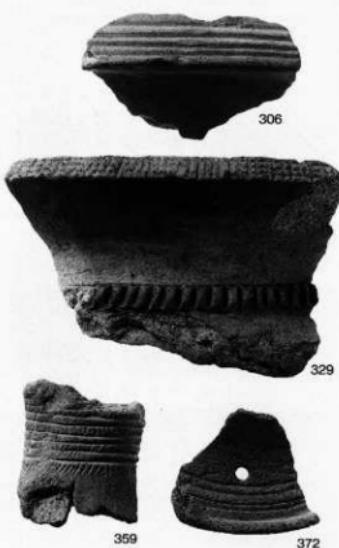
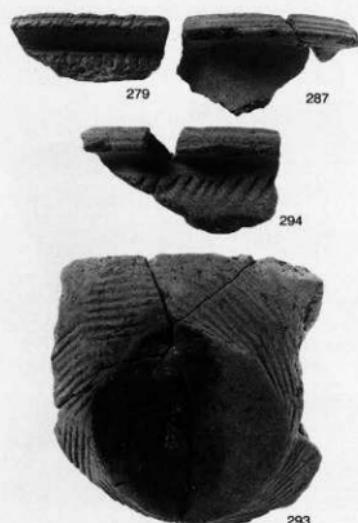
3. SD 2 出土遺物(1)



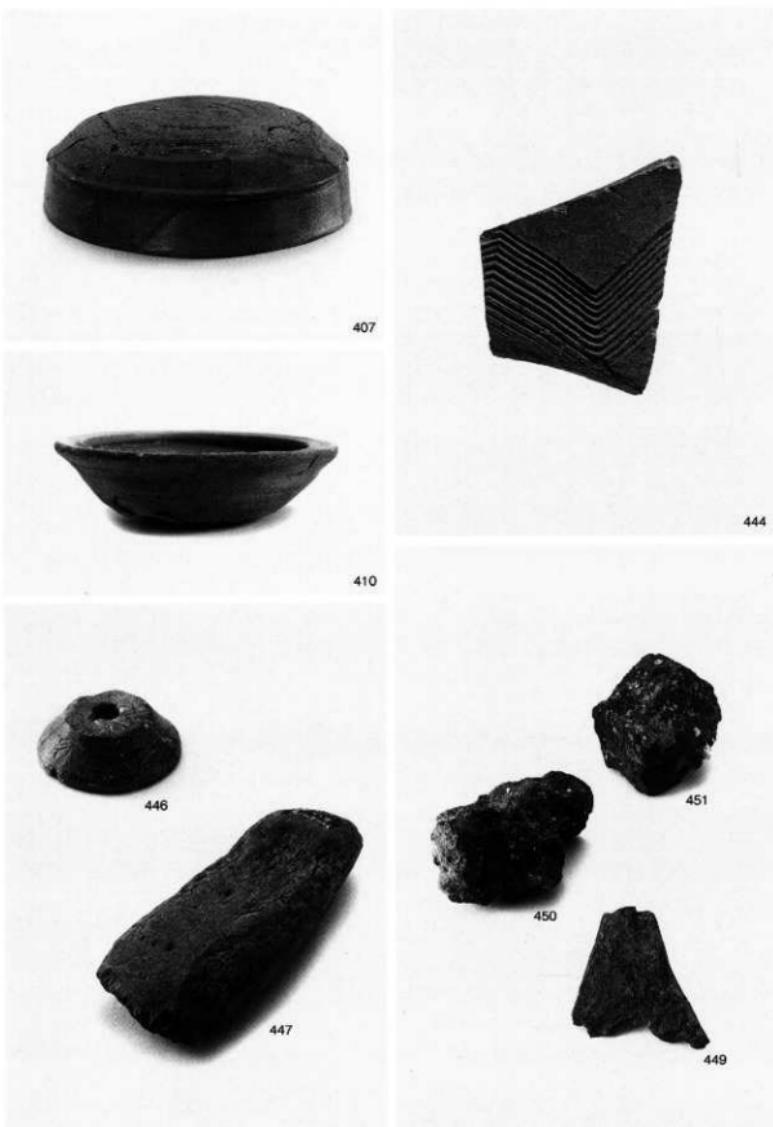
278

図版

24



1. 出土遺物 (SD 2(2) : 279・287・293・294・306・329・359・372、柱穴 : 379・380・399~401)



1. 出土遺物（包含層：407・410、地点不明：444・446・447・449～451）

## 報告書抄録

松山市文化財調査報告書 第130集

## 樽味四反地遺跡

- 12次・13次調査 -

平成17年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

---

平成21年3月31日 発行

編集 松山市教育委員会  
発行 〒790-0003 松山市三番町六丁目6番地1  
TEL (089) 948-6605

財団法人松山市生涯学習振興財團  
埋蔵文化財センター  
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6  
TEL (089) 923-6363

印刷 七キ株式会社  
〒790-8686 松山市湊町七丁目7番地1  
TEL (089) 945-0111

---

